

「獄中回顧録」

(勝ち組 アンシエッタ島抑留記)

吉井碧水

醍醐麻沙夫 編・注

序

民族の痛恨事、邦人疑獄、終戦を契機として混沌たる煙幕時代を展開する世紀変革の過渡期において、世界はあげて道義愛好の新秩序を樹立する政治に移行しつつある。しかもすべての弱小国家も独立自立の再建途上にある。

この変革期に必然的に展開する思想戦に奇現象にも同族の同胞がわれらの敵である。

なにを感じたか、かれら敗亡思想をいなく一派は、すみやかに転向して、歴史も伝統も大和魂も放棄して、祖国を誹謗し、軍部を罵倒し、ついにはおそれ多くも皇室の尊厳を冒瀆する。じつに由々しき逆賊不逞の輩である。

この人面獣心の徒は悪辣なる手段のかぎりをつくし、同胞間にまきおこしたる臣連疑獄こそは皇国の不祥事である。

かれらの毒牙にかかって善良なる同胞が生業を根底からくつがえされ、家族も破壊されて鉄窓の辛酸をなめる者いくた

りか。なかでも臣道連盟の人々はかれらに呪われ、あらゆる迫害をこうむり、苦闘の果ては流島の辛酸を二カ年半のながきにわたって凌いだのである。しかも思想戦はいまだ終息していないのである。

これらのことがいかに悲惨であり壮絶であったか、この現実を記録して歴史のページにつづらんとの念願で、獄中においてこの稿をおこす。構想も思索も意に任せず、不備はもちろんのこと文章も拙劣である。

しかしながら天地に恥じざる正義派の受難である。邪の粛清されるときがかならずくる事を信じる。そのときにこの記録がなにほどの参考になれば、私の望外の喜びである。

昭和二十三年一月六日

獄中において碧水識

(注・勝ち組 (信念派) の若者が負け組 (認識派) を襲うテロ事件が頻発したために、ブラジルの警察はおおくの勝ち組の人たちを犯人あるいは関係者の容疑で拘留した。これは負け組が勝ち組を弾圧する目的でブラジル官憲に働きかけた為だ、というのが碧水の認識である。これは彼だけでなく、当時のおおくの勝ち組の人々の認識だった。本手記の基調はその認識に基づいて書かれている。

臣道連盟リンス支部長だった碧水は終戦の翌年、四月一日に勝ち組の青年たちによる負け組へのテロが起きたとき、逮捕された。本手記は拘留中に持ち歩いていたメモをもとに、釈放後数年をついやして書かれた。ブラジル製の日記帳に細字でビッシリと書かれている。製本が日本とは逆なので、十二月三十一日のページからはじまり、一月十六日のページで終わっている。

碧水はこれを出版するつもりだったが叶わず、三十年ほどを経て 余人の手から中隅哲郎氏に託された。中隅氏は一読して資料的価値をみとめ、出版の努力を約束したが、氏も不帰の人となった。数年前、遺族の女性が「中隅様亡き後、叔父の労作は忘れられたのでしょうか」と新聞に書かれたとき、編者は「決して忘れてはいない」とご返事をさしあげた。今こうして古い手記を入力して、責を果たしている。

第二次世界大戦で「日本が勝った」と信じたことは、たしかに間違いではあるが、それ以上に、閉塞した状況のなかの人間ドラマとして読む人に訴える内容をもっている。

なお、原文の口調をほぼ写してはいるが、いくらかは読みやすい表現にしてあります。それから、本当は注などないほうがいいのですが、現代の読者に当時の社会の状況や人間関係などが理解できるように随所に注を入れました。

島の生活 3

島での苦勞と楽しみ

1 3 1

時局の種々相

1 3 9

島刑務所の寸描

1 4 3

同志との別れ

1 4 6

惨憺たる道中

1 4 8

地元同志の受難を聞く

1 5 4

裁判で判決を下される

1 6 0

カフエランジアの特攻隊について

1 6 5

刑期をおえ再び監獄へ

1 6 8

デテンソン刑務所の優雅な生活のこと

1 7 2

ふたたび島の生活へ

1 7 7

人身保護令によって釈放される

1 8 2

残留同志の釈放にうごく

1 8 7

「涯しなき思想戦を衝く」

補遺 徹心録抜粹

参考写真 地図

発端

セルビアの一青年の放った一弾は第一次欧州大戦を巻きおこし、葦溝橋であがった銃声は日支事変の導火線となり、大東亜戦争の遂行となった。

ここブラジルはバストスにおいて挙がった一発の狼煙は邦人未曾有の疑獄事件の導火線となる。

(注・バストス産組の理事で祖国の敗戦を認識した溝部幾太が終戦の翌年の一月に射殺された事件を指す。この事件によって、それまで燻っていた勝ち組と負け組の反目が表面化した)

疑獄史を綴るにあたって、いちおう、臣道連盟の沿革を記す必要がある。略称して臣連とは大東亜戦争勃発の当初、伯国が敵性国家となるや、帝国の出先官憲は同胞に一片の慰撫の言葉をのこして祖国にひきあげたのである。当時の同胞間の指導階級と称する連中はおおむね個人主義、自由主義の傾向が濃厚で、真に同胞が信頼しうる人物はほとんどなかった。

宮腰をはじめ、現在の敗亡思想の巨頭連中がとうじの知識階級だ、指導者だといばっていた頃である。

(注・宮腰Ⅱ宮腰千葉太。元アルゼンチン代理公使。元海外興業株式会社ブラジル支店長)

官憲引き揚げ後、かれらは寄託された公金を敵性産業についやしたり、あるいは同胞に帝国敗戦を強要したり、じつに同胞社会は物情騒然たるものであった。

このように統制機関も指導機関もうしなつた同胞を善処することを念願として、退役陸軍騎兵中佐吉川順治氏（きつかわ。きつかわとも）を首班としてきわめて少数の人の発案により誕生したのが臣道連盟の濫觴である。

日本精神高揚をさげんで正義人道を提唱したために、悪徳の輩のじやまになる。疑獄前すでに何回かの彼らの誣告によつて老中佐は投獄されたのである。

中佐のたくましき精神力はふかく同志の尊敬するところとなり、臣連思想は燎原の火のごとく拡がった。

（注・臣連思想Ⅱ戦時下、祖国に忠誠をつくすには、陛下の臣としてのただしい道を実践する、という考え）

求めずして魂のあいよる者を組織し、聖州一団、各線（注・鉄道線）、各市六四ヶ所に支部を結成して、臣道実践を綱領として精神文化の向上に滅私自粛機関として厳然として存在し、同胞中一二万余の連盟員を擁した大精神運動であつた。いかに適切有効に活躍したかはおおくの論を要しない周知の事実である。以上が臣連の概観である。

（注・これから碧水の手記を読み解くための予備知識として、注が長くなるのをお詫びしつつも、ぜひ書いておきたいことがある。碧水自身もそうであるが、吉川順治の高潔な人柄をしたつてその精神運動に加わつた連盟員はおおい。吉川は立派な軍人であつたと同時に謡（宝生流）や生け花、香道などもたしなむ文武両道の人であつた。しかし、彼が臣連運動を提唱したのは戦時中であり、戦中の養蚕小屋焼き討ちのアジビラに彼の名前が利用されたために当局に拘束され、釈放さ

れたのは昭和二十年（1945）八月に戦争がおわったあとの十一月のことだった。拘留中の脳溢血の後遺症で半身不随となり、釈放後ただちに勝ち組の団体として巨大化した臣連の理事長に迎えられたが、体は利かず、名前だけの理事長だった。したがって、会員たちは吉川にしたがっていると信じていたが、じっさいに臣連を動かしていたのは影の第三者であった。ここに臣連の悲劇があった。

なお、戦時中に興道社として名乗りをあげ後に臣道連盟と改称した組織の中心人物たちはすべて退役軍人の将校クラスたちだったが、彼らは遅かれ早かれ全員が祖国の敗戦を認識したと思われる。脇山元大佐は邦人社会に配布した終戦のご詔勅の文書に署名した一人だったし、山内元大尉は戦後に臣連とわかれて在郷軍人会を組織して、一般人も会員に迎えた。終戦の翌年、四月一日のテロ事件がおきたとき、保安警察は臣連よりむしろ在郷軍人会のほうが過激ではないかとうたがって主な会員三十名ほどを拘束している。しかし、取り調べの結果、釈放した。会の綱領にも「戦争の結果は時期を見て論じる」とあったそうだし、当時の取り調べの状況からみても山内が「日本が勝った」と強く主張していたらすぐには釈放されなかった。それらの状況から山内自身がすでに祖国の敗戦を認識していたと推測できる。おなじように吉川も釈放後ただちに理事長にされたが、世間に出てさほど遅くない時期に祖国の敗戦を認識したと編者は推測している。吉川も山内も自分の口からは決してそのことを言わなかったが、彼らの理性や将校としての戦闘の知識から当然「やはり、この戦争は負けた」と判断しただろう。しかし、勝ち組の総本

山の理事長になってしまったからには、そのことは口外できない。―もしかすると、側近ナンバーワンの元鉦山技師の根来良太郎にだけは話した可能性がある―

当時、これに類した立場の人の話はほかにも沢山ある。たとえば戦後いちはやく発行された邦字新聞のうち、パウリスタ新聞は祖国の敗戦を報道し啓蒙につとめたが、サンパウロ新聞はある時期まで日本が負けたことをハッキリ書かなかった。それでパウリスタ新聞の蛭田社長がサンパウロ新聞の水本社長に「あなたの新聞は祖国の敗戦を正確に報道しないでけしからん」と言ったところ、水本社長は「うちはだんだんに分からせる方針なんだ」と答えた。これは蛭田社長の直話として高木俊朗氏が「狂信」のなかで書いているので信頼できる。

ジャーナリストなら同業者には本音を言えたらうが、臣連の理事長としては、当面は、そのことは口が裂けても云えなかつたにちがいない。したがって吉川の内面の苦悩はたとえば（自身では体が利かないので）、人を介して負け組（認識派）との接触を図ったとかのさまざま断片から推測するしかないのだが、いちばんの心証は臣連の機関誌『臣連』第一号にのつた彼の文章ではないだろうか。日本が戦争に勝つたという勇ましい論文が目白押しの中なかで、理事長たる彼の文章は、当然期待される巻頭論文ではなく、なんと「母を恋うる記」という、まったく場違いなものである。小さなときの母のやさしい思い出を綴った文章で、編者が若かったときこれを読んで、やや呆れて（脳溢血の後遺症で気が弱くなっていた）としか思えなかつた。いまになってみると、祖国の敗

戦を認識していながら勝ち組の中心人物になっている彼の苦悩が、そこに読みとれるような気がする。彼は「日本が勝った」とは書けなかったのではないか。亡き母の思い出を語るうちに『国破レテ山河在リ』といった哀しみがにじんでくる。勿論、吉川は祖国の敗戦を認識しても、熱烈な祖国愛は不変だった。碧水の手記では、彼自身が戦勝をかたく信じていたから、吉川をその視点で描写している。しかし、この手記の読者諸兄には碧水の目をおししながら、なお、吉川の苦悩を読みとっていただきたいと思つて、ながながと注を記しました）

終戦後ぐらり性根をいれかえて、祖国の敗戦を宣伝する、軍部を罵倒する、さまざまな敗戦デマを持ち回つて認識せよと強要する。大衆は単純な心理でひきずられる傾向がある。放つておけない。しぜん我等と対立となる。

敗戦の外道どもはいう。「貧乏人と無知なやつらが戦勝を信じている。実情を知れ。祖国の者は食うに食なく、着るに着るものもない惨状である。現在は米国の支配下からうじて生きている。マッカーサーが日本をトマコンタ(注・差配)している。朝鮮も台湾もいまはないのだ」と。

筆にするのもおそれおおいが、天皇は平民となられた。皇后はマッカーサーの云々・・。尊敬語もつかわず平気でそれらを放言する。皇室を冒瀆する。国家を誹謗する。軍部をのしる。あまりの傍若無人に、聞き捨てならぬと反論でもすれば、たちまち官憲に報告して投獄する。

私は疑獄まえに五回も牢獄につながれ、一度は軍法会議に

までひきだされた。

私は思う。こうした状態がつづけば善良な農家の人々はしらずしらず日本敗戦を信じるようになり、自暴自棄の収束しがたい世相になるのではないかと。これは邦人の将来にゆゆしき問題である。たとえ命令はなくても皇国に生をうけたものの責務ではないか。今後は身を挺して思想戦に闘う決意をかためた。日本精神をもつものなら私とおなじ気持ちであったと思う。

世情騒然たるなかを各植民地に出張して、種々の祖国のゆらぎなき情報をパンフレットにして配布し、一方、「リンス週報」を発行して日本精神高揚を提唱し、敗戦論をくつがえすために忙しい毎日であった。

さらに、リンス地方の敗戦論の巨頭たちには「君たちも日本人ならばけっして祖国を誹謗してはならぬ。ほんとうに日本が負けたと思うならば沈黙しているべきではないか。日本人が祖国を誹謗することは不条理である」等々、多少檄文ではあったが、農田、水城をはじめ十二名ほどに郵送したのである。

（注・農田源行のうだけんこう。この地方の草分けの一人。コーヒー農場経営。「リンス沿革史」の著者）

これと前後して、バストスで溝部幾太が射殺された、マリリアで敗戦論者の生葬式をした、などの風評がしきりに伝えられる。なにか不祥事がおきそうだと、嵐のまえの予感がした。

ちようどその日は日曜日であった。支部の（注・臣連リン

ス支部)若いものが早朝から五、六人集まって週報を刷っていた。私は刷り終わるのをまって、かねて約束のあるボンダーデ植民地に行くことにして、午前十一時すぎに田中さんの運転で、大畑さんも同乗して出かけたのである。

途中で顔見知りの警察署長や兵隊をのせた車とすれちがったが何も気づかず、リンスの町外れにてさきほどの署長の車が追いかけてきて「停まれ」と命じた。止まるとたちまち包囲して私の手提げ鞆をとりあげ中のものを地面にさらけだし、大畑さんの風呂敷包みの週報その他のパンフレットとともに落花狼藉、手がつけられない。

なぜこのような乱暴をするのかと問えば、署長は勝ち誇ったようにポケットから紙片をとりだし「サンパウロの本署から臣道連盟はテロリストだから検挙せよ、との命令がきている」と。

万事休す・・・このさいいかなる弁解も役立たぬことを悟って、成り行きにまかせるしかない。さも重大犯人を検挙したように、ふきんの住民四、五人をよびあつめ、後日の証人にとかれらの氏名をひかえて署にひきあげる。

(注・サンパウロで四月一日の早朝、認識派の古屋重綱―元外交官、元メキシコ特命全権大使―、および野村忠三郎―元文協普及会事務局長―の自宅が襲撃をうけ、古屋は助かったが野村は射殺された。十人の犯人はサンパウロを知らない地方の青年でサンパウロで複数のアジトを提供されて犯行におよんだため、当局はかなりの組織が背後にあると見て、勝ち組とくに臣連のおもだった者たちを拘束して取り調べをはじめた)

署長室にて「このパンフレットを刷る機械はどこにある」と聞かれ、「家にある」と私。では、とふたたび兵隊に護衛させて私と田中をつれて家に行く。皆は仕事をおえて一服しているところであった。家内も娘も若い人らも呆然として不安げであった。

私は「若い人たちは日曜であそびにきているだけで関係はないのだ」と。署長は「このマキナ（機械）は誰が操作するのだ」と聞く。「私が使う」と田中。そのとき奥から「それは自分がつかうのだ」と養子（注・娘婿）の宮原がでてくる。「おまえも来い」と宮原も連行されて署にひきあげる。私の平素をしる署長は家宅捜査まではしなかつたので、よほど安堵した。

署長室にて午後二時半、町の敗戦の靴屋を通訳によんで、私の取り調べがはじまった。この靴屋は伯人を妻にして子供が三人、日本語をろくに解しない男である。

署長「おまえは農家の者をいつわって金を集めていると聞か、事実か」

私「そんなことは絶対にない。農家の人にたずねればすぐ分かる」

署長「日本が負けたという日本人を、みんな殺すのか」

私「そんなことは常識でかんがえても分かる。この地方ではそんな乱暴なことをさせないように、私が注意しているから何も問題は起きないのではないですか」

「バストスの溝部殺しと関係があるか」

「私たちの知ったことではありません」

「お前たちは日本が勝ったというが、現に日本は負けている

ではないか」

「日本は負けるような戦争は決してしない。自分の知っているかぎり、断じて負けていない」

「なにを証拠に日本の戦勝を主張するのか」

「日本人がこの地上からなくならないかぎり、私は負けたくはない」

以前二三回私を調べたことがある署長は（度し難い）という顔をして形式的な尋問をうちきった。だいたいのやりとりを書記がタイプして調書をつくった。

次は大畑、田中、宮原の順でしらべる。やりとりは私の場合と大同小異。終わったのが午後七時ごろだった。看守の詰め所に時計その他をあげて、ついに鉄窓の人となった。家族の者たちは毛布や食事などの差し入れでなかなか忙しい。なんのための留置かわからず不安そうである。

牢屋には先客の伯人囚が四人いる。いずれも破廉恥らしい顔つきだが、いろいろと世話をしてくれる。

私はすでになんとか経験があるのでさほど窮屈を感じないが、他の二人ははじめての牢屋で興奮して、せっかく差し入れてくれた食事も碌々喉を通らない。かくして、これが二年半の長期にわたる疑獄の初夜であることは神ならぬ身に知るよしもなく、敗戦者の悪辣な策動を痛罵したり、連盟の前途を憂いたりして夜がふけていった。

十一時過ぎ、とつぜん、大畑の敏美が私たちの部屋に入れられた。聞けば、臣道青年会を組織しているなどと〇〇が密告したために、ろくに調べもせずぶちこまれたという。これは事実無根の密告である。とにかく私ども親子、大畑親子、

田中と五人になった。

寝られぬままに私の脳裏にうかぶのは、十日ほどまえにサンパウロの臣連本部において連盟の将来についていろいろと懇談したおり、連盟員の団結が強固なために敗戦派には脅威である。彼らはなんども密告して、そのつど事件をひきおこす。これを防ぐには合法的に臣連を公認団体として認められるよう請願することに決め、弁護士モラーエス氏をつうじ連邦政府に諸手続きを完了したのが先週である。したがって公認されるのは時日の問題である、とM氏は確言されたのだった。

そして、その請願書の写しは日伯両語で、私はそれを持ち帰って同志にも披露し、バウルの特高課の署長にも田中の通訳で了解をもとめたのが一昨日のことだった。

こうして公認となれば堂々と敗戦運動撲滅に邁進することができると秘かに快心の矢先、検挙されたのである。じつに奇怪千万の投獄である。おもうに、かつて敗戦どもが「いまにみよ、臣道連盟はとおからず一網打尽にされる」などと流言していたが、さては、臣道連盟は秘密結社である、テロリストである、などとの讒言によつての、この弾圧検挙であるとするれば、事態は容易ならぬ事件に発展するという一抹の不安がひしひしと胸に迫る。果てしなき瞑想に一睡もせず夜があけた。

(注・ここにも述べられているように、臣連は自分たちが公認団体になれば、ブラジル政府も日本の戦勝を認めたことになり、認識派との紛争に勝利をおさめられる、という幻想に

とりつかれていた。これは臣連だけでなく、他の類似団体もおなじで、在郷軍人会なども臣連と公認の先陣争いをしてきた。なお、公認問題で臣連関係者から最初に相談をうけたのが、おそらく、サンタナ氏だったろう。戦中の養蚕小屋焼き討ちなどに関して臣連幹部の根来良太郎や渡真利成一などへの事情聴取のさい通訳をつとめたので、彼らと顔見知りだった。テロが起きたとき、公認のために提出した書類やリストがあったので臣連幹部が芋づる式に拘束されたために、サンタナ氏があたかも警察のスパイであったように言われたりしたが、時間的な因果関係を無視した言いがかりである。サンタナ氏はのちに日本語普及会で日本語教師をつとめたり、日系社会と関わりが深い人だった)

早朝から家族の者はカフェーだ食事だと忙しい。

午前十時ころ支部員三名を投獄したのを皮切りにつぎつぎと引致して、十二名、私たちの向かい側の牢屋に入れる。みんな元気で頼もしいかぎりである。看守が日本語を禁止したので、外部の混乱状態もはっきりとは分からない。

私は朝の弁当のカラに、(ただちに本部に連絡し、逐一報告すべし)との紙片をいれた。夕食のなかに(瀬戸、権藤両名が連絡のためサンパウロの本部へむかった)と知らせがあった。

入獄三日目・伯字紙の報道によれば、本部をはじめ各地の支部をいっせいに検挙したものとごく、写真入りで大々的に報じている。論調はいずれも臣連を人殺し団体だと毒づいている。火の手、ますます拡大の模様である。これではあ

きらかに正義派の受難であり、手の施しようがない。成り行きにまかせるしかないとの感を深めた。

入獄四日目・サンパウロ市新聞社の写真班がきて、われらをいろいろな姿勢で写し、さいごは中庭で全員十八名を写す。完全に重大犯あつかいで、なんたる錯誤。憤懣はすれどここにいたっては反抗は許されない。

その後、支部の人を引致しないところをみると、逮捕は一段落ついたのかもしれない。やや愁眉を開く。しかし、依然として毎日の新聞は臣連弾圧の記事を満載している。本部などは根こそぎ襲われたらしく、惨たる写真がのっている。かのごとく、伯字紙まで（敗戦派が）買収して側面から事件をあおれば、いつ果てるべきもない。

（注・前年に「日本から戦勝慶賀団がくる」という噂にのせられて祖国の戦勝を信じる日本人が一千人以上といわれるーサンパウロ市に集結したことがあり、勝ち組の存在はジャーナリズムの好奇心をそそっていたところに大がかりなテロが発生したので、報道合戦が過熱した）

来る日も来る日もあわただしく、騒然として二週間がすぎた。

ある日、看守が明日の午後四時の汽車で五人だけサンパウロの本署に送るから家族に準備をさせよ、という。五人とは私親子、大畑親子と田中である。さつそく家族に伝え、あすの旅行の準備をしてもらった。

各自の家族はさぞ驚いたことであろう。留置場であとに残る若い人たちをやく出してくれればよいが、彼らはいずれ

も朗らかで、さらに悪事をおかした顔ではない。

いよいよ明日聖市（サンパウロ市）に護送されるとなれば、本部をはじめ各支部がいつせいに検挙されたこととて、全同胞に大混乱が生じているようすが私の瞼に浮かぶ。そして、これらの人は熱烈な祖国愛、同胞愛にもえる、日本精神に生き抜く人々である。われら臣道連盟は結成にあたり、人物審査を厳重にして、国家社会に滅私を誓い、正義人道を唱導する機関であった。それゆえに、罪悪的ななものもないことは在伯同胞の認めるところである。それをなんぞや。たとえ敗戦派が大金を掴ませたかしらないが、事実の調査もせず、人権も蹂躪して、無辜の民を投獄するとは奇怪である。あれを想い、これを考え、私の憤懣は果てしなくつづく。

ああ、非国民よ、明記せよ。祖国が世界再建のために戦争の結果を発表しなくとも、ブラジルが政治改変の過度期であるにせよ、世界各国に新秩序が生まれ、暫時移行していることをなんと解するか！ これこそ祖国の戦勝、国是遂行の現象なのだ。

これからの世界の思想は日本精神が規範になることは一点の疑う余地もないのだ。

敗戦派はさまざまな奸策を弄して正義を苦しめるかもしれないが、天はあくまで正しき者の味方であることを銘記せよ！ 同胞の一人でも悪思想に蝕まれることは天皇の赤子を失うことで、ゆゆしき不祥事である。ゆえに我等はいかなる迫害にも耐えて思想戦に打ち勝つのだ。見よ、祖国の同胞は百難を突破して世紀の扉をひらいたではないか・・・と、自問自答して夜を更かす。

連日の伯字紙の報道はますます臣連をテロ団として毒づいている。我等の前途、多難をおもわせる。

聖市に護送される。

今日は聖市に護送される日。

昨夜、支部員には、

「責任者である我々を聖市に送るようならば、残る人はあんがい早く出獄させるかもしれない。いずれにしても、お互いに最期まで頑張らなければならぬ。残る人もご苦労です。体を大切にしてください」

と、別離の情は悲劇であるとともに涙なくしてはおられない。

正午ころ、特別とあって、家族との別れの面会をゆるされる。着替えなどをつめた鞆、毛布など遠国へ旅立つような支度である。

各自の家族も総出で、署内は騒々しい。後事を託し、なにも不正を犯したのではないから、あまり長くはかかるまい。家族のものも、不意に、夫を息子を親を罪人あつかいにされて、ろくに口もきけない。いじらしい限りである。不覚にも目頭に熱いものがこみあげる。おなじ想いの家族のものも、後は心配されずに体に気をつけてください。万感こもごも名残はつきない。

やがて私らを駅まで護送する車の準備ができ、武装いかめしい六名の兵隊が私らをうながした。家族との別れは署の前

までで、駅への見送りはゆるされない。

駅では署長以下十四、五名が人垣をつくって警戒はものものしい。汽車を待つあいだにも大勢の群衆が「テロリストだ、人殺しだ」とヒソヒソ囁きながら我等をのぞきこむ。なんたる侮辱であることぞ。はるか後方で数名の支部員が目礼をしているが、おたがい言葉を交わすこともできない。

汽車が着くと間髪を入れず我等を追い込む。汽車のなかでも一人に一名の兵の護衛である。重罪人のあつかで窮屈なことである。悲憤の我等をのせた汽車はいちずにバウルをめざして進む。

午後九時過ぎ、バウル駅についた。

パウリスタ線のサンパウロ行き列車を待つあいだが、また、たいへんな騒ぎである。ホームで兵隊に護衛されている我等を群衆がとりまき、なんだかんだと悪罵をあびせる。無念だが喧嘩にならない。兵隊はニヤニヤして群衆を追い払おうともしない。「顔から火がでる」とはこのことか。あとにもさきにも、これ以上の恥をさらしたことはない。

窮地の我らを救うように、汽車がきた。蘇生する思いで乗り込んだが、超満員で席がない。兵隊のひとりが席をさがしにいった。しばらくすると「来い」という。乗客らを立たせて十一人分の席をつくったのだ。兵隊の護衛はうとましいが、こんなときは便利なものだ。

席に落ち着いてからあたりを見回すと、やはり兵隊付きの、我らとおなじ境遇の顔見知りがそこかしこにいて、お互いに「ヤアー、ヤアー」と挨拶をかわして賑やかなことである。私の席のちかくに娘さんをつれた奥さんが二人いる。話

してみるとポンペイア市の佐藤、辻両氏の奥さんである。

佐藤氏の奥さん曰く「主人がガベネツチに収監されているから面会にいくのです」

辻氏の奥さん曰く「悪人が善人を牢屋に入れるなど、ブラジルはなんでもアベコベですね」と、まったく至言である。

また曰く「わたしの娘も臣連処女会をつくったとか密告されてオーデンポリチコ（保安警察）に送られるのです」と。

見れば妙齡の娘さんにまったく不似合いな兵が付き添っている。義憤を感じるが、さすがにこの人たちは日本人である。取り乱したようすはない。

げに運命とは不可思議なもの。このご両人の主人方とはつい二週間前、本部において連盟の将来や支部の発展など親しく語り合ったばかりである。

私の想念は千変万化・それからそれへと果てしない。同行の大畑老と田中は疲労したかコクリコクリ。敏美は元気に兵隊をからかって、いたった朗らか。養子の宮原は小心者か、不安げで元気がなく、なにか考え込んでいる。その目つきも尋常ではない。

私もいつのまにかウツラウツラとなにほどこまどろんだ。早朝にサンパウロの駅についた。にわかの大混乱で、人込みにおされて、心ならずも二人の奥さんと挨拶もできずに別れた。

我らは嚴重に兵隊に護衛されて、駅前に整列し、一列にならび、両手に持ちきれないほどの荷物をかかえながらオーデンポリチコに向かった（注・略称DOPSドップス。サンパウロ政治社会警察）。四月の中旬というように、さすがにサ

ンパウロは肌寒い。

(注・四月一日にサンパウロでのテロ事件があり、警察は時をおかず臣連幹部の拘束にのりだした。碧水らは地元警察に二週間ほど留置されてからサンパウロに送られた)

早朝から電車に乗るものも多数である。道行くものは異口同音に「臣道連盟だ、テロリストだ」と冷笑して通る。このように、一般の伯人も「シンドウレンメイ」という言葉を記憶するほど、事件は拡大しているのかと、私は暗い気持ちになった。

やがてオーデンポリチコに着く。サンパウロ州の元締めだけあって大きな建物だ。エレベーターはあるが、我らは階段をいくつも曲がって四階へ。この待合室で「しばらく待て」と言い残して、兵隊は我らの証拠物件でもあるのか大きな袋をさげて、おくの部屋に姿をかけた。一時間ほど待つと、ようやく報告をおえたのか、部屋からでてきた。こんどは私たちをうながして最下層の部屋に案内した。入り口の部屋が看守室で、奥が地獄らしい。人相のよくない看守が一人、あくびばかりしている。

私たちの受け渡しやすむと、同行してきた兵士たちは笑顔になって、おのおの握手し「アテローゴ」(ではまた)と挨拶をのこして去っていった。大任をはたした晴れやかな表情をして。

看守はなれた手つきで私たちの荷物を点検して、マツチと刃物はとりあげ、あとは監房に持ち込んでよい、と。金は盗まれるおそれがあるから、少額だけでもって、あとは預けて必要なときに渡してやるという。ここにも私は不可解なブラジ

ルの慣習に驚く。金をもつてもいいとは、獄舎内でも買ひ物ができることで、盗まれるおそれがあるとは、獄舎内にも泥棒がいるという意味ではないか。

そんなやりとりをしている間にも、奥のほうで「はやく飯をもつてこい！」という怒鳴り声、大声で日本の歌をうたっている声、・・なかなか賑やかである。

オールデンポリチコに收容される。

皇国の民よ、銘記せよ！ この建物の四階の一室で、非国民の同族の一派が陣取って、白昼堂々と我らの国旗を踏ましたり、おそれおおくも御真影を跨がしたり、しかも手足の自由を奪つてである。かくのごとき大不敬が古来あったことを聞かない。あるいは看守や刑事たちを示唆して、ゴムの鞭で殴打する。じつに地獄の鬼畜もかくやと思う迫害を加えられながら、日本人たる気概を断固としてしめし、苦しい思想戦をたたかったことを。

私たちは三号の監房にいられる。先客として、本部にいた渡真利君、佐藤君以下二名。ほかに町の風来坊一名がいた。おたがい手に手を握り、しばし感慨無量だった。

この部屋は十畳敷ほどもあるうか。中を通路にして、両側にクツションをしき、休憩、寝る、食う、の場所である。奥に毛布でしきった便所と洗面所がある。不潔きわまる獄舎であった。入り口の扉は厚い板で、八寸ほどの鉄の小窓が差し入れ口である。両隣は会話を遮断するためか分厚い壁になつ

ている。ざっと、これが獄舎内の点描だ。

私たちも自席をきめて落ち着いたが、宮原がまだ来ていない。一抹の不安はあつたが、他の監房に入れられたのだろうと、強いて考えて落ち着く。

渡真利の話によれば現在ここには独房四室、大部屋五室もほとんどが臣連の関係者で充満していると。およそ三十名が入っている由。デテンソン刑務所には吉川、根来をはじめ(注・吉川順治、臣連理事長。根来良太郎、臣連専務理事)、約二百名はいる筈と。

(注・カーザ・デ・デテンソンは当時の警察制度では「拘留所」にあたる。逮捕した容疑者を警察署のなかの留置所にいれ取り調べ、容疑がかたまって検事が起訴することになれば拘留所に移すのだが、この事件では拘束した人数がおおかったので、かならずしも、その手順をふんでいないようだ)

去る二日、本部が襲われて検挙されていらい、地方の支部からもぞくぞくと送られてくる。ここに数日留めて、いちおう調べてからデテンソンに集めているので、大きな部屋に足の踏み場もない超満員であると。

(注・この説明にしたがうと、二日に拘束された渡真利が二週間以上もここに居るのは、当局が事件の首謀者という容疑を濃厚にもっていたことを示すのではないか。なお同房の「佐藤君」は佐藤正雄で渡真利とおなじマリリア近郊の入植地の出身で、戦中の「赤誠会」いらいの渡真利の同志であり、戦中の活動資金の提供者でもあった)

私は啞然とした。あるていど予想はしていたものの、かく

も大がかりな網が張られていたとは驚くべき弾圧である。

車の軋る音がして、朝食が配られた。ちいさな洗面器のよ
うな器にカルネ(肉)もフェジヨン(豆)も飯も混入して、
小窓からさしいれる。嫌いなカルネの臭気に、腹はすいてい
るのだが更に食欲はおきない。

渡真利いわく、

「誰でもはじめは嫌だが、食わなければ体がもたない。これ
でも慣れればけっこう旨くなります」と。

田中親子も見ただけでウンザリしている。

・・・しかし、つぎの夕食からは食うようになり、そのうち
おいしくさえなった。これも環境のしからしむところだろ
う。

他の部屋にいるはずの宮原は汽車のなかでいくらか病的で
あったが、どうしていることだろう。私も囚われの身なので
どうすることもできない。運命にまかすしかなく、可哀相な
者である。

聞くところによると、すでに二週間以上まえに本部に連絡
するために出聖した瀬戸、権藤両氏は四日の日に宿をおそわ
れて逮捕され、現在はデテンソンにいらするという。その日は旅
館など一斉に日本人が拘束されたという。ほとんど疾風の如
く拒む者も強制的に引致されたという。なんたる無法な検挙で
あることか。

所用で出聖した人もあろう。病人をかかえて薬をもとめに
でた人もあろう。帰宅をまつ家族の焦慮。ゆえなくして不条
理に拘引されるものの激憤。じつに吾が同胞の混乱状態は言
語にぜつするものがある。

その夜、またまたカンポス・ジヨルドンの二人と、パウリスタ方面より引致した青年二人を私たちの房にいれる。広からぬ房はギッシリで、身動きすら困難になる。

カンポスの人がこもごも語るところを要約すると、「病気療養中を去る四日に検挙されて、昨日までデテンソンにいたが、医師が診察して病気を認めてくれて、釈放された。今夜はここに泊まって、あす家に帰る。

当初、日本人であればみさかいかなく拘束したため一時は四百人以上もいたが、一三日たつて一人一人呼び出し、日本の負けたことを認める者は釈放し、つぎにはブラジル生まれの子供がある者を釈放したから、いまは百四、五十人になっている。別室に婦人を三人監禁している様子。吉川、根来両氏は他室におられる。大部屋はぎつしりで足の踏み場もない。毎日、各自が隠し芸を披露し、たいへん賑やかで退屈はしない。『コチヤ産組』の荷物自動車で米だの野菜だのを運搬するのを再度ならず目撃したが、敗戦派が私どもを食わしているようである」云々。

皆も獄中にいることをしばし忘れて大笑いする。また曰く、野村殺しの特攻隊とその関係者、古屋を襲った青年などは「ガベネツチ」に収容されていると。昨日いらい汽車中もろくろく睡眠もせず心身ともに疲れていると言いながら話はずきない。

(注・こ)で「特攻隊」という言葉がでてきた。四月一日のテロは総大将―引率者―の新屋敷が欠けて、五人ずつ二手にわかれた十人の隊員で決行されたが、持参の日の丸に一隊

は「特行隊」と書き、一隊は「決死隊」と書いた。逮捕されたとき、ブラジルのジャーナリストに「KESSITAI」は耳慣れなかったが「TOKKOTAI」は第二次大戦末期の神風特攻隊としてまだ記憶にあたらしかった。それで新聞の見出しには「KAMIKAZE」「TOKKOTAI」の文字が踊り、邦人は神風特別攻撃隊の略の「特攻隊」の字をあてるようになり、以後の勝ち組による襲撃を「特攻隊」と呼ぶようになった。

獄舎の夜はしんしんと更けていく。みんなも眠気をもよおす。いつとはなく、誰ともなく、寝息をもらす。私もいつか夢路をたどった。

翌朝、私が目覚めたとき、すでにカンポスの二人はいなかった。いつ出獄するともしれずに残る者、いそいそと家路をいそぐ二人。人の世は悲喜こもごもである。

事件の推移を冷静に総合すれば、非国民どもが不合理なやりかたで信念派を敵視するために、血の気の多い若い者を激昂させ、そのためますます危険をかんじて官憲に密告し、弾圧するために、事態はますます容易ならざる方向の修羅場をむかえることが予想され、私はおもわず慄然とする。

ブラジル当局は治安を維持するために、かくのごとき事件を展開しているのだろうが、正義の者を一方的な誣告によって大量に逮捕し、それが長期にわたるなれば、生産にも甚大な被害がしようじ、将来、祖国との国交回復のうちに、この一方的な事件が祖国に悪印象をあたえることか。それがおそらく禍根となって、戦前のごとく円満な親善は望めないであ

ろう。ああ、ブラジルの将来のため、具眼の士の出現を待望するや切たるものがある。

次の日には青年二名もデテンソンに移された。

入獄三日目。午後一時過ぎ、私と田中がよびだされ、エレベーターで四階にのぼり、奥の部屋へ連れて行かれた。田中をのこし、私一人がさらに奥の部屋へ。ここが署長室である。

入ったとたん、私は驚異の目をみはった。部屋一杯に臣連の支部旗、その他日本文字の書類が散乱している。もったいなくも我らの至尊の御尊影をこころなき事務員の手で折り曲げられ、無造作にとり扱われているのを見たとき、じつに口惜しさに無念の涙を堪えられなかった。正面の壁には「マケタ」とカタカナで大書して、しかも逆さまにぶら下げている。およそ我らの国家皇室を侮辱することかくのごときである。

やがて署長があらわれ、つづいて書記と通訳もはいつてくる。優しそうな署長。彼はジェラルドといって臣連事件の係。通訳はサンターナと自己紹介した。

そして私への尋問がはじまった。

署長・皮肉そうに・・・「日本は勝っているネ」

私 「そうです」と、うなづく。

署長 「農〇〇水を知っているか」(注・リンスの農田源行のこと。水とあるのは水城のことか)

私 「知っています」

「机の引き出しから一通の手紙をだして」これはお前が書い

たのか？」

「ええ。たしかに私がだしたものです」

「この手紙には彼らを殺すと書いてあるそうだが、なぜ殺すのか」

「人を殺すなど、後日の証拠になるようなことを手紙に書くようなバカはいないでしょう」

通訳のサンターナは署長となにか話しながら顔をみあわせて笑っている。そして私に「この文中には殺すという文字はないことを説明したのだ」と日本語でいう。

私の返事はすべて通訳を介するのだが、じつに鮮やかな日本語である。(注・サンターナさんは日本人農家の手伝いをしているうちに日本語を覚えたという。もちろん、のちに本格的に勉強した)。かれら敗戦どもは文中にない文字まで読んで聞かしたのであろう。じつにあやふいかな。

「お前は碧水という名のほかに、もうひとつ名がある。なぜか」

「日本人でもマリオとかジョンとか言うのと同じです」

署長は、嘘であろうというような顔をして通訳をみているが、どうせいい加減な調書をつくるのであろう、深くは追求しない。

「おなじ日本人で、なぜ勝った、負けた、と騒ぐのか？」

「顔は日本人でも、思想がユダヤ思想になっているために、我らと相いれないのです。ただ、勝った、負けただけなら争わない。もし、彼らのいうように事態を放っておけば、祖国をすてて墮落する日本人がふえることを我々は憂いている」

「お前はユダヤのことを知っているか？」

署長の質問があつたので、私はここぞとユダヤ思想の恐るべきことを述べ、祖国をもたないメシヤ民族は遠大な計画をもつてあらゆる国を攪乱し、国を弱らせ、ついにユダヤ王国を樹立し、世界人類の支配者たらんと、すでに千年もまえから企んでいる。各国にあるロータリークラブもフリーメーソン結社もことごとく彼らユダヤの謀略機関であると論破し、さいごに、

「ユダヤ思想はブラジルにも害を及ぼすものである」と結ぶ。

これを約四十分にわたり話した。耳を傾けていた通訳がどのていどポルトガル語に訳せたのか。署長は顔を硬直させて、カンカンに怒って、なにかブツブツ言いながら部屋を出て行ってしまった。

通訳も書記も手持ち無沙汰でぼんやりしている。

私は言いたいことを言ったのでホッとして窓ぎわによつて外に目をうつせば、いままで気づかずになっていたが、渡真利が小柄な褐色の男に胸ぐらをつかまれて叩かれている光景がみえた。押したり引いたりしていたが、果てはゴムの鞭で古畳でも叩くようにボテボテと叩いている。さすがの彼も観念の眼をとじて悲壮な顔つきで耐えている。なんたる野蛮な行為ぞ。抵抗もしない者を叩くとは、と憤激を覚える。（あとで知ったが、この男がロンドンという鬼畜のような書記だという）

しばらくして、署長はひとりの刑事をつれて戻り、私を指してなにか囁く。

その刑事は私に「来い」という。通訳はすでにいない。書

記はあきれたような顔をしている。そとはすでに薄暗くなつて電灯がついている。田中さんはいぜんとして待たさされているが、言葉をかわす暇もない。看守の部屋まできて、刑事がなにごとか命ずる。看守とともに三号室に戻るのかと思つたが、前を素通りしていく。各窓口に鈴なりに日本人の顔が覗いている。目だけだから誰かもわからない。そして独房の三号室に入れられた。

この日から波瀾の独房生活がはじまつた。

独房生活

私を独房にいれると、看守はクッションを外にだし、それから「服を脱げ」という。シャツも猿股もぬがして、丸裸にして一切をもつて外にでた。それから鍵をかけて悠々と立ち去つた。

じつに残酷極まる仕打ちである。あまりのことに茫然自失、放心の態であつた。やや時がたつて我に返ると、腹が立つやら口惜しいやら、なんと野蛮な行為だ。恨み骨髓に徹した。我、この世に生をうけて五十年、いまだこのような屈辱にあつたことはない。それもこれも同族の不逞なる輩たちの奸策とおもえば、なんととしてもこの日この時の屈辱を永遠に忘れまいぞ。ひとり切齒扼腕するが妙策はうかばない。遠慮なく時はすぎる。四月の下旬である。寒さは裸身にこたえる。

興奮がおさまり、冷静に室内をみわたせば、奥行き三メートル、幅一メートル半ほどの狭い部屋である。二メートルほ

どの高さのところに通風窓があり、かすかに薄明かりがさしこんでいる。作り付けの寝台と、反対側に便器、洗面器があり、通路は一メートルくらいで、動くにも意のままにならない部屋である。

外界は電車通りで、たえず騒音が連続してなかなかさわがしい処である。(注・この建物は現在のルス駅のとなりにあった)

寝台のすみに丸くなって我慢をつづけるが、朝、すこしのパンを食べただけの腹はさかんに空腹をうったえる。

完全に同行の人とも隔離されたのである。こうなると、我にもあらず良からぬ想像をたくましくする。地元のリンスの農○水○が我を敵視し、社会より抹殺する手段ではないのか？ あるいは先刻の署長はユダヤ人で、私のユダヤ攻撃論に腹を立てて、このように残酷な報復をしているのではあるまいか？ いずれも真実味があるように思われ、戦慄をおぼえた。

だが、一方では、碧水、なにを畏れるのか。お前は身を挺して思想戦に参加したのではないか。敢然として国賊相手に闘っている現状ならば、このような事態も起こりうるではないか。いかなる迫害にも耐える覚悟ではなかったか。

そう、自分をはげまして力んではみるものの、この素はだかはまことにつらい。苦難の行である。どうあがいても、なるようにしかならぬ、と一種の諦めに到達してすこし落ち着く。

むこうのほうの二部屋ほどてまえの独房の鍵をあける音がかすかに聞こえる。誰かを入れるのであろう。となりの独房

からかすかに水を流す音がきこえた。そこにも誰か入っているのだろう。

私は無意識にせまい室内を右往左往していることに気づく。本能的に動くのか？ 浅ましい気もする。すきつ腹に水を飲んでみると、一時は凌げそうである。

差し入れの窓から顔の半分をつきだして隣をみると、むこうでも同じようにしてこちらを見ている。

・・・どこかで見た記憶がある顔だ。

「あなたは誰ですか？」と聞いてみた。

「僕は岸本です」という。

この時ほど嬉しかったことはない。地獄で仏とはこのことか。かねてから知る法律家の岸本次男氏である。憂悶も一時に消え、私は「リンスの誰々です」と名を告げ、裸にされていることを告げれば、

「それは気の毒なことだ。すこし辛抱していなさい。そのうち私が飼い馴らした看守がくるから、あなたの服をもつてくるようにする」

私はホツとして、お願いする。

「じつに裸地獄はつらいものです。おたがい顔しか見えないので良いけど、私は丸裸の恥さらしの風体です」

それから話はお互いの入獄の経緯になり、

「あなたは何で入れられたのですか」と聞けば、いや、なに、敗戦の連中どもが俺が臣道連盟から金をとったとか、自動車を貰ったとか、くだらない密告をされてもう二週間も入っている。なんかい調べられても身に覚えがないことは答えようがないので、署長が手こずって、リオに送るつもりらしい、

と。

(注・岸本次男は黒竜会幹部とも称し、ブラジルの警察にも顔の利く怪人物として当時活躍した。吉川順治が戦中に抑留されていたとき、渡真利たちに警察での面会の仲介をした。りした人物だが、どうしくじったか、このときは検挙された。ただし、まもなく釈放されたと思われる)

やがて看守がやってきた。岸本氏は伯語でこんこんと頼んでくれているようだ。しばらくして看守が私の窓口にきて、だまって煙草に火をつけて、呉れる。そして、

「金はあるか？」と聞く。

私は、

「服をもつてきてくれれば、十分なお礼はするから」

と不完全な伯語で頼んだ。

「二時間ほど待て。そのうち看守長が帰るから、そうしたら服をもつてきてやろう」

もちろん岸本氏の口添えのおかげである。看守のくれた煙草は朝からはじめて吸ったので、忘れられないほど旨かった。

私の窓と岸本氏の窓は手を伸ばせばとどく。

「腹が空いているだろう」

と、親切に奥さんの心尽くしの菓子やチーズを手渡してくださる。あまりの空腹なので碌に味もわからず平らげた。

私の隣の独房にはカンポス・ジョルドンの木村さんが入っておられるという。が、扉が一尺ほど引っ込めてあるので、よほど怒鳴らなければ話はできない。

(注・木村貞治のこと。カンポス・ジョルドンも臣連の活

動が盛んだったところで、警察に目をつけられた。木村は臣連のいわば創立会員の一人であった。」

「二号の独房にも誰かが裸で入っている。服や靴がそとにある」

と岸本氏がいう。では裸は私だけではなかったのか。そうこうするうちに、嬉しや、さきほどの看守が服を持ってきた。裸地獄から救われた。服も時計も金も異常はない。しかし、受け取るときに煙草入れが外に落ちてしまった。看守はそれを拾ったが、欲しそうで、「呉れ」という。そうとうに高価なものではあるが、嬉しいばあいなので呉れてやる。金も若干やって礼を言った。彼も喜ぶこと夥しい。この男はジョンといって、食事の配給や囚人の雑用を弁ずる便利な男である。

わずか数時間ではあったが、裸の苦行は忘れ得ぬできごとだった。二号室に残った人たちも私を心配して、ジョンに心付けを渡して、毛布や鞆などいっさいを届けてくれた。いままでとは打って変わった喜悦である。

こうやって部屋を掃除し荷物を整理すると、旅館の一室のようにもなり、大部屋に多数おしこんだ不潔なところよりずっと住みやすい感じがする。

時計をみるとすでに午前三時になっていた。となりの岸本氏はすでに眠ったかコトリとも音がしない。

人の心理は不可解なものよ。三十分まえの苦闘すら忘れ果てて、心強くなり、服をきこんで悦にいつている自分を発見して、おかしくなる。もう夜もふけたのだが、安堵したせいか、こんどは空腹を感じて寝られなかった。

この日を初夜として、五十日にわたる波瀾多き独房生活が
はじまったのである。

隣室に岸本氏がおられたことは私には天来の福音である。
独房で退屈をしないでいどに、お互いに話ができる。

氏もしみじみと「敗戦共が臣連をブツ潰すことに力を貸
せ、と再三頼みにきたが、そんな理不尽なこととはできないと
断ったので、密告されてかくのごときである。癩に障るが娑
婆にでなければどうにもならない」と憤慨しておられる。

私も「リンス地方で、なんども事件がおきる。そのたびに
密告されて、それに費やす経費もバカにならない。ぎやくに
彼らを誣告罪で告訴するつもりで本部と協議しているあ
いだに、臣連の公認問題があつて先送りしていたら、やつら
非国民に先手をうたれて逮捕されてしまった」と詳細をお話
しする。

岸本氏とはふかい交際はないのだが、そんな話をして尽き
なかつた。

こんどは左隣の木村さんに大声で話しかけてみた。

私であることをつけて「お元気ですか」というと、どうや
ら聞こえたか「いたつて元気です」とは聞こえたが、あと何
か語っている言葉は聞こえない。

会話をあきらめ、昨夜いらい眠っていないので、横になつ
て寝ようとするが、壁をへだてて電車の騒音が地響きをたて
る。さらに横壁のほうにはルス駅の引き込み線があるらし
く、これまた騒音が持続する。じつにおそるべき騒音地獄で
ある。

そこで寝られないまま想念がつづく。署長室でみたあの膨大な臣連資料を放置して調査するようすもない。「日本が勝ったか。負けたか」と聞いて、投獄したり釈放したりする。つまり合法的根拠がある事件ではないことが判然とする。敗戦派がブラジルの治安に協力するためだと詭弁を弄し、しかも大金を提供して官憲を動かしているのだ。まったくの疑獄事件である、との結論にたつした。

言うまでもなく現行犯である特攻隊は、死を覚悟して決行したのであろう。我らとて、かかる場合を予想していたのではあるが、敗戦派の嫌う、いわゆる強硬派のことごとくを投獄するとは、まことに不法である。それでは天意にもとり正義を蹂躪することになる。彼らの邪悪な行為は当然破綻するだろう。邪悪であるかぎり、それは歴史が証明する。だが、いまは思想戦のさなかであり、いま獄舎に呻吟する同志たちは、時代が新世紀にうつる過度期の受難の人々である。

いまとなつてはすべての抗弁も受け入れられまい。

だが、我らは正義であるとの安心感から、邪悪にたいして油断もあつた。彼らが弾圧の網をはるのを易々とゆるした我らにも手落ちがあつた。

かくなるうえは、さらに信念を強くして、国威をまもって闘うのだ。これは長期の戦いになるかもしれない。しかし、ブラジルがつきつきと新しい政策を打ち出していることがなを意味するか考えるとき、私は欣然となる。

・・また、まんじりともしない夜があけた。窓から朝の陽光がさしこむ。

洗顔をすませ、岸本氏に朝の挨拶をかわし、窓越しに煙草の火をもらい、よもやま話でときを過ごす。(注・留置人がマッチをもつことは禁止されているはずだが、岸本氏はうまくやっているようだ。編者がかねてからこの怪人物に興味をいだいているが、残念ながら詳しいことはわからない)

おりから独房の一号室から大声で私の名をよぶ者がいる。誰かと問うと、なんと渡真利である。彼のいうには「あの晩は夜通し裸であった」と。ロンドンにいじめられていたが、私のあとに独房に入れられたのである。私もわずかの時間ではあったが裸だったので、慰めてやりたいが、厚い壁が幾へにもあり、思うように伝えられない。

食事なども順調に食べられるようになってきた。だんだん、ここにも慣れてきた。ただ、よく寝られないのが困る。となりの木村さんとも耳を澄ませて、どうやら話ができるようになった。その話の概略。

「さる四日に敗戦派の密告で親子三人が引致され、ただちにここに護送されたが、私だけが独房にいれられ、長男次男の息子たちはカーザ・デ・デテンソンにいる。私を署長が二回呼び出して連盟の会計のことで尋問したが、不正のないことをなんと説明しても聞き入れられない。連盟の者がおおぜい入っているが、独房なので詳しいことはわからず案じている」

一家三人もの受難。のこる家族の不安。まことにお気の毒なことである。私もいろいろ所信を述べ、おたがいに頑張りましようと思まし合った。なればよく話もつうじる。

氏曰く。「ここは旅館のようなものです。金さえもっていれば、朝と夕方に注文を聞きにきます。菓子でも果物でも好きなものを買える。なんでも自由に外から求めることができ。ただし歩合をとるので多少高いものになる」と。

なるほど、看守が「金をもって入れ」と言ったはずだ。牢獄の中で好きなものが自由に手に入るとはウソのような事である。ブラジルはまた特別に良いところもある。ここは朝食は正午に、夕食を四時過ぎに配給する。わずかのあいだに二回食うことになる。たぶん看守の交代の時間のせいでそうなるのだろう。それに、マッチを持たせないから、煙草を吸うためには外をとる看守に、そのつど火をもらわなければならぬ。食後の一服にはたいへん不便である。

ある日のこと。三号室にいた佐藤正信くんが、独房の掃除をするのだといって、看守とともにはいってきた。

意外なことと思い、事情をきくと、

「運動不足をおぎなう点と、情報交換のため、看守に申し出て、各部屋を掃除してまわる」のだと。すこぶる頭のよい思いつきだと感心する。

「昨夜遅くルセリアの河島さんと私の父が五号室に入りました。元気だから皆さんによろしく言ってくれ」
などなど。

看守がいるからあまり長話はできない。掃除をすませて去っていった。すこしでも情報がはいると蘇生するおもしろい。

(注・佐藤正信は佐藤正雄の息子。戦中の赤誠会時代から

のメンバー。しかし、他のメンバーは戦後は名前がでてこない。戦中は五、六人の小人数でおもうさまに活動していたのが、戦後に会員十数万にふくれあがった臣連に違和感を感じて遠ざかった可能性もある。あるいは、すぐに敗戦を認識したか）

せまい檻のような独房の生活をつづけるため、日課をきめた。朝と夕は家にいたときと同じように祈りを実修し、一日十五分を三回、屈折運動をして、運動不足をおぎなう。孤独感がおそうときは、暗記している「戦陣訓」を朗誦したり、歌をうたったり、誰にも遠慮はいらない。それに、退屈だったらとなりの岸本氏と敗戦派攻撃の議論をしていけば、時がたつ。

そのようにして四、五日たったある日、岸本氏いわく。

「二号の渡真利君を木村さんと同居させて、そのあとに吉川さんを入れた。(注・臣連理事長、吉川順治) 中風で、だれか付き添いがついているのが、ここから見える」と。

そこで私は大声で、

「吉川さんの付き添いは誰ですか？」と叫んだ。

「トツパンの佐々木です」と返事があつた。

なんと残酷なことであろうぞ。七十二歳にもなるご老体を、しかも半身不随の病人を、いかなる理由があろうと、投獄するとは言語道断、なんたる理不尽と憤慨した。ブラジルには我らに不可解なことが多々ある。さぞ、ご不自由であろうと、しばし暗涙にむせんだ。これも敗戦派の輩の奸智のためだ。

・・いぜんとして、よく寝られない。騒音になやむ。後日きくと、独房にいれられた者たちは例外なく不眠症になったそうだ。

たしか四月二四、五日頃と記憶するのだが、夜の十一時ころ廊下一杯に四十人ほどの日本人がきて、廊下で寝た。なにごとが起きたのかと聞くと、

「釈放されて、明日朝七時の汽車で地方へ帰るので、ここに泊まるのだ」

という。顔見知りの人もいて、ペンナポリスの出森、丸井氏が窓越しに別離の挨拶をする。まだ知人がいるようだが、混乱の中でよくわからない。彼らは早朝に潮がひくようにいなくなつた。世はさまざまだと、今更のように思う。

ある日、付き添いの佐々木氏がデテンソン行きになつたため、吉川さんを私の部屋にうつし、あいた部屋には笹田の奥さんが入れられた。けだし、女性の思想戦士といふべきであらう。

このため、私は親しく吉川中佐の温顔にせつする機会を得た。痛ましいことに半身不随のため、服を着るにもボタンをはずすにも、人手を借りなくてはならない

(注・吉川は脳溢血の後遺症で、たしか右半身が利かなくなつた)

喬木は風にあたる。すでに何回となく非国民の誣告で投獄され、ついに獄中で発病されたのである。

(注・すでに書いたが、戦中の養蚕小屋焼き討ちに関連して、アジビラに彼の名があつたため、「国家に対するサボ

タージュ」の容疑で収監されていた)

しかしながら、祖国を想い、同胞愛にもゆる逞しき中佐の精神力は不屈であり、現在の境遇にもいささかの悔いもない心境でおられる。じつに凡人ならざるの感を深くした。

老中佐いわく。「今回の事件は吾人があまりにも無策であった。徹頭徹尾、日本精神をして当局に認めさせるべきであった。そうして臣連を確固たるものにして初志を貫くべきであった。(公認問題を) 弁護士などに依頼して未然にことを壊したことはなんとしても残念である。皆様に相済まぬと思っています。かくなるうへは、いかなる迫害をこうむろうとも、初志にむかって思想戦を闘わなければならぬ。不自由な身でおせわになります。最期まで頑張ります」と。

意気軒昂たるもので、私はただただ敬服して、目頭が熱くなった。

(注・この記録は碧水がのちに纏めたものなので、このとおりのことを吉川が言ったのかは、留保をつけたい。「あくまで思想戦を闘う」など、むしろ碧水の口癖のようだ。ただ「今回の事件は吾人があまりにも無策であった」と吉川が言ったとすれば、自分たちがテロを未然に防げなかったので多くの連盟員に迷惑をかけてしまった、という意味に編者はとりたい。本部の臣連幹部のほとんどが、個人差はあったにしても、予兆を感じてはいたが、具体的には計画をしらなかつたらしい。ナンバー2の根来良太郎は直前に襲撃者リストを見せられて「真っ青になった」という。

吉川のところにも若い者がそういうことを言ってきたことはあったが、吉川は「襲撃はいかん」とたしなめる程度であつ

たようだ。その当時は「まさか」と思っていたのではないか)

吉川中佐はさすがに軍隊で鍛えられただけあって、老体で病身にもかかわらず、食事なども私以上に健啖である。礼儀正しいことも、つねに武人の嗜みであろうか。身動きもままならない狭い部屋で、なんの屈託もなさそうで、時折は謡曲「鉢の木」などを聴かせてくださる。じつに素人離れした名調子で、無我の境とでもいうか、優雅なものだった(注・吉川の謡は宝生流。彼はブラジル謡曲界の指導者だった。東京時代に桐谷正治に師事し、戦前戦中はお弟子さんたちに稽古をつけていた。一九四一年の戦前の伯謡会最期の公演では、「隅田川」のシテと「羽衣」の太鼓を務めている)

かくして我らは天長節を迎えたのである。

その前夜、老中佐がいった。「明朝、六時を期して私がこの部屋から「気をつけ」の号令をかけます。一同は正装して国歌を合唱するように。そのほかは獄中ですから省略しましょう。このことを何とか皆につたえてください」

そこで私は一号の笹田さんの奥さんに中継していただいで、リレー式に各室に伝えた。

明ければ一億の民の慶事。天長の佳節を獄中において迎えて奉ったのである。老中佐指揮のもと、各室の十七名から堂々と君が代が斉唱されたのである。伯人の囚人も看守たちも、我らの気宇にうたれたか一言も発しなかった。私は歌いながら胸がつまった。

五月一日、岸本氏、リオに護送されることになる。

「自分がリオに行けば、この事件が解決されるように努力しましょう」

私も、同胞のため健闘してください、とお願いした。裸事件いらいお世話になった氏と別れるのはさびしかった。

その日、たしか釈放になったはずのトツパンの佐々木氏がまた戻ってきた。そうして四号の独房で吉川氏の付き添えをすることになった。わずかな日ではあったが、慈父に別れるような気がした。

いつのまにか笹田の奥さんもほかに移され、木村さんと同居していた渡真利君を一号に入れたから、以前のようになる。

ある夜半、騒音地獄にうつらうつらしていた私に、何者かがなにか投げつけた。おどろいて窓口をみると、みなれない男（看守か刑事）が招いている。リンゴを私の足元に投げて起こしたのである。窓に顔をだすと紙片をわたし「あとで焼け」といって、禁制のマッチまでおいていった。

なにごとかといぶかしんで紙片をひらくと達筆で、「デテンソンの同志より。ここの入獄者一同の申し合わせとして、全員一斉の釈放でなければ、たとえ釈放するといっても応じないことにした。そちらも、そのつもりで頑張ってもらいたい」と書いてある。

この文意はなんの連絡もできない入獄者には不条理な言い方である。敗戦派の犬かもしれないと、私一人の胸におさめて紙片は握りつぶした。

不眠症をのぞけば私の独房生活もだいぶ慣れてきた。菓子

や果物など欲しいものを買わせて、不自由もない。

ある朝のことである。渡真利君が大声で曰く。

「ロンドンが私を四階に連れて行き、書いたものを見せて、私が返事をしないので半殺しにしたが、なにか証拠をつかんだのではないでしょうか」

と不安げである。

私は「書いたものを証拠にするには不正がともなわなければならぬ。君が書いたものに罪を構成するようなものがなければ恐れることはない。むしろが証拠を偽造するのなら、考えても無駄ではないか」と彼を元気づける。

彼もたびたび殴られ、恐怖心かられているらしい。獄舎ぜんぶに隠しマイクがつけられ、日本人が喋ったことは後日の証拠にするらしい、などとおとぎ話のようなことを言う。呆れたものである。

このごろ、めつきり寒くなった。

ある日の午後、木村氏の次男が釈放されて、父に挨拶にきた。独房の内と外の会話ゆえ全部は聞き取れないが、おおよそは、

「放免されて帰ります。あなたを残して帰るのは心残りで、ほんとうに心苦しい。体に気をつけて一日も早く出獄されることを神に祈っています」

「私は心身ともに健全だから、心配しないように。それより、帰ったなら家業にはげんでくれ」

父子ともに健気な別れの言葉である。漏れ聞いていて、お

もわず涙がこぼれた。

私も蓄えとてない生活に妻と娘を放り出している。どうして、その日その日を暮らしているか、案じてはいるが、知るすべもない。

私のえた情報として、現在デテンソンに百二十名。ガベネツチ刑務所に特攻隊十四名が収監されている。吉川中佐の付き添いの佐々木氏が釈放され、ピネーロスの近藤青年が付き添いになる。掃除にくる正信青年の情報によれば、昨夜遅く同志が多数、各室にはいった。なかに根来、谷田和気両氏もいるとのこと。どこも日本人で満員だと。(注・根来Ⅱ臣連ナンバー2の根来良太郎。谷田Ⅱ北パラナの親分といわれた谷田才次郎)

私の同行者、大畑ほかの三名もすでにここにはいないそうだ。デテンソンに移されたのだろう。じつに何のための移動か知るよしもない。

またも吉川さんの付き添いの近藤青年が釈放された。根来氏の息の豊平くんが付き添いになる。なんと考えても、かくのごとき付き添いを要する老病人を投獄するとは、天人ともに許されざる悪逆無道の行為である。

一カ月ほど過ぎたある夜のことである。数名の看守が各部屋をいっせいに開き、日本人は四階に集まれという。何事ならんと四階におしかける。居るわ居るわ、我らの同志が三十数名、頭髪も髯ものび、まるで仙人の様な風袋でずらりと椅子に腰掛けている。泰然として、どの顔も不敵な面魂で、私は「日本人ここにあり」の感を深くした。

そして静かに室内をみわたせば、正面の二メートルほどの板いっばいに北米で発行するユタ日報、怪しげな大阪毎日や東京日々新聞、そのた官報など、祖国の敗戦を認識させる材料が念入りに展示してある。それらにいかなる編集がしてあるか、もとより知ることはできないが、我らに嫌がらせをする外道どもの工作であることは想像にかたくない。

部屋にいる誰も、そんなものは見ようともしない。久しぶりに吉川、根来両氏をはじめ臣連の人々が一堂に会したのである。

「ヤアー、ヤアー」の連発で賑やかになった。

やがてゼラルド署長を先頭に書記のロンドンにつづいて人面獣心の森田がはいってくる。

森田いわく「こんど米国領事の好意で、日本との文通ができるようになりました。みなさんのなかでご希望の方がおられれば、日本の親戚の住所氏名を知らせてくだされば、手続きをいたします」と。

親切そうに手帳と万年筆をもって各人に勧誘して歩くが、皆は憎悪の目で凝視して、返事をする者もない。さすがに場所柄、不穏な態度をみせる者はいない。しばらく沈黙がつづく。彼も手持ち無沙汰のようすだった。

そのうちに鉄面皮にも吉川氏の前にいきペコペコ頭を下げ、「森田です」と自己紹介をすれば、「いまさら、我らに日本からの手紙でもあるまい」とポツリ。あとは無言だった。森田はあわてて吉川氏の前を去った。

「飛行便ですと、皆さんがここにいるあいだにも返事がくるかもしれません。もし出られたあとに返事がきたら、ちゃん

とご自宅にお送ります」

なかなか親切なものだが、誰も必要ないと相手にしない。彼ら敗戦共もあの手この手を弄するようだ。しかし効果なく、森田も署長もいつのまにかいなくなった。

(注・森田＝森田芳一。建築家。戦中戦後にスエーデン領事館の日本人権益部につとめ、日本人の利権保護にはたらいだ。その関係で、臣連事件ではDOPSの要請で取り調べの通訳などもつとめ、そのために勝ち組から敵視されるようになった。森田氏は権益部の仕事の性質上、当然ながら「日本は負けた」という立場である。おなじ通訳でもサンタナ氏は外人であるという理由で憎まれず、森田さんは日本人であるという理由で憎まれた。テロ事件の最後の犠牲者は、森田さんの義弟の鈴木正司氏が森田氏と間違われて射殺された。犯人は森田さんを見たこともない地方青年たちだった。後年、森田さんは編者に「戦中、戦後には悲しいこと、胸が煮えくり返るようなこともあったが、日系社会の発展のためには、今後はそういうことは一切口に出すまい、と、ある時期に自分に誓った」と述懐したことがある。聖市400年祭を直接の契機として発展した日系社会の融和は氏のような人々に支えられていたことを忘れてはならないと思う)

看守に追い立てられて又もとの独房にいれられたが、同志が健在で会合したのは予想外の収穫であった。臣連員以外ではモジの尾崎、聖市の郷原氏くらいと記憶する。

(注・郷原は在郷軍人会系。まもなく釈放されたようだ。なお、戦時中の興道社↓臣連の中心は退役軍人たちだったが、

終戦後まもなく臣連と袂を分かち、在郷軍人会を結成して一般人の入会もよびかけていた。中心人物の山内元大尉や薬師神元中尉の名が碧水の記録にはあらわれない。4・1事件で拘束されたのは確かなので、取り調べの結果、まもなく釈放されたと思われる。つまり、会の綱要に「大戦の結果はいずれとも定めがたいから、明確となるまでは慎重に行動するべし」という一条があったという。郷原など一部の会員をのぞいては、山内など旧軍人たちは、検挙された時点ではすでに日本の敗戦を認識していたと推測できる。退役軍人の将校クラスは当局からマークされていたので、もし、山内たちが日本の戦勝を強く主張していたらそう早くは釈放されなかっただろう。

このことあって数日後のある寒い朝だった。

「日本人は三十二枚の写真と三十二枚の指紋をとる」といつて連れ出される。

私は木村老といっしょに刑事につれられて署の向かい側、電車通りをよこぎって写真館で写真をとり、写真代は自弁であつた。署にもどって指紋をとられる。

「なんのために、こんな事をするのか？」と聞くと、

「臣連の事件も一段落したので、ちかいうちに地元の署におくって釈放される。これは地元の署に送るためのものだ。デテンソンでもガベネツチでも手続きをはじめたから、なかなか忙しい」

本当か？ 偽りか？ そんなこともありそうに思える。なぜなら、数日前には三十名ほどもいた同志がわずか十数名に

なっていたからだ。・・それに独房にはいつてから初めて街頭の風景に接した。通行人も冬支度であった。

他の監房ははげしく移動がある。独房の吉川さんも渡真利くんもいない。私と木村老だけが忘れられたごとく、音沙汰がない。

出獄の期待をしていたのだが、六月にはいつて、ある夜中、だれか日本人が留置されたらしく、大声で「脇山が殺された！」と叫びながら入った者がいた。

(注・脇山＝脇山甚作、元陸軍大佐、元バストス農業組合長のこと。邦訳した終戦のご詔勅に署名した七人の一人。戦時中の興道社↓臣連時代は吉川順治と行動を共にした。事件が起きたのは終戦の翌年の六月二日の夜)。

それを聞いて慄然とした。

・・あまりに無謀な弾圧をするために、血気の若者を憤激させ、敵にひとしい非国民どもを倒すのではないか。そうして、ついには無秩序時代を現出して、過去の邦人の信用、業績、地盤を根底からくつがえす社会相になるのではないかと？

ああ、この現実からして、出獄などありそうもない。

(注・吉川順治はすでにここにいなかった。碧水はなにも記していないが、脇山暗殺の報にもつともショックをうけたのは、おそらく吉川であったろう。吉川と脇山は陸士の同期であり、生涯かわらぬ盟友でもあった。吉川はテロに直接かかわっていないにしろ、己が理事長をつとめる臣道連盟のなかの過激派が、臣連の組織をつかって、負け組敵視の風潮をおしすすめ、テロが愛国行動であるかの煽動をしつづ

け、臣連員あるいは外部の若者たちがそれに呼応して行動をおこしたのである。そのことは、臣連にいたときは多くを知らなくても、取り調べの過程でいろいろな証拠をみせられ、吉川にも十分に分かっていただろう。吉川は出獄後は頭を丸めて僧侶のすがたとなり、日夜、脇山の菩提を弔う日々をすごしたと、娘の高子さんが語っている)

脇山が殺されたことを聞いて、私は長期の入獄を覚悟した。独房入りをしてすでに四十日以上経過した現在までのことを考えてみると、国家に離反した敗戦どもが我らに迫害を加えていることは、日本精神を否定することである。だから思想戦を展開して彼らと戦うことは日本人としての責務である。皇国の民より天皇帰一の精神と国体の観念をとりさつたら、我らは生存の意義をうしなう。

ここまで考えをすすめたとき、ふと、おそれ多くも聖帝、明治天皇の御製「なすこともなくて終わらせば、世にながき齡（よわい）をたもつ甲斐もなからむ」との御詠を思い浮かべたのである。

恨み骨髄にたつする民族の痛恨事である。私はこう考えて、さらに勇猛心をふるいおこした。

六月四日、私と木村老は突然、一号室にうつされた。五日の独房生活に別れをつける。

(注・碧水がながらく独房に入れられたのは、重要な供述が得られそうな容疑者同士が口裏を合わせないためであろう)

疑獄の推移と獄中の所見

一号室の住人となつて知つたことは、吉川、渡真利、根来親子、河島佐藤親子、谷田、和気らの諸氏がすでにここにいないことであつた。そして各監房がさびしくなつてゐる。

一号室にはマリリアの小川善作、トツパンの青木勘次の両氏がいたところ、われわれが加わつたので賑やかになつた。寝台の設備もあり、洗面所や便所など独房の比ではない。日本人のほかには共産党の囚人がたくさん入つて、賑やかなことである。なかにはインテリの伯人もいて、まいにち演説などはじめて稚氣あふれて、なんの屈託もなさそうである。

(注・日本人が勝ち負けであらそつてゐるあいだに、すでに世界は米国とソ連の対立で動いていた。碧水の目には人ごととして呑気そうに見えたらしいが、当局と左翼陣営の攻防はそれほど呑気なものではなかつた)

ある夜、小柄な日本人が入つてきた。あとで知つたがシネマ屋の沢井天城氏で、十日ほども同室した。この人は特攻隊の指揮をした人とかで、ほとんど毎日ロンドンにひきだされて、殴られる。一度などは半殺しにされて、二人の看守が抱え込んだこともある。なんたる残虐行為。義憤を感じる。しかし、氏は小さな体でよく頑張る。

つぎには聖市の小笠原氏の息子をいれる。これも特攻隊の関係者で、ときどき殴られる。あるいはきれいに刈つた髪を缺でまだらに切つたりの嫌がらせをする。日本人をバカにするのは、きわめて無知蒙昧な連中である。

木村老と青木氏はまいにち五目並べに余念がない。小川さんはパンを練って、さまざまな物体をつくる。仏像など見事なものである。私も教わって碁石をつくった。黒石などは煙草の吸殻で色がつく。なにかしていれば退屈はしない。いつのまにか沢井、小笠原の両氏はいなくなる。

(注・ふつうの警察の仕事は、まず事件の犯人を検挙すること。ついで、犯行を手助けしたものを検挙することであるが、DOPSは社会・政治警察なので、大がかりなテロ事件の背景を明らかにすることにも力をそそいだようだ。小笠原亀五郎、沢井天城ともにテロ団にアジトを提供し、決行までの便宜をはかったことは取り調べですぐに明らかになった。とくに小笠原は「自分が首謀者だ」と言っているが、家業の洗濯店で忙しかった小笠原が地方から志願者の青年を集めたりなど、すべてのお膳立てをしたというのは不自然な点がある。碧水の手記では殴られたりして執拗な取り調べをうけたのは、とくに渡真利、小笠原、沢井の三人であった。戦時中の養蚕小屋焼き討ちの煽動をした容疑者であり、現在は臣連情報部理事として臣連を牛耳っていた渡真利と、あとの二人を結びつけようと、警察はやつきになっていたようである。しかし、後に作成された総括の報告書を見ても、自供というかたちでは三者の関係はあきらかにならなかったようだ。碧水の手記からも窺えるが、連日の取り調べで渡真利はそうとう参っていて「落ちる」寸前だった。デテンソンに移されたことで、一応、厳しい取り調べから開放されたようだ。

なおこの手記では臣連の実力者の渡真利を、碧水はなんとなく見下したような書き方をしている。また、臣連の第一回

大会―終戦後まもなくの十月ころ―で壇上に根来良太郎とならんで座っていた沢井天城を碧水が知らなかったことも、ちよつと意外な感じがする。つまり、ある時期から沢井の役割は蔭にまわったのではないか？ という推測もできる。碧水が渡真利をいくらか見下したような書き方をしている理由については、当時の警察の調書がヒントを与えてくれるのではないか。調書の翻訳を「ブラジル日本移民八十年史」の第四章―宮尾進担当―から引用させていただく。

調書の引用のまえに、テロがおきるまえに碧水から情報部へおくった連絡を紹介する。これはいわゆる情報部通信とよばれたやりとりで、A4の半分くらいの紙にガリ版で情報部通信と書いてある用紙が使われた。「リンス支部決議事項
吉井喜一郎 昭和二十一年一月二十四日 支部長会議招集と同時に、推進隊招集の件を全伯各支部にご通知乞う」。ここで吉井がいう推進隊とは負け組にたいする実力行使の隊のことである。宛て先は当然、渡真利が担当する情報部である。このように、検挙前は吉井は渡真利とは立场上親密な関係だったと推測できる。さて、取り調べの調書の内容である。

『吉井喜一郎の供述 DOPSドップス―サンパウロ社会政治警察―調書 f1316。自分が農田源行におくった手紙には、臣連には推進部があり、それは「日本が戦争に負けた」ということを言わせない任務をもつものである、と記して警告した。農田への手紙には「決死隊」のかわりに「挺身推進隊」という名をつかったが、その意味は己を犠牲にして理想をつらぬく、という意味である。決死隊あるいは自決

隊といってもよい。これを連盟では推進部とよんでいる。現在推進隊と名付けられている決死隊の隊長は連盟本部の渡真利成一である。渡真利は各地方の推進隊の総指揮者である。警告の手紙を負け組の者が受け付けない場合の処置については本部が決定する。自分およびリンス支部の幹部の収監については、五百を超える会員家族の報復があるだろう。すなわちリンス地方の生産を中止して報復するだろう』

この吉井の取り調べでの発言を聞かされた渡真利の申し立て。

『渡真利の供述。 DOPS 調書 f1740 いま聞かされたリンス支部長の吉井の証言について、なにか言うことはないかとのことだが、この人間はバカだと思う。此処から出たら、ただちに彼を処分してもらおうよう訴える。その理由は、吉井のような人間が連盟の名を利用して殺人を犯しているからである。この機会を利用して、日系社会のガンとなっている吉井を銃殺刑に処してもらおうようお願いする』

・・まあ、この渡真利の過激な発言がすべて吉井の耳に入ったとは思われないが、つぎの取り調べのとき、いくらかは吉井も取調官から聞いたのではないだろうか。そうだとすると、碧水の渡真利にたいする書き方も納得できる。ここまです言われたらたいいの人間はアタマにくる)

ある日の午後、看守が私をよんだ。「いまさら取り調べでもあるまい」と思いながら四階にいった。

待合室にうれしや、私の妻と、大畑のおばさん、堂山さんの妻がいた。面会に来てくれたのである。

親切なサンターナ氏の立ち会いで、十分間の面会を許されて、まず家内がはいってきた。

突然のことで、私も家内もなにから話してよいかわからない。しばらくは感無量。そのうちに落ち着いてきた家内が話すには、

「あなたたちを聖市に護送して一カ月後に支部員たちは釈放されました。サンパウロにきて捕まった瀬戸、権藤、田中の三人は釈放されて自宅にいます。あなたはデテンソンにいとばかり思っ、行ってみましたが、どこを探してもいないので不安でした。大畑さんと宮原に会いました。宮原は病気で、別室にいるそうです。少々のお金と品物をわたしました。あなたとここで会えてホッと思いました。娘と二人でなんととしても生き抜きますから心配しないでください。体を大事にして、はやく帰ってきてください」

わが妻ながら健気なものである。不覚にも目頭があつくなった。

私も「このようにつぎつぎに事件がおきるようでは、長引く覚悟をしている。あまり人様にお世話をかけないように。どんなときでも日本人であることを忘れてはならない」

話はずきないが、すでに約束の十分を三十分も超過した。サンターナ氏に「そろそろ」とうながされて、再会を約しておしくも別れた。

さぞ家内も驚いたことだろうと思うのは、二カ月も頭髪も髯ものび放題で、太陽にもあたららず、変わり果てた私の姿だった。その後の状況も詳しく知ることができて、同室の一同も喜んでくれた。毛布、煙草、かまぼこ、梅干しなどの差

し入れがあったので、ひさしぶりに日本の味をみんなで楽しんだ。

次の日、おなじ時刻に「面会だ」とよばれた。会ってみると家内だった。

「遠いところなのでたびたびは来られない。今晚の汽車で帰るから、もういちど会わせてくださいと頼んだら、署長さんは気持ちよく許してくれました」と言う。

鬼の目にも涙があるのだ。しかもサンターナ氏は「ゆっくりお話をされたらよい」との好意である。

家内の曰く。

「それでは認識派との対立がひどく、睨み合っている。連盟の残留組がクルゼーロ旅館に陣取って、地方からでてくる人の便宜をはかっている。支部から預ってきたお金をその人たちに渡した」

など、くわしい話を聞いた。

私は「こんどの事件は敗戦どもが官憲をあやつっているのだから、容易に解決はつかないだろう。だから合法的な釈放運動をおこしても効果はないと思う。つまり、ある時期がくるまでは我らが邪魔なので、行っている弾圧だと支部の人たちにも話して、釈放運動などで無駄な出費をしないように。それから、今は軽率妄動をつつしんで新しく事件をおこさぬよう、くれぐれも支部の人たちに伝えてくれ」

今日は心置きなく話ができただので、サンターナ氏にもあつく札を述べて、家内とわかれた。午後十時半の汽車で帰るというが、道中の無事を祈った。

また新入りがあった。

元ブラジル時報社の社長の黒石清作氏、サンパウロで薬局をいとなむ渡辺久平氏である。ふたりはリオに護送するため一時ここに収監されたという。

黒石氏は七十五、六歳であるがすこぶる元気で壯者を凌ぐ。一方の薬屋のほうはブラジルかぶれした軽薄な人物のようだ。思想は両者とも、我らとは相いれない。議論好きの青木君がさかんに信念論を強調するが、彼らには馬耳東風という感じだった。薬屋は医師もかねているというが、いずれ自称医師であろう。三日ほどしてリオに送られた。(この年内に「ブラジル時報」は復刊されているから黒石の留置はさほど長くなかったと推測できる)

頻繁に日本人がでていく。各監房はさびしくなった。

さいきんは大量に共産党を狩り集める。

どの部屋もかれらで満員らしい。その階級もまちまちで、電車の乗務員、労働者、インテリ、商人など雑多である。彼らと我らは思想は相いれないが、獄舎内では和気あいあいたるものである。

ある日、ロンドンが私らをよびだして、

「ブラジル生まれの子供のあるものは、近く釈放されるから、署名しなくてもよろしい。そうでないものは署名せよ」という。青木君は子供が八人もあるとて署名せず、木村、小川、私の三人は署名した。青木君にいろいろと伝言などたのんだが、数日たつても釈放される気配がない。まあ、こんなことは、これまでもあったので気にもとめない。最近の情報

として、デテンソンに約五十名、ガベネツチ刑務所に十名、その他に約十名、ここに七名がまだ収容されているという。ただし正確な数はわからないが、とにかくかなりの人数が釈放されたらしい。

また、ある日、木村さんに面会人があった。長男の嫁さんと、ジュンジアイに本拠をおく釈放運動の今井某が来たという。

今井のいわく、

「現在、外部では熱心に釈放運動が行われている。ただし入獄している幹部たちの意見を聞かないと、活動の方針がたたない。あなたのお考えは？」との質問。

それにたいし木村さんは、

「私が考えるまでもなく、今度の事件はある時期がくるまでは、釈放されないとと思う。したがって、今の時点での釈放運動は効果がなく、出費を銃後に加重することになるので、反対である」

「そのほかは嫁と家事の打ち合わせでした」

同室の我らも木村さんとおなじ意見なので共鳴した。

在伯邦人の思想の善導と正義人道をとなえて結成された臣連と、特攻隊を結びつけることによって、われわれ硬派を弾圧しようとする敗戦派の策謀をあきらかに感知できる現在、釈放運動は無駄であろう。しかも、我らと決行した青年たちと一脈相通じる思想がないとも云えない。ただ思うには、国家に反逆した彼らと純真な青年を比較すると、瓦と玉のちがいがあある。

青年たちの不合法な手段によらずとも、いずれ彼らの意識

が肅清される日がくる。だが、止むに止まれぬ気概が青年たちを高揚させるのだ。時流のしからしむところである。

最近は大量にアカを検挙するので、ここも充満している。ユダヤ思想とアカ思想とは新秩序の敵である。その意味で、われらとアカとは根本的に相いれないが、ここでは仲がいいとは皮肉である。

つらつら思うに、テロがおきたので敗戦どもは目の上の瘤の臣連をとりのぞく好機とばかりに策動したが、特攻隊の若者はたちは「臣連とはかかわりがない」と供述している。だから官憲もこまって、ロンドンが渡真利に「認識派と手を握ってはどうか」などと言ったそうだ。渡真利はだんぜんそれをはねつけたそうだ。

季節はサンジョアンのころになったか、ときどき花火の音をきく。

(注・聖ジョアンの祭日。六月は聖人たちの日がつづき、収穫祭の時期でもある。花火をあげたり、焼き芋を食べたり、田舎風のお祭りが行われる)。

寒さも増すが、私たち四人はますます元気にすごしている。

六月も終りのある晩、看守が「日本人はみんなエンボーラ(出立)だ。荷物をまとめろ」と通達してあるいた。

半信半疑で各自は服を着込んで、食べ物の残りなどは同室のブラジル人にやって、看守室に集合した。いないようで十人もいた。こうやって動くことは気が紛れる。

全員がそろろうと、見慣れない刑事が四人はいってきた。「デテンソン行きだ」と直感した。

かくして、前後を四人の刑事にまもられて、恨み多きオールデン・ポリチコを後にした。手荷物、毛布など両手にさげて、徒歩で公園の中を通り、やがてデテンソンに到着した。(注・すでに記したが、当時の警察制度では、カーザ・デ・デテンソンは拘置所である。この建物はいまはないが、地下鉄のチラデントス駅の出口あたりにあった。オールデン・ポリチコからは、バス停で一つほどの近距離である)

木村さんは足が悪いので自動車で先についた。いくつかの門を潜って、待合室で小憩する。

おりから私たちの前を、本部にいた朝川君が「釈放された」とうれしそうに通る。

(注・朝川仁三郎。四月一日のテロ事件当時、現サウデ区ボツカツ通りにあった臣連本部で宿直をしていた人物。翌日の臣連本部の手入れのとき拘束された。なお臣連本部の所在地は古い資料にはジャバクアラ区とあるが、当時は、プラサ・ダ・アルボレから先を、たんにジャバクアラと呼んでいたため、正確ではない)

小憩ののち、看守に案内されて、階段をいくつか曲がって、奥の大部屋についた。二階である。ここに同志達がいる。扉をあけて中に入ると、同志たちが一斉にたちあがって歓迎してくれた。

旧知の人が大半だった。リンスの大畑老も健在で、手を握りあって再会を喜び合った。せんじつ、家内は「田中さんは自宅にいる」と言ったのに、彼の顔もみえる。不思議にお

もって聞くと「その後、サンパウロに連絡に出て、また捕まったのだ」という。娘婿の宮原は精神に多少の異常があるのか、すみに座って無表情である。もともと小心な彼で、可哀相だがなにもしてやれない。

田中さんのそばに私の席がつけられた。いちおう落ち着いてから見渡すと、ここはもとは病室であったとかで、窓ガラスがはまって、きわめて明るい部屋だった。入り口付近をあけただけで、あとはクッションを隙間なく敷きつめてある。六、七十人の大人数に便所が一カ所しかないのが不自由である。同志も各線（鉄道線）の臣連員がほとんどである。吉川、根来両氏は病室に在るという。

木村老が新入りを代表して、挨拶をした。

・・・このようにして、私もデテンソンの一員になった。

ここは芸達者がおおく、夜ともなれば賑やかなこと、お祭りのごとく、謡曲、浪花節、落語、浄瑠璃などが、毎晩もよおされる。なかには尺八の名手もおり、じつに獄とはおもえない境遇である。

室長はかねて顔見知りの人である。

朝は六時に起床して、室長の指揮でつぎの行事をする。

- 1 皇居遥拝
- 2 護国の英霊に感謝の最敬礼
- 3 祖国の同胞に感謝の礼
- 4 外部の同志に感謝の礼
- 5 愛国行進曲の合唱

それがおわると各自が朝の挨拶をかわす。

食事はおおきな容器に、飯も副食物もはこぶ、これを各自の皿にくぼる。これらの仕事や後片付け、清掃などすべて青年たちの奉仕である。

日本人好みの野菜、果物、菓子などの差し入れが豊富にある。一日おきに外部の同志たちが差し入れるとのこと。この温情は肝に銘じるべきである。

私たちから二日遅れて特攻隊とその関係者十二名が合流し、つづいて、しばらく消息不明だった谷田、河島、渡真利の諸氏が合流した。それでまた、ひとしきり話がはずむ。睦まじいこと、じつに親身もおよばない。

この刑務所の別棟に、既刑者が六名、服役中と聞く。例の翼賛会事件の人々である。既刑者であるから、あるていど自由な生活をしているとも聞く。

(注・このころのブラジルの刑務所はある種の理想主義のもとに運営され、更生は囚人たちの自主的な良心によるという方針の刑務所がいくつもあった。そのために自由が大幅に与えられていた)

この人たちの厚意に古雑誌などたくさん貸してくださったということ、本なども読みきれないほどある。そのほか、将棋、囲碁、花札、トランプなど、およそ遊びごとにはことかかない。毎日、朝食後には屋上で一時間をすごせる。囲いはあるが聖市一円を望むことができる。ここでいつも体操をする。青年などは団体体操をして心身を鍛えている。

二カ月半も缶詰のごとき生活をした私には、まったくウソのような変化である。

その後、新入りはない。ここにいる人々が最期まで闘うの

ではないかと思う。

ある日、伯国の高官という人々が視察にくる。立派な人物が六名。なかなか愛想がいい。なんのための視察か？

このことがあって四日後、我らに苦難の道がむかつてきた。

人々よ、銘記せよ！ 昭和二十一年七月十日を！

午後十一時を過ぎたころ、突然「全員、移動する準備をせよ」と看守の命令。さあ大変。我は短期日なれど、大半の人は四カ月も住み慣れた場所である。ようやく整理がおわるど、いちじ、階下にうつし、各自に番号のついた紙片を渡す。番号の順で十名が一組とされ、いずれかへ連れ出していく。「・・・？」

人々は極度の不安に襲われた。

「いったい、どこへ連れて行くのか？」
と深刻な声がする。

宮原は先に行った。私は大畑老といっしよで、中程の順番だった。そこには窓なしの囚人車が待っていて、乗ると、すぐ走り出す。窓がないからどこを走っているのか一切不明。だが着いたところは駅だった。深夜のことで何線でもかわからない。車をおりると、すぐ列車に追い込まれた。列車内をみわたすと、窓はぜんぶ閉め切っており、入り口には武装兵が警戒している。

すでに起居さえ不自由な吉川中佐も悲痛な表情で乗車されていた。そのたの幹部諸氏も深刻な表情で、不安げである。フと気づくと、田中さんが乗っていない。私のすぐあとにいたのだから来ないはずがないが、ブラジル生まれの子供が

いるということ、乗車させられず、釈放されたのかもしれない。

「全員、乗車完了」の声に、兵隊が「発車」と命じた。時刻はすでに翌日の午前三時十分。

外の様子はぜんぜん分からない。

「どこへ連れて行くのか？」

「サントスらしいぞ」

小声があちこちで漏れる。

総員八十一名、行方も知らず、闇から闇への道をたどる。家郷に家族をのこし、前途に燭光もなく、ただ民族意識のみ高揚して、苦難の道をたどる。皇国の民の試練、また辛酸なりと言うべし。

地獄船

列車は驀進する。・・そとが白んできた。誰かが窓をあけた。朝の冷気が車内にながれこんだ。山中の急坂をくだっていることが知れた。まぎれもなくサントスに向かっているのだ。

そのうちに、今後われらを収容するイリヤ・アンセッタ（注・アッシェッタ島のこと。碧水はアンセッタと記しているが、以後、アッシェッタと表記する）の刑務所の所長が同乗していることがわかった。

車内で所長が挨拶した。

「諸君をむかえるために大部屋二つを開放して、掃除をしている。寝具なども準備した。服や靴、そのほかの日用品も支

給する。許す範囲で諸君を厚遇するつもりである」

それを聞いて皆も安堵した。まず行く先だけはわかったのだ。

まだ見ぬアンシエッタ島を想像しているうちに、午前七時、サントス駅についた。駅から船着場までは徒歩である。改札口をでると、我らは長い一列になり、五メートルくらいの間隔で武装兵がついている。

一睡もしていない疲れた体で、重い手荷物をもち、声なく歩むのだが、波止場は行けども行けども遠いのである。

道行くブラジル人たちは「シンドウレンメイだ」「人殺したちだ」と云いながら我らの後ろをゾロゾロとついてくる。顔から火が出る思いをした。こんな恥さらしは生涯でもはじめてで、たれか憤激の情をおこさぬものはあるまい。波止場までの四、五〇分の道のりが二時間も歩いたように感じた。ようやく船着場に到着した。

ここは近辺への渡船の発着で、たいへんな雑踏である。一息つくひまもなく、人込みをおしわけて待機の船にのった。ところが、この船が、およそ人間をのせる船ではない。20トンもあろうか。荷物をはこぶ、汚い発動機船である。しかも、船底がわれらの乗る場所である。

二尺ほどの綱にぶらさがって降りると、奥にはやはり島送りの外人囚たちが乗っていた。いずれも人相のわるい、娑婆の食い詰め者、泥棒、人殺しなどの連中で、油断できない破廉恥漢ばかりである。ひろくない船底で、横になることもできず、膝を抱えて座るしかない。

老中佐ほか数名は特別に上のほうにおられる。

船底はへんな油の臭いと体臭とが混合してムツとする。荷物もほとんど投げ捨てるようにして、受け渡しをした。

青年が二人、護衛付きで、道中の食べ物を探めにいった。かくして、午前十時半、われらの地獄船はサントスを出航した。

(注・アンシエッタ島は重罪人をいれる刑務所だった。裁判をうけて刑期がきまった者はべつとして、碧水らは「好ましからざる人物」として国外追放の処置がされ、とりあえず島送りになった。まだ裁判が済んでいない者もいる。四月一日のサンパウロ市でのテロが導火線となって、サンパウロ州奥地でテロが頻発していたので、当局も一人一人じっくり裁判をする余裕がまだなかったと思われる。ブラジルは大西洋に面しているので日本までは遠く、とりあえず島送りにしたが、太平洋に面したペルーなどでは国外追放の処分を受けた勝ち組は実際に日本へ送還させられた)

風光明媚をほこるサントスも船底については眺めることもできない。私はしきりに空腹をおぼえた。

しばらくは穏やかであったが、そのうちに揺れだした。(注・広大なサントス湾からでたのであろう) あちこちで溜め息の連続。みんな生気がない。そのうち、だれか吐く者がいる。空気が変わらないのと、吐瀉物の臭気でたまらない。

朝食として少量のビスケットと腸詰めがくばられる。水はない。まあ、これでも一時は凌げた。このような我らの苦難を好機とばかり、外人囚はわきの者のポケットをさぐったり、煙草をぬすんだりする。数人が「金を盗まれた」という

が、この混乱の中では術がない。

船は木の葉のように揺れはじめた。不眠と空腹と不安で各人とも生きた心地がしない。しかし、八十一名の同志の運命は一蓮托生という心強さもあつた。

ポンポンと船をすすめる発動機の音と振動が、空腹に応えるのも不愉快である。船足のおそい船のあゆみは遅々として、日没ころようやくサン・セバスチヨンという小湊についた。(注・対岸にイリア・グランデが迫る良港)

そこも二十分ほどの停泊で、出航した。

「ここから四時間ほどでアンシエッタ島につく」

と上で誰かが説明した。

ああ、どんなところでもいい。とにかく船からおりたい。そして、横になりたい。

突然、上で、

「島がみえる！ 電灯の明かりがみえる！」

と騒ぐ声がある。私も綱につかまって甲板にでた。

暗くて正確にはわからないが、いま通過しているところは海峡らしく、やがて内海にはいったか、波もおだやかになった。建物や栈橋がだんだんに近づいた。そこでは大勢の人が動いているのがみえる。そして、ほぼ十分後にボロ船は栈橋に横付けになった。いよいよ島の刑務所に着いたのである。皆もホツとした面持ちで、おたがいに荷物など助け合いながら上陸した。

全員が栈橋に整列して、人員の点呼があつた。

目の前の、予想もしなかった、立派な大建築におどろく。
・・・こうして、苦しかった地獄船とも「おさらば」したの

であった。

（碧水後注・この文章を私はとうじの忘備録をもとにして書き綴っている。受難の同志の言行や銃後の温情を個々に描写することを避けた。したがって私の獄中記の感がするが、民族の苦難は私もほかの同志もかわりないのである。島の生活の途中から第二、第三の流島者たちがくるが、経緯がことなるこれらの人々については、私の推測の範囲にすぎないこともある。この手記を私は二年をついやして書いたが、赤貧洗うがごとき状況で出版も意に任せない）

流島生活

私たちはアンシエッタ島の第一歩をふんだ。

棧橋の正面にある階段をのぼって立派な玄関にはいった。きわめて近代的な設備の、堂々たる建物である。玄関から突き当たりが両開きの大扉になっていて、その中庭が獄舎らしい。玄関脇の事務所で、まず外人の囚人がひとりひとり裸になつて、嚴重に検査された。そして彼らの服や身につけていたものは袋につめて、あたらしい木綿の青地の服とズボン、すなわち囚人服を着せられて、看守につれられて収容された。

私たちも身体検査をさせられるかと覚悟していると、

「日本人は疲れているだろう。そのまま、明日にでも検査するから、部屋へいって休め。」

となかなか親切だった。

看守に案内されて、大部屋に行く。なんとも広い部屋である。八十一人がゆつくり寝られる広さがある。

「もう一部屋、掃除してあるから、明日は二組にわかれてよい。寝台もあるが、今夜はおそいからクッションだけで寝なさい」

各自「やれ、やれ」と腰を下ろした。ときに、十二日、午前三時すぎ。護送列車や地獄船にゆられて疲れきったが、ようやく落ち着いた。しばらくして看守が、

「もう遅いが、いちおう食事の準備ができた。あついコーヒーもあるから、炊事場にとりにいけ」

といつて、食器と湯飲みを人数分もってきた。じつに、予想もしなかった厚遇ぶりである。

各自が食事をすませて、はじめて横になる。蘇生の思いとともに、流島の初夜に、なんのための島流しか考えてみる。

今回の疑獄は臣連弾圧が彼ら敗戦派の重要な目的であった。そこでなんらの確証もなく硬派を投獄した不法に、我々はますます激怒し、彼らとの対立が先鋭となる。官憲に誣告し、硬派総検挙の暴挙をなした。この同族をくるしめる悪逆に血気にはやる若者たちの愛国的熱情が、ついに特攻隊の天誅となって彼らを倒したのである。(注・ここで口を挿むべきではないが、この碧水の議論は時間的に原因と結果の因果関係が逆に思える)

かれら特攻隊員は一身を顧みることなく、身を捨てて決行したのであって、祖国愛、同胞愛の発露であることは、戦場における皇軍兵士とかわらない。

われら臣連員は聖旨にある日本精神の美を保有せよとの至上命令をまもって、日本精神高揚をとなえ、もって、指導機関をうしなえる同胞の善導を目的とした。国家離反者を増やさないための敗戦派との対立抗争である。不法検挙の実体を隠そうとして、立場がことなる臣連員と特攻隊をおなじデモンソンに収容したのである。

かくのごとく見てくると、真相は明白である。ブラジルには死刑はないので、重罪人として島流しにし、ひいては銃後との連絡をたち、われらの同志に島流しを恐れさせ、さらなる事件を未然にふせごうとする苦肉の策であると断定できるのである。しかし、その想定に反して、今後ますます非国民打倒の機運がもりあがることが予想される。

現に、ここに疲労困憊して横たわる人々は、思想戦を闘い、茨の道をいく、崇高な歴史と伝統に生きる人々である。ねがわくば、長期にわたるであろう苦闘生活を耐えられんことを。

・あれを思い、これを思って、胸に熱いものを感じながら、ついに夜があけた。

午前六時。軍隊式の起床が鳴った。

われらも全員が起き、洗顔をおえて、おごそかに朝の行事をとりおこなう。

そのうちに先住の囚人がおおきな容器に熱いコーヒーと、パンを配りにきた。

午前七時。またラツパが鳴り、囚人たちが就労するのがみえた。ここでは食事も休憩も就寝も、すべてラツパの合図に

よることを知った。

午前中、所長がくる。所長は大尉で、少尉が補佐をしている。所長のいうには、

「日本人はほかの囚人と区別して、できるかぎり優遇する。みなさんもそのつもりで行動してほしい。部屋ももう一部屋あけてあるから、のちほど二組にわかれて移ったらよい。服、毛布、敷布、枕、手拭いなどは支給するから、あとで事務室にいつて受け取ること」

など、至れり尽くせりの厚意である。それで我らも代表者がお礼の挨拶をした。

所長たちが去った後、全員で相談して二組にわけた。一組は二号室に移った。私はもとの四号室だ。ここは内庭をはさんで並ぶ獄舎のうち、こちら側が偶数で向こう側が奇数になっている。だから二号室と四号室は隣になる。

四十人分の寝台を配置したが、中央に広いスペースがとれる広さだった。室内には便所が三カ所、さらに広い洗い場がある。入り口は1メートルほどの鉄の扉で、差し入れの小窓がある。裏は鉄の格子で、所長その他の住宅がみえる。向こうの高台には立派な兵舎がある。囚人は就労中は開放している。我らの部屋と六号室のあいだに木工、鍛冶などの仕事場もある。

各自の居場所が定まったので、室長の互選をした。私の組ではバルパライゾの笹谷氏、となりの二号室はパラナの谷田氏と決まる。(注・谷田＝谷田才次郎。谷田は臣連仲間から「北パラナの親分」とよばれた人。釈放後は勝ち組の子弟がかよう日本語学校を建てたことで知られる)室長は全員を

代表する世話役である。

整理がおわって落ち着いてみると、娑婆の獄舎より住み心地はよさそうだ。いまごろはデテンソンに面会にいった人は、われわれが闇から闇に島送りになったことを知らず、騒いでいるだろう。いずれ事情がわかると、さらに対立に拍車がかかる事だろう。

所内を歩いてみる。・内庭の奥にはこの大所帯をまかなう炊事場がある。となりがパン工場。つぎが洗濯場。そのまゝえにミシン室。そして周囲に椰子が植わった大運動場がある。水は天然水利用なので、不足がちのようだ。電気も水力で起すのか、薄暗い。食事のときはラツパの合図で、各室のまえに食器をもつて整列する。部屋の番がくると配給所にいき、フエジョン（煮豆）、米、副食物などを盛ってもらう。部屋にもちかえって、寝台を食卓がわりにして食べる。

・・・このようにして、三日がすぎた。みんなも元気を回復した。この日に、獄衣、羅紗の厚手の上着、毛布、敷布、その他の消耗品が支給された。自分たちの服や持ち物は番号札をつけた袋にいれ、事務所に保管された。

背中に番号のはいった服を着て、みんな、なんとも感無量の顔つきだ。寸法をあわせた服ではないので、おおむねダブダブである。いかにも「囚人になった」という感を深める。

求めたいものは室長をつうじて注文できる。この島から四マイルほどの大陸の先端に「エンシヤード」という小湊があり（注・エンセアーダ。以後そう表記する）、そこには雑貨を商う店もあるという。さらに十キロメートルほど離れて

「ウバツバ」という小町がある。郵便などはその町を經由してくるといふ。エンセアードには荒れさえしなければ、毎日カノア（注・カヌー）が通うそうだ。サントスとの連絡は毎月の六の日、つまり六日、十六日、二十六日の三回の船便があるという。

こうやって事情がわかると、案ずるより生むがやすしで、さして不便はなさそうである。

島について、最初の悶着がおこった。

原因は、頭を丸刈りにして、髯もおとす、というにある。それはここの規則で例外はないという。おもに老人組のいわく、

「所長はわれらに好意をもっている。伯人囚とおなじには扱わないといった。交渉して、丸坊主は免除してもらったらどうか？」

おもに若い連中の反論、

「ここの規則で刈れというなら、従ったらどうか。頭髮くらいで未練がましくあれこれ言うのは男らしくない」

甲論乙駁で果てしない。そのうちに気の早い若者が十人ほど出て行って、はやくも丸坊主になって戻ってきた。こうなつては老人組もしかたなく理髪所へいった。・おたがい人相がかわつて、苦笑する。

私は思った。このように瑣細なことで論争をするが、われわれはもつと大きな試練に耐えてきたのではないか。厚遇されているといつても、自分たちは囚人ではないという理屈はゆるされない。そのくらいのが理解できない同志たちで

はないはずだが、境遇が変わればふだんの常識を失うのかもしれない。こんごも、こんなことが揉め事がおこりそうだが、困ったことである。まだまだ未知の世界の入り口にいるのだ。先になにがあるか分からない。各自がその覚悟をもつてほしい。

さて、いよいよ休養の期間もすぎ、明日から働くように言われた。

仕事の内容の説明があり、希望者はもうしでて、それぞれ持ち場が決まっていた。仕事の内容は、野菜づくり、バナナ園の手入れ、マンジョツカ(マニオク芋)、フェジョン(いんげん豆の近種)畑、など。これは十二、三名を一班として、班長をきめて行動するのだそうだ。そのほか、鍛冶、木工の経験者はその仕事場に、ほかに事務所の給仕、炊事場の手伝いなどがある。病人と六十歳以上の者は労役免除だった。

農業関係の仕事がきまったものには、作業用の古着や麦わら帽子などが支給された。

労役に服する

私はトツパン出身の青木君を班長とする野菜班にはいった。ぜんぶで十二名である。土地の下見のため、監督官につれられて外出した。はじめての外出である。

事務所のまえの通路のすぐ下が白い砂浜で、その砂浜も傾斜があるため、すぐ真っ青な海になっている。波裏なので、

よせる波もひくく、大陸の緑や点在する島々といい、風景絶佳である。(注・このあたりは現在は高級レジャー地として名高い)

道にそって遠浅の砂浜もある。事務所付近は海水浴場であり、良好な漁場でもある。

立派な病院もみえるし、ちいさな小学校もある。住宅も点在する。

畑についた。すでに先住の囚人によってブラジル人好みの野菜が、しかしごくわずか、植えられていた。われらの班はそのつづきの土地、むこうのバナナ畑までの土地を開墾することにした。むこうのバナナ畑には一万本ちかくのバナナが植わっているそうだ。地味は豊からしい。周囲の小山は雑木林で薪はそこから必要なだけとれるそうだ。

班長は監督官と打ち合わせをして、必要な道具などの話をして、われわれは朝食前にもどった。

この日の午後に全員の健康診断が、病院でおこなわれた。身長、体重などの測定、持病の有無など、慎重な検査をうけた。じつに近代的な刑務所だと思った。このようにして、諸般の手続きもすんだ。

日課を書く。

午前五時四十分に全員が起床して、手早く洗顔をすませ、室内の中央のスペースに集合して、朝礼をおこなう。朝礼がおわると愛国行進曲を合唱する。そのころに、珈琲とパンが配られる。

午前七時のラッパで、事務所前に部屋ごとに整列する。室

長は右側、一步前にいて、人員の点呼がある。そのとき、今日診察をうけたいもの、治療の予定があるもの、部屋にいのこるものなどは、列の外に集合する。

どこに何名が就労するか記帳して、横の通用門からでる。でるとき看守が服のうえから触って、検査をする。外人囚など刃物をもちだしたりすることがあるためだ。彼らは娑婆の持て余し者の重罪犯人だから、油断はできない。それぞれの働き場所で、鉄砲をせおった兵が二、三人警戒にあたる。

われら日本人の野菜班は班長が列の先頭の横にいて、歩調をあわせて整然と行進する。挨拶も挙手の礼である。すべて軍隊式で、われらも再教育されることが多々ある。

畑の候補地につくと、開墾をはじめめる。わが班には野菜つくりの専門家が数名いるので、みんなも精を出す。午前十時半に朝食のため、もどる。通用門をとおるときは、出るときとおなじように服のうえから検査をうける。

ここでは労役もけっして強制されず、午前と午後二十分ずつ休憩がある。いつも新鮮な空気を吸っているので、休憩のときの煙草の一服がこのうえなく旨い。たぶん、健康になるであろう。午後六時、夕食後に部屋の扉に鍵がかけられる。適度の労働をしたあと、自由に誰彼と談笑し、きわめて和やかな獄舎風景が醸される。

聖市内の刑務所や留置所とは雲泥の差である。予期しなかった現実だ。

しかし、私は思う。臣連幹部の吉川、根来、木村氏なども同室なのだが、すでに老境にはいり余生を安楽にすごすべき人々、コーヒー園や綿作農場をもって活躍している人、事業

を経営する人など。あるいは私のように蓄えもなき人々・それらの環境も身分もお構いなしに投獄し、あげくのはての流島である。それぞれの人は憂悶をもち、家族への想いも深いであろう。また留守家族たちの苦労もいかばかりか。このように民族の辛酸をなめる受難の人々と、信念をおなじにする一般同胞の苦衷を察するとき、私はおもわず暗涙にむせぶのである。表面的には常とかわらぬ起居をしているが、それは嘆く、愚痴をこぼす、悲観する、などを恥とする皇国の民の伝統である。実相は千万の想いがあるのだ。

世紀変革の過度期にわれわれがこのような辛酸をなめていることを歴史に記さなければならぬ。私が手記をしたためているのも、その想いからである。私が周りの人々の生活内容の記述を従として、思想の闘いを主として記述するのも、そのためである。

私たちが島に着いてから、はじめての定期船がやってきた。サンパウロ丸といって、七十トンくらい的大型船である。我らの乗った、あの地獄船とは雲泥の差がある。この船が食料など、在島者の生活必需品をはこんでくる。大勢の囚人たちが荷揚げに働いて、栈橋はたいへんな雑踏である。

しかし荒天がつづく、船が来られず、食料などが欠乏して困るときもあるそうだ。サンパウロ丸はこの荷揚げがすむと、向こうのウバツバへいき、帰りにまたここに寄る。そのとき便乗者などをのせてサントスに戻る。

我らの流島が銃後の同志たちに知られて、安否をきづかう手紙も何通かとどいた。ただし、手紙は日本語はだめで、ポ

ルトガル語の手紙は開封の上、手渡される。こちらからの返信も、やはりポ語で書かなくてはならない。いつもながら、所長はじめ、看守、事務員ともわれわれに好意的な態度である。

土曜日は半日で、日曜日は外出がゆるされ、つれだって遊楽気分ですく。刑務所のうらは住宅がおよそ二十戸ほどある。兵営もつねに四、五〇名の兵士が常駐して、立派な兵舎だ。その兵舎のよこの坂をのぼって西の海辺にいく道にはおおきな豚舎もある。二、三〇〇頭もいる。牛も二、三〇頭が放牧されている。そのつづきにレンガ工場もある。これらの労力は先住の囚人たちがあたっている。じつに規模のおおきな刑務所で、あらためて驚いた。

兵舎のよこの坂をのぼって西の海辺に行ってみた(注・外海に面したほう)。話にはきいたが、そのあたりの断崖絶壁の雄大な風景は、この島随一の絶景だそうだ。奇岩にうちあたる大波は、まるで雨のような飛沫をふらせ、はるかとおくの水平線には緑の島々が点在している。まことに見飽きない風景だった。

日曜日の外出は自由だが、午前十時半の朝食までには戻らなければならぬ。

もどつてみると、外人の囚人たちはフットボールの試合に熱中している。黒組と白組にわかれ、応援もまた黒と白にわかれている。

ブラジルの新聞が報じていると聞くところによれば、われらを国外追放の処分にするべく申請中だという。しかしなが

ら、徹頭徹尾正義である我らを、さらに数十万の同胞が支援する精神運動の結合がある我らを、そう簡単に処分することはできまい。敗戦派はそんなことを吹聴しているかもしれないが、おおかた空砲であろう。

島の生活もだんだん慣れてきた。班長をはじめ、みんな熱心の開墾するので、野菜畑も一部に種をまくまでになった。班のなかには専門家もいるので、要領よく進んでいる。

どの班もせいを出している。所長も日本人が従順でまじめに働くのに感心してか、私たちにつねに愛想よく接してくれる。事務所の給仕、病院の雑役、タイプライター係、商品部の係など、青年たちが採用された。まえからいる囚人にかわって、どんどん日本人が採用される。日本人の良さが分かってくるのだ。

さて、一週間ほどたったある日、釈放されたとばかり思っていた田中さんと、そのほか泉、河守田の二青年が到着した。田中さんは我らがデテンソンを出発した後、病気だった二青年とともにいたという。三人は陸路を護送されたのでタバテ、ウバツوباと二カ所の留置場に泊まりながら、ここまで来たという。険峻な海岸山脈をくだる自動車は、ずいぶん危険な箇所を通るそうである。

・・なにをどうするか、不可解なことが多々あり、これもその一つである。

老中佐は半身不随のため二号室の子息吉郎さんと過ごすことになる。

青年たちは澁刺として元氣旺盛である。よい空気と適度の労働がもたらすものだと思う。しかし、集団生活の常とし

て、少数ではあるが、従順に働く者を冷視する驕慢な者たちがいる。集団生活には、そのような個人主義は禁物で、遺憾なことだ。われらの境遇も思想戦の最中であることを知らねばならない。あるいは口先だけの同志もいる。

伯字紙にカフエランジアで、楠木某、今井某の殺傷事件が、逮捕された特攻隊の写真入りで、大々的に報道されている。写真のなかには旧知の小野君の顔もある。つづいてアリアンサ産組理事の堀内某が射殺された記事も載った。ノロエステ鉄道線一帯で敗戦派と官憲が躍起となって特攻隊狩りを開始したとも報じられている。

島に来てからはじめて、面会人が来島した。指定された人だけが面会をゆるされる。ソロカバナ方面の人、三人が面会を許された。

あとで聞いた情報によれば、銃後は騒然たるもので、対立は日増しに激化している。オールデンポリチコには日本人の○田○城などが暴威を逞しくしている。面会の手続きなども容易ではない、等々。これらの人からたくさんの煙草や菓子をいただいた。

かくして疑獄はつぎつぎに事件をおこして、ますます複雑になっていく。

決別

ある日であった。オールデンポリチコの指令として、老中佐を召還するとて、突然、ひとりの刑事がやってきた。臣連

の責任者として召還するのか、病気のため召還するのか我らには不明。ご子息の吉郎君が同行することになった。

出発まえ、全員が集合してお別れの言葉をのべた。じつに慈父と別れるようで、全員が涙である。とくに感激性のつよい老中佐は何事かをわれらに言い残すつもりらしいが、ついに言葉とはならず、滂沱の落涙にむせばれ、たつた一言「行ってきます」と辛うじて述べた。ご心中を察して、誰か断腸の想いをしないものがあるうか。全員、粛々として声なく、悲痛な気持ちで、ただ道中恙なきを祈った。

思えばすでに長年のあいだ、祖国愛、同胞愛の熾烈な炎をもやしつづけられ、何回となく投獄されてなお屈せず、在伯同胞の灯火として毅然たる不動の信念は、病苦の獄中生活をも恬淡として送られた。いつの日か、たとえ中佐が昇天されるようなことがあっても、この信念はわれら脈々として受けつぐであろう。

四日後に子息吉郎君がもどり、「父はデテンソン付属の病院に収容された」と報告し、一同は安堵の胸をなでおろした。

吉川中佐をお送りしてから一週間後、ふたたび刑事がきて、幹部の根来氏を召還するという。諸式はまえとおなじだった。

瘦身の氏はわれらに「不退転の信念を堅持せよ」と訓示された。吉川中佐のときとおなじように、全員が涙でお送りした。

わずかな期間に、私たちは幹部二人と離別し、きゆうに寂しさを感じた。

生活はきわめて順調だった。

来る船ごとに、あるいは陸路からはるばると同志の訪問者があり、その都度もつたいないほどの物品の差し入れがある。

島にきた同志たちは異口同音に、敗戦認識運動が熾烈になったこと、ここに来るのさえ妨害がある、などを語られる。

そうした悪条件の中を同胞愛の情をおさえがたく、遠路はるばる来島する同志の温情を、われわれは生涯、忘れてはならぬ。

面会が指定された人のほか会うことはできない。獄衣をきて、不慣れの労役の姿をみて、ひそかに暗涙にむせぶ同志もいる。とくに女性はそうである。わたしも心中をお察しして目頭があつくなる。

最近になって、この島にくるには三つのコースがあることを知った。まず第一のコースは、陸路を鉄道でタウバテまできて、乗合自動車にのりかえて険阻な海岸山脈をくだりウバツバまでくる。そこから島のまえのエンセアーダ海岸にいたってカヌーで渡ってくる。

第二のコースはサンパウロ市よりカラガタツバ港に直接いって、そこでサントスからの定期船に便乗する。このコースは定期便の日にちを知らないと、港で日にちを空費する。第三はサントスより直接定期便に便乗してくる。海路以外はいずれも難コースだという。

最近はかぎりない同志の温情で、醤油も味噌も闊達にめぐ

まれ、菓子煙草などのほかにも日本趣味のものなにひとつ不自由はない。勿体ないことである。

われわれの島送りは、事件発生いらい、近親者はもちろんのこと、志をおなじくする者にとつて重大関心事となつていゝる。移民の歴史がはじまつていらい、このような大疑獄ははじめたことであり、おそらく今後もないであろう。しかも外部においては果てしなく思想戦がつづいている。さらに紛争が激化し、第二第三の受刑者がくることも予想される。日本精神をわすれ、皇室を冒瀆する者がいるかぎり、当然のことである。

当国の政治状勢に歩調の合わぬ我らではあるが、それは一時的現象であつて、ブラジルもちかく新憲法が發布されると聞く。

(注・この年—1946—に發布された。それによつて外国語新聞、すなわち邦字新聞の発行も可能になつた)

われらの皇室と国体護持の観念を笑うものは、永遠の自己を放棄することであつて、われわれは今、いかなる迫害をうけようとも忍ぶべきである。

外部においてわれらの釈放運動を合法的に提起したと聞く。しかし、特攻隊と臣連をむすびつけて治安攪乱者であると名分をつけて流島した現在、釈放運動は時期尚早である。成果は期待できないであろう。いたずらに銃後の負担を増すことは望ましくない。なぜなら合法的な釈放を申請するためには、当局の非、敗戦派の企みを追求しなければならぬ。われらが期待する新時代がくればそれも可能であろうが、現在には当国の弁護士に自国の非を追求することに協力を期待で

きるだろうか。金になるからといって受ける者がいるやもしれぬが、危ないものである。

このような不合理な事件に対しては、弁護士をたのむより、おおがかりな陳情団を組織して大統領に直訴するほうが効果があるのではないか。われわれを誣告している日本人は少数であり、臣連員の釈放が在伯日本人の総意であることを、大統領に分かってもらおうのだ。われわれを出獄させようという真心はありがたいが、われわれは苦難の道をたどることをすでに決心している。善処されることを望む。

また聞く。ちかく州統領官邸において、軋轢を緩和する目的において、硬派の日本人をも呼んで懇談会がひらかれると。おそらくこれは敗戦派の謀略であり、現状において州統領が仲裁することなどありえない。甘言につられて出席した硬派が一網打尽に逮捕されるようなことがないか心配する。私の杞憂であればよいが。

(注・この会合が開かれたのは1946年の7月19日である。半田知雄『ブラジル日本移民史年表』の記述から会合の様様を引用する。「カチ組への説得無効。・テロ事件発生と同時にブラジルの新聞は連日シンドーによる攻撃、殺害事件を大々的に報じてきたが、事態を憂慮したマッセード・ソアレス・サンパウロ州執政官は事態の鎮静化を図るため、州政府に狂信的カチ組分子代表5〜600名を各地から招き、各関係者立ち会いのもとに日本が全面降伏にいたった経緯を説明し、ブラジルの法律をまもり、平静を保ち、ブラジル発展のため生産活動に励んでもらいたいと告げたが、参加者たちはこれを聞き入れようとしなかった。ブラジルの日

刊紙は激昂し、これをきっかけに、一般市民の排日気運はいつそう高まった」

・ここには記されていないが、ブラジルの新聞が激昂したというのは、カチ組の参会者が執政官の温情と理をつくした説明にまったく耳をかたむけようとしなかっただけでなく、参会者の質問のなかに執政官の立場を侮辱するような言辭があつたことが知られている。たとえば「ブラジルの新聞が日本は負けたと書くことを禁止せよ」と執政官に要求した、など。これがジャーナリストたちをいたく刺激した」

世相はますます複雑怪奇の度をまし、銃後もわれわれも非常時となる。

島の生活 1

ちかごろ、各生産班の努力が成果をあらわしてきた。野菜など、専門の人がいるため、見事な出来ばえだ。まだ少量だが、所長そのほかの人々の食膳に供するようになった。

なんの労役をやらせても、先住の囚人とくらべものにならないから、所長もしげんと日本人を認めるようになる。所長は「はやく大量に生産して、君たちも食うがよい」となかなか愛想がよい。この頃は野菜畑は所長の自慢で、面会人があると自分で畑まで案内してくる。先日などはバストスの人の家族を案内された。畑で面会である。おかげで我々もにぎり飯や日本式のご馳走をご相伴した。畑でたべると旨いし、みんな子供のよう嬉んだ。環境が童心にかえらせるのかも

れない。

「窮すれば通ず」というけど、それを実感した。

誰かが島特有のトゲのある椰子の木を切ってきて、それを小割りにして箸やペン軸をつくりだした。ナイフなどのものは持たされないから、ガラス片で切ったり、石で磨いたりするのだが、美術的にもそうとうなモノができるようになった。まるで原始人の手作りのようだが、これがはやって誰もができるようになった。こんなことに精を出していると、まったく退屈しない。そして面会人があるたびに「流島記念だ」といつて家族、友人、知人あてに託す。

皆は意外と器用である。だんだんと進歩して、自慢の品々をあつめて展覧会までひらくようになった。

同郷の田中さんはマンジヨカの生産班にいる。家ではおおきな工場の主だが、ここでは一労働者として精を出す。おなじ同郷でも宮原と大畑老は病氣ばかりして、いつも病院の厄介になっている。これは気概がないから駄目なのだ。もつとも、多数の中には、ただ部屋に居残りたいために病院の診察を希望するものもある。こんなことは集団生活では慎むべきことだ。とくに青年に悪影響をおよぼす。初志にもとる、これらの人の行動は不愉快である。

あいかかわらず、ほとんど毎日、慰問に来島する人々がいて、恵与される物品で、だれもが沢山のを抱えている。獄中とはいえ、まったく不自由をかんじない生活である。

そして夜ともなれば老人も壮年も青年も円陣を組んで愛国歌を高唱して、なごやかな雰囲気がかもされる。そう、囚わ

れの身に憂悶は禁物である。

騒然たる銃後を想う

さいきんの伯字紙によれば、聖市の玄関口ルス駅が原因不明の怪火で炎上し大被害をこうむる、とある。そして、これは共産党の仕業だと報道している。こんにちでは共産党と臣連が新聞の目の敵である。

それから幾日もたたないのに、こんどは電車やバスの焼き討ちがあつた。新聞の写真を見ると狂える群衆が暴徒化している。背後に共産党の煽動があるものという憶測記事がでている。

共産党とユダヤ思想がこれからの新時代と相いれないのは明らかだ。面会にきた人の目撃では、貨物自動車が無数に動員され、市民の足を確保している、と。いかに騒乱がおおきいか想像できる。

また、もたらされた情報として、さきごろの州統領官邸の懇親会に、案の定、ゼラルドやロンドン、森田などが出席していたという。あきらかに敗戦どもの奸策だったのだ。私の杞憂が現実となったのである。・日ならずして次のような情報を聞いた。

懇親会に出席したあと、宿にいた硬派六十数名が一網打尽にされてデテンソンに送られたそうだ。やはりそうであった。かれら敗戦どもは我々を島送りにしたが、事態はなお悪化して身の危険をかんじたので州統領をうごかして残留同志を一網打尽にしたのであろう。じつに奸策にかけてはわれら

の及ぶところではない。こんごとも硬派の人々がわれらの釈放運動などでうごけば、彼らはまだまだ弾圧の魔手をのばすであろう。

(注・六十数名が止宿先で逮捕されたというのは碧水の伝聞で、この手稿を書き写している编者にはいろいろな記録にあたってウラをとる余裕がない。ただ、懇親会がおこなわれたのは七月十九日だったが、それから十日ほどたった七月三十日にはオスワルド・クルスという町で勝ち組とブラジル人が口論したのがきっかけで、町中がほぼ三日間騒乱状態に陥った大事件があった。さらに八月にはいると、終戦一周年で各地の特攻隊が行動を起こし、この月だけで十件のテロ事件、亡くなった犠牲者四名をだしている。後になってみると、テロはこの八月がピークで、ほぼ終息にむかうのだが、邦人社会は極端な緊張状態にあり、多数の逮捕者もでている)

しかし、それは悪逆人の横行であり、正義派の受難である。国体を異にするブラジルでおきたことで、けっして永続性はない。正義の認められるとき、御陵威が八紘をあまねく覆うとき、世界の人類に平和がもたらされるとき、道義にもとづく恒久的平和が世界にもたらされるときがかならず近い将来に樹立される。それは疑う余地がない。そして、歴史は、雄弁に、正義が勝つことを物語っている。されは、親愛なる同志よ、この試練に耐えよ！ 最期まで耐えよ、と私は祈る。

光陰は矢のごとし。皆の島の生活もだんだん慣れてくる。

各班の生産も旺盛となり、野菜なども我々だけでなく、ほかの囚人の口にもはいるようになった。銃後との連絡も緊密となる。

ある夜のことである。渡真利君の披露するところによれば、臣連本部が手入れされた後、本部とはべつに、カンポス・ジヨルドンの中内氏を首班として多数の同志が集まって聖市クルゼーロ旅館に本拠をおいているのだが、弁護士パウラウロ氏を臣連代弁人として、我らの釈放を当局に申請したという。すでに運動は順調に進み、連邦政府の要人との折衝もすみ、ちかく合法的に釈放されることになっている。

渡真利君の報告の要はそのようで、以下、運動の経緯や、慰問の言葉、在島の同志もこの釈放運動を支持ねがいたい、と結んでいる。

その報告をきいた各人の顔には喜色があふれた。木村さんがさかんに中内氏の人柄を紹介される（注・すでに述べたが、木村もカンポスの出身）。説明のとおりであれば、そういうの敏腕家のようである。

しかし、私は例によって自説をもっているので、かんたんには信じられない。（あとで分かったが、私と同意見の人もたくさんいた）。いまは、すぐ解決するような状況では、断じて、ないと思う。弁護士についていえば、我らはすでにモラーエス氏にしてやられて懲りている。（注・公認運動のことか？）敗戦派が時をえている今は、その時期ではない。「放っておけない」と心配してくださる気持ちちはわかるが、自分は見解を異にする。

またある夜、中内氏の書信を渡真利君が披露した。今回の書信は留守本部をあずかる朝川、川端両君の人身攻撃である。文中の一節には、彼らは銃後の同志を糾合して文化協会とかを企んでいる。これが甚だしいインチキである。敗戦派とも交遊している。なにをするか分からない。在島同志も注意を要する等々、はなはだしく両君を誹謗した文書である。

(注・朝川＝朝川仁三郎。4・1事件当時、臣連本部で宿直をしていて、野村忠三郎を射殺した犯人の一人が本部に逃げ込んだとき、犯行の一部始終とともに涙をながしながら聞き、汚れた衣服をととのえて潜伏先に送り出した。野村宅と本部との距離は約二キロメートルほどだった。川端＝川端三郎、臣連の論客。筆が立ち、機関誌「臣連」などを編集し、文章も発表した。

朝川も4・1事件の翌日本部にいるところを逮捕されたのだが、碧水がデテンソンに移された晩に釈放されている。これで見ると、臣連の本部員であつても、一応の取り調べで釈放し、幹部のみを長期に拘留したようだ)

私の知るかぎりでは彼らは留守本部に居住して支部との連絡や差し入れなどをしてはいるはずである。この中傷はあきらかに同士討ちであると感じる。たぶん、彼らは中内氏と意見などがちがいがい反目しているのであろうか。

渡真利が手紙をよむと「不都合な奴だ」「敗戦になったのか？」など、あちこちで罵る声がある。軽率なことだ。中内氏の手紙だけで、真相の究明をせずに同志を断定的に批判するなど言語道断である。また、その心理の反面には、釈放運動をしている中内氏への迎合心理があることも否めない。私

はこのとき、一蓮托生の同志にしても、「出してやる」といえば、事の正否にかかわらず、理性をうしなう者がいることを感じずにはいられない。前途多難なわれわれが思想の一致を欠く事は遺憾である。

また、吉迫紋吾以下六十三名がデテンソンに收容されているとの情報。吉川、根来両氏は病室におられるという。

(注・朝川の話がたついでに、ぜひ記しておきたいことがある。「狂信」を書いた高木俊朗は終戦から六年ほどのちに、ピネイロスで昭和学園を経営していた朝川によばれて、一晩泊まり掛けで話を聞いている。高木はすべての見聞を正確に記していて、誰が話したことか、あるいは伝聞は伝聞として記録していて、話の出所について信頼できる書き方をしている。それによると、朝川はこう語っている。

「(ハツカと養蚕は敵性産業であるという噂が奥地に広まって)パラガスウ駅付近の忠君愛国者たち数名があつまって撲滅運動の赤誠団を結成した。代表の松崎留定が趣意書をもってサンパウロ市の吉川に面会した。脇山、吉川、山内の三退役将校は臣民の道をつくす団体を組織することを計画していた。そこへ松崎が撲滅運動の計画をもってきた。三人はおおいに喜んで、すぐに話がまとまった。それから同志獲得運動が各地におこり、撲滅運動がはじまった。運動に参加したのは、忠君愛国の信念を誇る人におおかった。ハツカ畑をおそって残らず掘り起こして捨てた。また養蚕小屋を焼き討ちして破壊した。自分もこの運動に参加した」

・・・この朝川の話はずいぶんと矛盾がある。また、この話の内容は当時の認識派の「パウリスタ新聞」の記者たちの臣

連の成立にかんする認識とも、ほぼ一致している。だから、終戦後六年目の時点で、朝川が新聞に書いてあったことを自分の意見、あるいは体験談として高木に話したのか、あるいは逆に、こういう話が臣連内部の情報として、パ紙の記者たちに信じられて新聞記事となったのか、その因果関係はどちらか分からない。

朝川の話の矛盾は大きくみて二つある。第一は、松崎の訪問が結社結成の直接の動機のように朝川は言っているが、そうではないだろう。吉川たちの戦時下に臣としての道をおこなうという集まりは、吉川の身近な人々、つまり謡の関係者、それから吉川が組合長をしていたクリーニング店の関係者などに声をかけて小さな集まりからはじまったという説が、常識的に妥当である。そのことが追々につたわり、カンポスの木村、マリリアの渡真利など、地方からの参加者が増えていき、運動が各地に広まった。

つぎの矛盾点は臣連の前身の興道社は精神運動としてはじめられたことはハッキリしている。決して撲滅運動として始められたのではない。「撲滅運動の趣意書をみて三人の将校が大喜びをして云々」など、まったくありえないことを、朝川は事実談として述べている。朝川の話に矛盾や疑問が多いということは高木も注意点として記しているのだが、脇山は生糸生産の中心地のバストスで産業組合長を務めた人物である。無人の山林を切り開いて生糸の生産地としてのバストスの繁栄をかちとるまで、いかに人々が苦勞したかは、脇山は十分に知っている。しかも、養蚕撲滅の噂がながれてからも、バストスに外部からそういうことを言う人間が入り込ん

だことはあったが人々は相手にせず、そういう議論の影響はまったくなく養蚕に励んだということが『バストス二十五年史』の記事や座談会などでも明らかである。だからバストスの中心人物の一人の脇山が撲滅運動の趣意書に大喜びした、ということはありません。

もう一人の吉川も家業は子供たちがやってくれ、自分は香を焚いたり花を活けたり、の風雅な生活を楽しんでいた。精神運動こそ唱えたが養蚕小屋焼き討ちなどの行動を容認するとは思えない。まして、敬愛する脇山が不賛成だったら尚更であろう。

・・・というより、そもそも松崎が撲滅運動の趣意書を三人の将校たちに提出したという話そのものが、疑問である。このころ、マリリアの渡真利成一も赤誠団趣意書をもって吉川と面会しているが、その趣意書には精神運動のことが記されているだけで、敵性産業撲滅運動のことなど、まったく触れていない。つまり、渡真利たちは吉川の運動の傘下といういうお墨付きだけもらって、それから独自に撲滅運動を継続したのであった。朝川のいう松崎のケースもそうではなかったか？ 吉川たちの興道社は運動の輪をひろげていく過程で過激派も取り込んでしまい、それが後に臣連の命取りになった、というのが編者の見方である。

なお、赤誠団という名前は耳あたりがよいので、自称する団体がいくつかあったのかもしれない。養蚕小屋焼き討ち事件が各地でおこり、撲滅のパンフレットに吉川の名前が使われ、何人かの実行犯が逮捕された。当局は国家に対するサボタージュ容疑として吉川を逮捕したが、そのときSekis

ei Dan という名前までは分かり、赤誠団の首謀者の容疑で渡真利を何度も取り調べたが、渡真利と赤誠団との関係はついに解明できなかった。それも、自称赤誠団がいくつかあったとすれば、理解できる。つまり警察が逮捕した実行犯たち、自称赤誠団員は渡真利の直系の赤誠団ではなかった？)

銃後は多難にもかかわらず、慰問の温情は日ごとに増え、自分の家には到底えられない、物資の豊富な生活である。情報も頻繁にもたらされる。それに、我々の良識ある働きぶりに、このごろでは各班とも監督はあつてなき状態である。

ある日、我々と同船できた囚人のひとりが兵舎横の崖の切り崩し作業中、あやまって土砂の下敷きとなり、圧死した。罪人であっても死はすべてを清算する。病院で同囚のものが通夜をし、簡単だが柩もつくり、葬式をした。日本人も若干が会葬した。島にはささやかな墓地もある。

親類縁者とおく離れて、死んでいく囚人の悲しさ・運命とはいいいながら人生のつらさを感じる。

臣連華やかなりし頃から、本部などでも親しく歓談した畏友にルセリアの河島作造氏がおられる。氏は創設自体から献身的に臣連につくした人である。次男と二人の受難である。奥さんが面会にこられ、銃後の話をいろいろ伺った。要約する。

「外部の対立はますます激しくなっています。私は遺された

ご家族を慰問して、金品なども贈与しています。なぜなら、遺されて困っている家族もいるからです。中内氏一派の釈放運動にはなにか不純な点があつて、反対している人も多い。ここへ来る前に本部にも寄つてきましたが、中内氏が中傷しているようなことは朝川、川端両氏にはない。またルセリア地方は敗戦の密告もおおく、当地方からデテンソンに五、六名入っています。長男も連絡に出て逮捕され、現在デテンソンにいます」

以上のような話が河島氏の奥さんから伝わった。そして大量の慰問品をいただいた。

不可解なのは銃後の同志たちの動向である。敗戦派との対立だけでなく、釈放運動をめぐつて内部対立が激しくなっているようである。それとはべつに、感心なのは河島氏の奥さんである。夫と子供二人が投獄されたにもかかわらず、屈せず、さうとう遠隔の地までおもむいて困窮する同志の家庭に慰問の金品を授与されている。もちろん、物質的に可能だからでもあるが、奇特な美談である。

私がとくに懇意にして交わっている畏友にパラナの谷田才次郎氏がいる。私と同年配であり、気性も似ている。ただ氏はパラナ有数の大事業家であり、私の方は大貧乏なのが似ていない点だ。氏も臣連創設者のひとりで、私財を投じて精神運動を支持した篤志家である。4・1事件当時は連盟公認の要務をおびてリオに行き、そこで逮捕されてサンパウロに送られた。

氏はいたつて物事に拘泥しない楽天家である。

ある日、奥さんが支配人をともなつて面会に來られた。そ

のときの話の内容を記す。

「パラナの製材所その他の事業は長男と次男が協力してやっている。法的な処理のため顧問弁護士も雇っている。その弁護士に今回の事件についても調べさせたが、確実な情報として、ある時期がこなければ解決しないようだ。ただし個人的に釈放の請願手続きをすれば、このかぎりではない。しかし、私は自分だけが出獄する気にはなれない。皆と運命をとにもするつもりだ。それから留守本部には従来通り補助をして、朝川、川端両君をおいてあるが、よく注意をして間違いないようにする。妻は吉川、根来両氏にも会ってきたが、いたって壮健であった。中西一派の釈放運動にはかなりの反対者がいるらしい。なにか不純な点があるのか、こんど来るまでによく調べるように言った」・・その他は、支配人との事業の打ち合わせであったという。

例によって沢山の菓子、煙草、食料品などいただいた。

河島氏の奥さん、谷田氏の奥さんたちがもたらせた情報によると、中内一派の釈放運動には時期尚早をとなえる人、なにか便乗行為があるとして反対する人などがいることは明らかである。

家族として釈放を望まない人はいない。それなのに反対があるということは、なにか不純な点がある。軽々に判断はできないが、釈放運動の費用をあつめて浪費することもありうる。同志たちがこのように対立するのなら、好ましい運動とは云いかねる。そして、在島の同志の中にも中内氏と気脈をつうじて連絡を取り合っている人もいる。島にいる我らも銃後の混沌とは無縁ではない。

島にきてはじめて、慰問袋が頑丈な箱につめられて送られてきた。ソロカバナ線のプルデンテ市を中心の硬派の人々からの心を籠めた贈り物である。

じつに内容のある慈愛の品々で、おのおの一個ずつ、慰問文も入っている。いずれも感激の涙なくしては読めないが、「島の勇士のみなさま・・・」という書き出しの児童のかれんな文章には皆が泣いた。流島の身にすぎないのに、さながら弾雨のなかの将兵のような扱いで、身に余る光栄だった。（後記・在島中、各地の同志から前後七回にわたって慰問袋を送られた）。しかし、ややもすれば貫うことに慣れてしまつて感謝の気持ちをわすれている人もいる。流島になつたのは自分たちの信念のゆえで、そのことで同志に甘えてはならない。この純情は生涯をつうじて忘れてはならない。

カフェランジア事件の概略

邦人社会に知られているカフェランジアの尾崎孫三郎氏。氏もまた疑獄事件に連座した受難者である。つねに健康がすぐれず薬餌にしたしむ病身である。

ある日のこと、氏の奥さんが面会にこられた。私も地元の事情をしりたくて、とくに願って同席が許可された。以下は私が聞いたこと。

（注・碧水のリンズとカフェランジアはごく近い）

「カ市には名和某を隊長とする特攻隊が組織されていた。はじめは畑元帥の云々と自称する松崎某が青年達を煽動し、カ市にかぎらず各地の敗戦派を倒すため部署をきめ、一斉に蜂起する計画だったらしい。カ市では楠木某を即死させ、今井某に瀕死の重傷をおわせた。またリンス区域のアリアンサでは堀内某を殺害した。だが、広範囲の蜂起のの計画は未然に発覚し、カ市リ市に大検挙がはじまった。現在は警察に後藤某以下三十二名が投獄され、リンス警察の留置所には十二名が入っている。」

奥さんの報告を聞いて私は慄然とした。このように、毎日毎日、敗戦派どもが官憲と協力して硬派の家宅捜査を嚴重にしている。彼らは腰に拳銃をぶらさげ、じつに物々しいでたちだという。家宅捜査された家は落花狼藉のありさまで、物品の紛失も珍しくない。尾崎宅など二度にわたって搜索されたという。彼ら逆賊共は日本語で書いたものなど、のこらず燃してしまったと。

今井某は歯科医で、患者をよそおった特攻隊に撃たれたが、病院で今田医師が担当して手当てをうけている。捕まった特攻隊はちかく裁判にまわされるという。

いかに敗戦派が跋扈したとしても、非合法の殺人は穏やかでない。当局も治安を維持するためには、どんどん検挙するであろう。それは敗戦派の術中に嵌まることになる。止むに止まれぬ気持ちで決起した特攻隊であるが、志をとげずに検挙されるのはまことに遺憾なことだ。しかも背後に何者かがいて煽動しているとすれば、由々しきことで、疑獄はさらに複雑になる。

尾崎氏の奥さんとは、このような話をきいて、少時間でお別れした。

日ならずして私の支部の立山氏が、大畑のおばさんと共に慰問に来島した。地元の状況を聞いた。

「現在リンス警察署に、アリアンサ産組理事の堀内某を射殺した桜井、土屋の二青年と、その関係者十二名を投獄している。主としてゴヤンベール方面の人たちで、リンスの人はいない。特攻隊はカフエランジア方面から侵入したのである。堀内は殺すほどの人物ではなかった。リンスの支部の結束は固いので安心してほしい。」

私は「将来、この疑獄のことを書くつもりだから、その事件のことも詳細に調べてくれ」とたのんだ。

立山氏は「きようエンセアード海岸にもどらないと、二日空費することになる」という。私は日頃の細工物のペン軸などをわたし、リンスの同志へのお土産にもらった。田中、大畑両氏は家族からの手紙もうけとった。名残惜しいが再会を約して、面会をおえた。

私も妻と娘からの手紙をうけとった。

手紙によると、やはり地元ではこのような事件を繰り返さないよう自戒しているようである。家郷をはなれてすでに八カ月。なにかと不便であろうと、少額だが金も同封してある。娘は「どんなに苦しくても頑張り抜きます。お父さんも頑張ってください。宮原の病気を心配しています。お父さん、お願いします」と書いてある。読むうちに目頭が熱くなった。わが娘ながら健気なものである。宮原を養子にも

らって二十日とたたないうちに、あの事件だった。病身の身を私と共に島に流されて、気概がない小心な性質ゆえ、いまはいくらか精神異常をきたしている。話をすると、途方もないことを口走ったりする。まえよりずっと悪くなっている。家の事情などを話しても、まったく無表情である。可哀相だが、いまの私にはなにもできない。(碧水後注・彼は流島生活一年二カ月後に肺病になり、サン・ジョゼ・デ・カンポス刑務所病院に収容され、療養生活を送っていたが、昭和二十二年十一月十一日、病没した。私の出所後、地元同志たちが墓をリンスに移して立派な石碑をたててくれた)

島の生活 2

島にきてすでに三カ月以上がたった。規則などにも慣れてきわめて順調な生活をおくっている。それぞれの生産班は私心をはなれて、日本人の本領を発揮して仕事に精をだす。生産物もふえ、所長もそれを認めて、待遇もますます寛大になる。あまりに優遇されるので、厳粛な獄舎という感じがうすれてくる。各自が心中には憂悶をかかえていても、保身も大切である。半開放的な昨今は体にはきわめて良好である。

優遇の一つ二つの例。・お前たちのうち魚釣りに行きたいものは、日曜祭日にかぎるが、各部屋五名ずつ、午前と午後の二組にわかれて外出してよろしい。・日本式の食事が希望なら、炊事所の監督に申し出て、自由に煮炊きしてよろしい。・年配者で労役に服していないものは、出口の見張りに云えば、自由に外で散歩してよい、等。

これらのことは、規則をよくまもり、よく働く日本人の美質をみとめての優遇であることは明らかである。

ここでは若い囚人をつかつて漁をしている。祖国の砂浜でもよく見かける地引き網である。幼稚な漁法であるが、外部から漁をするものがないから、良く捕れる。島の住民は囚人もくわえて四百人ほどだが、そのすべてに行き渡るほど、たくさんの漁獲がある。しばしば網に入りすぎて砂浜に打ち捨てるので、ウルブ（秃鷹の一種）の餌になる。

週に一度、牛二頭を屠殺するので、囚人にも肉がでる。放牧地は対岸にある。ときには豚肉のこともある。大所帯なので消費する食料も大量だ。

われわれを相手にする商店も開店した。無線系の副業である。すこし高いが、なんでももある。面会に来る人とわれわれの落とす金で、かなりの売り上げになるようだ。

・・・こうなると、彼らはわれらがなるべく長く島に在ることを望んでいるかもしれない。はやく出たいという我々の気持ちと反対で、世の中はとにかくこんな矛盾がある。

最近野菜もあらゆる種類が豊富にできて、職員の家庭へも、囚人の炊事場へも、手押し車をつかつて配達するようになった。バナナ園なども手入れが行き届いて、見違えるほど立派なバナナがとれるようになった。ほかの生産物もすべておなじである。職員の家庭に配達に行くと、

「つぎはアレを持ってきてちょうだい。コレがほしい」
などと注文がある。市中の野菜店とおなじである。

じつに短期間で、農作物にこのような改善があったことは所員たちも驚いている。それに、他の囚人たちも捨て鉢に生

きていたが、最近では、そんな日本人の態度にいくらか感化されつつある。

慰問に来島される同志の方々も、心配して来たが、おもいのほか自由で、健康そうに屈託のない様子をみて、愁眉をひらいて帰っていく。その反面、社会的地位のある人も資産のある人も、皆おなじように働くのである。ただ、残念ながら愚痴と不平に日を送る少数の人たちがいることも事実である。いつもながら、困ったことだが、面と向かってそれを指摘する人はいない。青年たちは黙々と協力し、暇あるごとに集まって精神と肉体の鍛練に励んでいる。

われわれの期待する世界の新秩序が道義を根本とするならば、日本精神こそ世界の指導原理であらねばならない。愛国行進曲の一節に「世界の人をみちびきて、正しき平和を打ち立てん」とある。これは決してデタラメにつくられた歌詞ではない。古き歴史の伝統をふまえた祖国日本の理想であり、理念である。そして、我ら民族の使命でもある。・・・この決意があれば、現在の境遇に屈することはないと、私は同志たちへも、皇道国体を唱えるのだ。

同志たちの思想と反目

前章で書いたように「釈放運動は着々と成果をあげている」という中内氏の通信の結果、間近な出獄を希求して、労役もなまけ、落ち着きもうしなった人々が一派をつくり、きわめて不愉快な雰囲気醸されるようになった。

こうしたある日のことである。渡真利君が中内氏からの第二回の、通信を披露した。

「島の皆様を一日も早く釈放できるよう猛烈な運動をいたしました。その結果、たいへん都合よく、一切の手続きを完了いたしました。まもなく釈放される手筈でしたが、悪辣な敗戦派の妨害に会い、惜しくも一步手前で頓挫いたしました。私どもはその対策に万全を期し、目下、活動中であります。ついでには島の皆様も、この釈放運動を全面的にご支持いただき、この嘆願書に全員がこぞってご署名いただくようお願いいたします」

大意は以上で、あとは便箋四枚に美辞麗句がつけらねてある。

この通信をめぐって、議論が紛々として、分かれた。曰く、「われらの無罪を訴え、すみやかな釈放をもとめている中内氏の厚意を無にしてはならない。このさい、考慮すべきでなく、全員が署名すべきである」

反対の意見は、

「これはたんなる署名云々の問題ではない。現在の状況では釈放運動が実を結ぶとはとうてい思えない。もし、功を奏するのなら、流島以前にも機会があった。テロがつづく外部の状況が緊迫しているのに、いま釈放してくれと頼んでも無駄であろう。ある時期がくるまで、決してわれわれを釈放しないであろう。したがって、その時期が来るのを待つべきである」

「われわれを放っておけないと運動してくれる気持ちはありますがたい。しかし、噂によれば、このことに便乗して金を集め

ている人物もいると聞く。慰問に来た家族の談話だから、けっして根拠のない流言とは思えない。したがって軽々に署名はできない」

このように、議論は二つにわかれた。私は後者の意見を主張した。

中内氏の出身のカンポスの木村老などのグループは言う。「われわれは流島の身ではあるが、裁判で判決がくだされて罪状が決定した訳ではない。だからわれわれが現在の境遇に甘んじていれば、敗戦派どもの工作で、どのような罪状がかぶせられるか分からないではないか。事をあきらかにして、無罪を主張する運動がなぜいけないのだ」

「それは娑婆にいてこそその議論である。われわれはすでに囚われの身である。われわれが正義であることは天地が証明する。敗戦派と思想戦をたたかうことは宿命である。だが、われわれに正義があり、背後に祖国があるかぎり、われわれはかならず勝利する。だから、このことは、時期さえ待てば自ずから解決する」

以上がわれわれ一派の論旨である。

たがいに譲らず、ついには感情まで激した議論になる。一蓮托生の同志として、憂慮すべき事態になった。

しかし、娑婆ではツツパンの新田、本田の襲撃事件、ビリグイ付近における特攻隊が逆賊に殺される事件、カルホルニアにおける日本侮辱事件などがわれわれの耳に入ってくる。このように敗戦派がブラジル社会に跋扈する状態では、今すぐの釈放運動は見込みなく、銃後の負担を増すばかりである。それに、銃後でわれわれを出す運動が盛んになれば、反

作用の「出さない」運動もおきるであろう。

・・・こうして、われわれが相反する議論に寧日なき日々をおくっていたとき、釈放運動の議論をあざわらうかの現象がおきた。

第二回目の流島者来る

昭和二十一年十月十七日午前五時、かねてデテンソンに収監中の吉迫紋吾ほか六十三名が二回目の流島者として到着した。

ほとんど大半の人が州統領官舎の懇談会に出席して気炎を上げたその顔ぶれである。そのあげく、硬派として検束され島送りになった連中である。

(注・すでに記したように、懇談会の後テロが多発している。だから、懇談会に出席したために検束されたという碧水の意見はかならずしも正しくないだろう。なお「戦後十年史」(パウリスタ新聞社)によると、第二次国外追放処分を受けたのは七十六名とある。したがって、すべての処分者がアンシエッタ島に送られたのではないようだ。因みに同紙によると、第一回は八十名で、この碧水の記録の八十一名とほぼ合致する。なお、「戦後十年史」にはこの事件がかなり纏まって書かれているが、パウリスタ新聞は日本の敗戦を報道する敗戦派新聞として、勝ち組とは敵対関係にあった。そのため勝ち組からちよくせつ取材することは不可能で、とくに臣連の内部情報は伝聞によるものが多く、信頼性に疑問がある記事もある。しかし、警察の発表については、認識派の

若手グループが情報をあつめ翻訳したものを使っているの
で、ほぼ信頼できる）

サントス港からサントス丸に乗船したという。われわれの時とは雲泥の差である。早朝から混雑をきわめた。ひとまず六号室にはいったが、若干を先住の二号と四号にわりあてた。

旧友、知己、親子などの再会で悲喜こもごもの場面がくりひろげられた。われわれの部屋にはリンス支部の瀬戸老ほか八名が割り当てられた。みんな「憧れの島に来た」と大変なはしやぎようである。よほど島は呑気なところと思っているのだらうか。これも日本人ゆえの従順と働きぶりによって得た待遇である。それを勘違いすると、あとで失望ということになりかねない。

とにかく愉快的な連中で「デテンソンでは特別室をあてがわれた」と自慢。「演芸会など毎日催していた」「浪花節、講釈師、手踊りくらい、すべて心得ている」など、獄舎とはおもえない会話である。

一方、古参の者も、まけじと、手製のステツキや煙草盆など出して、見せびらかす。新入りは「これから俺たちも作る」という。かれらがそのような話をしている間にも、われわれは時間がきて、いつもどおり働きにでかけた。

一段落した或る晩、われわれの二号室で新入りたちが芸を披露する演芸会が催された。まず踊りだが、愛国行進曲踊りも佐渡おけさもなかなか上手である。浪花節も素人離れしている。第一、熱心なこと驚くしかない。われわれ先住者たちは恍惚として、一夜の歓楽をあげわった。久しぶりに娑婆に

帰ったようだ。

二回目の人たちも五日の休養期間がすぎると、みんな丸坊主になって、番号入りの服に着替える。それで、だれが新でだれが旧か、ちよつと見分けがつかなくなった。強いて言えば、色が白い、服が新しい、くらいの違いだ。

新しくマンジョカ班と籠づくりの班ができた。適材適所ではたらく先をみつける。あまつた人数は既成の班に組み込まれた。

ちようどその頃、瀬戸老のおばさんと大畑の島田君と同伴で来島される。

デテンソンに面会にいったがいないので、そのまま島に来たという。

聞いた情報を記す。

もつか敗戦どもは硬派狩りを猛烈にやっつけて、島流しの人たちをアマゾン方面に移動させて、いっそう苦境においこむ策を練っている、等々。彼らは自衛上、われわれを迫害する。そのために対立はいっそう激しくなる。今回の六十四名の出身地を分類すれば、バストス、ツツパン、ルセリア、マリリア、バウル、サンパウロ市および近郊、中央線、ジュキア線にいたるまでサンパウロ州一円を網羅している。敗戦派がいかに緻密な弾圧の手段を弄しているか分かる。

あたらしく人々が来たために、われわれの生活に異変が起きた。

島生活は呑気だという先入観があるため、まじめに働こう

としない。全部の人がそうだとは言わないが、大部分がそうである。所長や所員をバカにする者、監督に理屈をこねて困らせる者、驕慢な態度で放言する者などだ。先住にもすでにいた不平組と付和雷同して、生半可な政治論ばかりに熱中し、キチンと働く者を白眼視し、自然と内部が二つにわかれていく。彼らは銃後の厚情も当然のごとく思い、感謝の気持ちがない。

その結果として、所長や所員の感情を害し、監督もきびしくなる。われわれがせっかく努力して住みやすい環境をつくっていたのに、残念なことだ。

蛇足として祖国の精神総動員法がなぜ施行されたか述べる。楽をしたいのが人情ではあるが、国家はその経営と崇高な国是の施行のため、大政翼賛会をつうじて、その徹底をはかったのである。われわれは私心を滅してこれに奉仕せねばならない。

面会に来島される銃後の同志も、きゆうに増えた。世間の情報もたくさん伝わる。その情報も虚報も真実も噂もまじつて、混沌としている。

私の親しい友人にツツパンの青木寛次君がいる。聖市の獄舎から島までずっと一緒に、いまは野菜班でも一緒に。彼は八人の子福者で、夫の不在中、奥さんが子供をかかえて農業を守っている。その奥さんが面会にこられた。千キロもの距離を、乳飲み子をかかえて海岸山脈の難路をくるのは並大抵の業ではない。健気な奥さんである。

奥さんの話だと、ツツパンにはユダヤの大物がいて、それ

が敗戦派を援助するから、硬派にはとくに弾圧がきびしい。じつに手がつけられないほど悪化している。日の丸事件いろいろの対立は言語に絶する。ツツパン出身の流島者が十六名もいることが、それを証明しているという。奥さんが夫を励まし、同志を慰撫される姿は日本女性の真の姿であろう。

また別の情報として、敗戦派の謀略で、吉川以下八十名を国外追放にするべく申請中という。おそらく巨額の金を差し出しているのだろう。これに対し、中内一派は猛烈な阻止運動をおこなっているという。

また別人の情報として、国外追放申請も、中内一派の反対運動も、ともに虚報であるという。

信ずべき筋からえた情報では、ブラジルは十一月三日に新憲法発布の予定だったが、半年のびて来年の五月三日までにはかならず新憲法が発布される。そのときが、思想犯、政治犯が釈放されるときである。だから中内一派の（現在の）釈放運動は効果がない、と。先般、リオ・デ・ジャネイロで凡ラテンアメリカ会議がトルーマン北米大統領のよびかけで開催されたとき、新憲法発布と同時に、各国に抑留されている政治犯を全員釈放すべきことが満場一致で可決された。それはリオのラジオが放送していたから確かだと。（注・すでに1946年9月18日に新憲法は発布されている。）

このほか「信ずべき情報」としてもたらされるものが、どのくらいあったか分からないくらいだ。

これらの情報を冷静に分析すると、各国とも新憲法発布の一手手前にいることはまちがいない。それこそ、われらの待ち望む、道義にもとづく政治のはじまりである。そうなれ

ば、正義であるわれわれにとって、釈放の時期など問題ではない。祖国の国是の遂行を信じるならば、とうふんと沈黙して静観すべきである。

こんな意見をいうと、

「そんなことはない。そんな悠長な話は釈放運動に反対する者の理屈である。祖国がわれわれのこのような瑣細な問題にまで干渉するとは思えない。そうこうするうちに、敗戦どもの罾にますます嵌まってしまうのがオチである。そうした事態をふせぐために中内氏たちは涙ぐましい努力を重ねているのではないか。自分たちが罪人ではないと釈明するのは当然で、それを反対するとは言語道断である。バカにつける薬はないとは、よく言ったものだ」

だが、敗戦どものように大金をつかえば、われわれをボロ船にのせて沈ませることもできるのである。それを、島に収容しているのは、背後に祖国があり、またブラジルでも多数の同志が見守っているから、彼らとても、今以上のことはできないのである。

熱烈なる銃後の同胞はわれわれを前線の兵士のようにあつかい、かぎりなき温情をよせられ、慰問に来島され、山ほどの慰問品を恵贈される。この崇高なる同胞愛を裏切ってはならぬと、私はかぎりなく憂鬱になるのである。来島者の十指に余る証言は、中内一派は釈放につかうと称して金を集め、それを飲酒やはなはだしくは女買いに使っているという。しかし、この悪評も出獄希望者たちは善意に解して「釈放運動のため、各自が家庭をはなれて聖市でくらすれば、その程度のことにはありがちである」という。

したがって面会も、釈放運動支持派と、そうでない組にわかれて、いたって不愉快になっている。われわれが主張することも悪意に解され、家郷をおなじにする者同志でさえ、口もきかぬ状態となる。予想もしなかった現実である。そして出獄希望書に署名する人は日々に増えていく。

かくのごとき、われわれの反目をふかく憂慮されたのか、吉川臣道連盟理事長殿は、臣道連盟解消宣言を発表された。その全文は省略するとして、その宣言の中に「釈放運動は木に拠って魚を求めるとき。時期のくるまで静観し、しかるのち適当なる処置に出るべきである。名称としての臣連は解消するが、精神の結合は依然として存続するものである。」等々である。はるかに老中佐の胸中を察して暗涙にむせぶ者は私ひとりではあるまい。

このときも宣言をめぐって議論は紛糾して尽きることがなかった。しかし、なんと抗弁しようと、臣連に関するかぎり、老中佐の言は至上命令である。

(注・臣連解散宣言は理事長の吉川順治と専務理事の根来良太郎の連署で、日付は昭和二十二年(1947)二月十一日となっている。内容は一言で云えば、「臣連という団体が存続することはブラジルにとっても好ましくない状況になってしまった」というに尽きる。臣連内部では、これを受け入れる派と、受け入れない派の二つにわかれた。したがって臣連はまだ存続したが、隆盛になることはなかった。なお、この頃から、祖国の戦闘面での勝利を単純に確信する者は少なくなり、おおくは「大東亜戦争によって、欧米の植民地化して

いたアジアの国々は開放された。したがって日本はその戦争目的を達成したのであり、祖国の戦勝をあくまで信じる事が、日本国民の道である」と主張する人がふえた。したがって、終戦直後の、いわゆる「勝ち組」ではなく、むしろ「信念派」とよばれる人々へと変質していった。なお、吉川はこの年の暮れに釈放される)

このような暗澹たる紛糾のなか、昭和二十一年十二月二十一日の年末の時期に、同志二十一名を第三回目の流島者として迎えた。(注・第三次流島者が到着して、二カ月後に解散宣言がだされたので、碧水の叙述は前後関係が、やや錯綜している。あるいは、正式な発表いぜんに、臣連関係者に知らされたか)

第三回目の流島者来る

多難だった年も、あますところ十日ほどになった。銃後にあつて連絡や処理に奔走していたとばかり聞いていた二十一名の人々を、島は迎えたのである。

(注・記録によると第二次国外追放処分の発表は十二月二日、第三次が十二月六日となっている。なお、国外追放の理由として、「外国人がブラジルを軽視し、ブラジル憲法を無視する行動にでた場合は好ましからぬ人物として、国外追放処分にできる。また日本の敗戦を認めようとせず、これを認めた者を抹殺すると主張する者たちである」という。ただし、大統領令によってだされた国外追放の処分と、アンシエッタ島に抑留されたことは、法的には関係がない。)

旧知のプライズ出身の今井正次郎氏もいる。この三回目の組には異端者もいて、同居をこぼむため、所長の許可を得て外人囚と同居させることになる。一人は密偵をはたらき、同志が宿舎にあつまっていることを密告した。もう一人は釈放に名を借りて詐欺をはたらいていた。(碧水後注・この二人は二カ月後に改心して、同室を許された)。今回の組のなかには、すでに慰問に来島された人も数人いる。しかし、敗戦派に協力した者も島に送るとは、なにか狼狽しているのだろうか。

新しく来た人たちは銃後の状況を熟知している。なかでも今井氏は釈放運動を、ジュンジャイ方面でしていたことがあつて、その後についても詳しい。

氏の言。「ジュンジャイ方面で、最初は四、五名で仮本部をおき、弁護士もたのんで釈放運動をしたが、弁護士は気休めみたいなきことはいうが、進展しない。吉川、根来両氏も釈放運動はとうぶんは効果がないという意見であり、お二人の考えも尊重して、合法的な手続きによる釈放運動は当面は効果がないとあきらめ、もっぱら銃後の連絡や差し入れに協力した。中内氏からも、氏の釈放運動に協力するよう頼まれたが、自分は断った」

われらの生活は囚人ではあるが、労働もさほど強制されず、慰問品も山ほどいただく。それを、「島の同志たちは血と涙の悲痛な日を送っている。一日も早く救出するのが、われわれの務めである」などといって費用をあつめるなど、もつてのほかの行為である。

今井氏らの話は全員に伝えられたが、釈放を夢見ている中

内派は耳を貸そうともしない。そのような中傷は聞きたくないという。

二十一名のうち二人をのぞいて十九名の人々は、休養期間ののち、それぞれの生産班にはいった。今井氏は私たちの野菜班になった。野菜づくりに関しては玄人で、私も教わることが多かった。

(注・碧水が触れていないのが残念だが、第三次国外追放処分者のリストに新屋敷砂雄の名がみえる。新屋敷は地方にあつてーカフエランジャー推進隊すなわち特攻隊の志望者を一本釣りしていた。そして総隊長となつて、集めた隊員を引率してサンパウロ市に来て、それぞれのアジトに振り分けている。渡真利がこの計画の立案者であり、蔭で指揮していたことは、さまざまな記録でも明らかにされていることだが、渡真利自身は取り調べでは徹底的に否認している。したがつて新屋敷は特攻隊にかんしてサンパウロ市の本部の情報部ー渡真利ーと地方における推進隊員募集についての連絡や段取りをもつとも良く知っていた人物のはずである。だが、彼が逮捕されたときは、すでにテロ事件は過去のものになりつつあつて、彼については記録が残っていない)

三回目の入島者たちが一段落した、ある晩、渡真利君が中内一派の釈放運動の経緯を説明した。朗読は泉青年。その概要を記す。

臣連法定代弁人のパウロ・ラウロ弁護士は吉川順治以下の臣連員は犯罪行為なきことを列記し、また臣連は秘密結社にあらず、日本精神の結合の団体であることを強調し、かかる

善良なる市民を一刻も早く釈放されたし、と訴えた。きわめて長文の感激的な、大統領あての嘆願書である。われらの言わんとすることが細大漏らさず記されている。朗読をききながら、あちこちで感激の囁きがおきる。

つづいて中内氏の書信が披露される。

「われわれは敗戦派の妨害にもかかわらず、万難を排して運動をつづけ、ついに皆様が釈放されることになりました。いよいよ年内に釈放されます。一部の人が残留されるかもしれませんが、それも正月中にはなんとかあります。島で開放されることになると思いますが、陸路をお帰りになる方は中央線のタウバテ駅に、海路の方はサントス港に係のものを派遣いたしますから、かならずお会いください。係と打ち合わせををしてから、聖市のクルゼイロ旅館に立ち寄ってください。なお、在島者のなかに四十二名の不逞分子がいるようですが、まことに遺憾なことと思います」

署名を拒んだものは「不逞分子」とある。「一部が残るかもしれない」とはわれわれを指しているのだろう。さもありなんと思う。しかし、せいぜい二日前に二十一名もの流島者がきた現状で、年内に釈放などありえないと思う。

しかも、十一月中旬から二月までは諸官庁は休暇になる。年末に大統領が嘆願書を読んで、サインをするなど、ちよつと考えられない。

まだある。中内氏の書信には、吉川氏の臣連解散宣言を不当として、いくつもの理由をあげ、連盟員の総意による解散以外は認めないと宣言し、吉川氏の猛省をうながしている。私にはじつに気に食わない文章だ。

釈放を首を長くして待っていた人々は喜んでゐるが、これはどうも虚報であり、また「敗戦派のじやまがはいった」などと言い訳をするのであろうという予感がする。

年内にも釈放されると聞いた人々は、もう上の空で、労役も手につかない。ただ、署名しなかった者たちが、いつもどおり黙々ととはたらく。釈放組はあちこちで二人三人と集まって、釈放の話に熱中し、われわれが働くのを白眼視する。・ああ、これが同志の姿なのか？ そのようなある日、棍棒事件が発生したのである。

悲惨 棍棒事件の顛末

事件の発端はナタール（クリスマス）の日だった。サンパウロに十日ほど出張していた所長がもどってきた。

その朝、事務所前の広場に全員が集合した。訓示があり、部屋ごとに整列した囚人のまえを所長がおとる。そのときは軍隊式に挙手の礼をする。検閲がおわって所長が「気を付け」の命令をくだす。そのとき六号室の室長がふざけた仕種で所長の真似をした。それを見た所長の顔が赤くなつたが、（今日はナタールなので我慢するが、あとで見ろ）と小声で言ったのを、ちかくにいた同志たちも聞いたという。

翌日、いつもどおりに仕事をして朝食の時間にもどつた。私は道具の番をしていて畑に残っていたが、事務員がきて、「道具はそのままでもいいから、すぐ戻れ」という。

奇異に感じながらもどると、各監房には普段と違って鍵がかけられている。なんとなく不安がおそそう。室内の皆は青い

顔をして押し黙っている。「どうしたのか？」と聞くと、「大変なことになった」という。

マンジョカ栽培班が仕事をしていると、九時ころ兵隊がきて「すぐ戻れ」といった。彼らは独房にいれられ、一人一人丸裸にしたたか殴ったという。独房は中庭の向こう側なので、その様子はこちらからみえる。独房の食事は二日に一食だという。

なんとか所長にお詫びして許してもらおうと、二名の陳情員がえらばれて所長に頼んだが、所長には平素の愛想の良さはなく、

「日本人を自由にしてあったが、私をバカにするのは許せない。こんごは今までのようにはしない」

と相手にしてくれなかった、と戻って報告する。

そこで論議は、

「平常通り食事をして仕事に向かう。なんといっても我らの生殺与奪の権限をもつ所長に楯突いても、事態を悪化させるばかりである」

という穏健派と、

「いや、ここは日本人らしく、所長が横暴ならば、こちらも覚悟をきめれば良いのだ」

という過激派にわかれて議論をしているうちに、ついに食事の時間は過ぎてしまった。こういうところに私が戻ってきたのだった。

やがて就労のラッパが鳴った。しかし、依然として扉には錠がかかっている。看守が開けにくるであろうかと待機しているうちに、所長以下次席の中尉と、七名の看守が手に手に

棍棒を持って二号室に殺到した。飯時にも出てこず、日本人が反抗していると早合点したのにちがいない。たちまちのうちに、怒声、罵声、悲鳴の乱闘が壁ひとへの隣からきこえる。やがて二号室の者たちが中庭に追い出された。銘記せよ、この屈辱を。後頭部から血を流しシャツを染めている者、卒倒する者、うずくまる者。この光景を描写する、いかなる形容詞も私は持ち合わせていない。

つぎはわれらの部屋である。室内に殺気がみなぎった。しかし、鍵をはずすまえに所長が佐藤青年を呼んだ。

所長のいうには「となりは反抗したから殴ったのである。この部屋はおとなしく就労すれば、けっして殴ったりしない」と。

だが、所長の言葉はウソであろう。隣室が反抗したとはおもえない。同志が必死に闘ったので、怖じ気づいたのである。

しかしながら武器もないわれわれが反抗しても愚かである。われわれはおとなしく部屋のまえに整列した。二号室の負傷者を病院に運ぶらしい。親友の谷田、河島両氏はとくにひどい怪我らしい。だが、声をかけることもできない。

かくしてわれわれは粛々として仕事にむかった。今日は着剣の兵士がものものしい警戒である。仕事場には鍬などの道具があるから反抗を警戒している。

飯もくわずに黙々とほたらく同志たちの胸中、目と目で話し合う切なさ、ちかく出獄と浮かれていた人たちも、一転して目の前が暗くなったのである。

やがて、私の日課である炊事場と官舎への野菜の配達に、

手押し車でむかった。

ああ、ここにも屈辱の場面が展開していた。脚のよわい老人、病室にいたもの、労働を免除されている室長ら、およそ十名ほどが四百メートルほどの距離をレンガを運ばされている。四、五枚のレンガを重そうにはこぶ横には看守が棍棒で「早く歩け」とつつく。聞くところの、島独特の「強制労働」である。さながら鬼畜におわれる地獄絵巻をみる思いがする。涙なくしては直視できようか。私は目をおおって、その場をすぎた。

受難の試練はまだつつく。部屋にもどれば、そのつど鍵がかけられる。ほかの部屋の同志との連絡も禁じられる。夕食も、各部屋ごとにかけて取りにいかせる。精神の屈辱、肉体の疲労、だれか悲憤の涙をしぼらない者がいようか。

わたしたちの部屋では「よほど理不尽な暴力でないかぎり、反抗はしない、挑発されても相手にならぬよう慎むこと」・若干の過激な意見の人もいたが、そのような申し合わせをした。

その夜、看守が室長に通達するには、「毎朝の日本の歌を所長が禁じた」という。[\(注・「愛国行進曲」のこと\)](#) 聖市の獄舎以来われわれの士気を鼓舞し続けてきた、そして愛唱しつづけてきた「見よ東海の空あけて」の悠遠な歌詞を歌えないのである。たまらない淋しさを感じる。

だが我々は寝台に身を横たえることができるが、裸で独房にいれられている同志はどうであろうか。なぜの懲罰か？ 彼らが怠慢であったというであろう。たしかに最近ほどの班も怠慢の仕放題ではあった。さらに病院に呻吟する同志をお

もえば、このような仕打ちをうけたことはかつて無かっただろう。あまりに屈辱の今日の出来事であり、きわめて悲惨な民族受難の一断面である。敗戦の冷血漢がたくらんだ正義の士の受難である。あれこれを想い、まんじりともせず夜は更けていった。

翌朝、われらの朝の行事も変更し、はるかに東方を遥拝し、同胞同志の安全を祈り、黙々と各持ち場にいった。病院に収容された同志も、重症の二人をのぞき、就労する。看守も数名が怪我をしたらしく、絆創膏を貼って、気の毒そうな顔をしてわれらに接した。

警戒は嚴重になり、老人組はきょうもレンガ運びに駆り出されている。われわれが朝食にかえると、部屋では看守が荷物をしらべていて、なかに入れない。われわれは広場で食事をする。まるで家主が追い出され、泥棒がゆうゆうと略奪するような光景である。

午後、仕事をおわってもどると、部屋は落花狼藉、貴重品と日本語の書類はすべて没収されている。(私のノートは持ち歩いていたので没収をまぬがれた)

日本人が暴動をおこす気配ありと打電したので、タウバテから二十数名の武装兵が到着した。さらにわれわれの気持ちは暗くなった。危ないところだった。よく侮辱に耐え自重してよかったと思う。

(注・これほどの懲罰を受けるからには、それなりの理由があったと推察されるが、碧水は触れていない)

冷静に今回の事件を考察するに、島の生活が寛大であると

きいた敗戦派がゼラルドをつうじて、所長が出張のおりに、虐待するように頼んだのであろう。もちろん、報酬をだしたことは想像できる。また室内に金属のものを持ち込めないのを大目にみていたことを逆手にとつて、こんどはすべてを没収したのであろう。しかし、われわれが泰然自若として挑発におうじないので、聖市の本署には「じゅうぶんに命令を履行した」と打電して、独房入りの同志たちも四日間で開放したのであろう。

つまり、所長は本心から我々を憎悪したのでないことがわかる。このときを境にして、所長も和らぎ、所内の空気も元に戻ったからである。

島で最初の正月を迎える

思えば昭和二十一年ほど在伯日本人にとって最悪の年はなかった。疑獄に連座した同志はもとより、その家族や縁者にいたるまで生涯忘れられない苦難を強いられたのである。

一昨年八月十五日の不可解な謎の終戦に端を発した邦人間の対立は、たんなる戦争の結果に対する勝敗論ではないのである。伯人間には日本の無条件降伏説が流布されたが、敵性国家のいうことだから無視できる。

しかし日本人でありながら祖国誹謗、軍部罵倒、国体否定などの不敬な言動をするものは断じて許せないのである。戦争の勝敗はいかであれ、国家が総力をあげた戦いであり、その理念はアジア民族の開放と世界平和である。しかして、それは実現しつつある現状をみれば、祖国の偉大さは歴然とし

ている。あまりに極端な敗戦論者が跋扈したために、破邪の剣をふるったのが特攻青年の出現であり、その余波をうけて日本人対立の防止のため、われらの島抑留となったと解している。

(注・この手記がまとめられたのは、碧水の出所後で、終戦からすでに四年ほどたっているのです、この部分の記述は、「日本が勝った」という単純なものではなく、いわゆる信念派の主張となっている)

さて、われらは島での最初の正月をむかえた。クリスマス後の棍棒事件によって、ちかく出所すると浮かれた話も消し飛んで、仏頂面で正月をむかえることになる。

カンポスの同志から餅と柿がとどいたので、かたちばかりのお雑煮をいただき正月をむかえた。一カ月の間は日曜日の外出禁止令がでている。

形ばかり、

「明けましておめでとうございます」

と挨拶する人もいるが、こんな正月のどこがおめでたいか。

「本年もあいかわらず」

というが、とんでもない。本年こそおおいに変わってこないと困る。こんな風に、めでたくもない正月がすぎた。

めでたくないのは正月ばかりでない。日常生活もきわめて窮屈になった。作業にでる以外は部屋に缶詰である。大きな声で歌うことも遠慮がちになり、みんな無口になった。炊事場が利用できないので、出来合いの配給食を食うしかない。「ああ、日本食がたべたい」とこぼす人もいる。いままでが

自由すぎたので、その反動で不便が身に沁みる。

事件が誇張して銃後に伝えられたのか、心配する手紙がぞくぞくと届く。われわれが大局を洞察して自重したことが、不幸中の幸いであった。そのことを伝えたので、外の人々も愁眉をひらいたようだ。

ほんらい所長はわれわれに親切であった。われわれに敵意のないことが分かるにつれて、最近はやほど緩和した態度になる。押収した品も戻されたが、まだ全部ではない。椰子細工などは戻らなかった。

野菜、マンジヨカ芋、バナナなど生産もあがり、警戒も日を追ってゆるやかになる。ただ「日本人は黙っているが、いざとなればブラジル人に負けるような弱虫ではない」などと不要なことを看守にいたりする者もいて、そのたびに一時的に警戒がきびしくなる。不要な挑発は禁物である。

所長をはじめ、看守や兵隊たちの目が好感の目となった。事件前の驕慢な気風、保養所くらいに考えていた人たちには、棍棒事件は頂門の一針ではあった。

(注・ふたたび棍棒事件の原因について。碧水はそれについてほとんど触れていない。囚人が制裁をうけるのは、反抗か不服従ではなからうか。推測のひとつの手がかりは、テロが起きて各地の警察で勝ち組が取り調べをうけたとき、「日本が勝った」と信じているので、当然、連合国側のブラジルは敗戦国という認識になる。それで「負けた国の官憲が、勝った国の国民になにを言うか」という言動で接して、怒った相手に殴られたという事例が多い。また、流言蜚語がとびかっ

たことも知られている。そして瑣細なことでも、日本の戦勝に結びつけた。そうすると「アンシエッタ島の扱いが寛大なのは、日本が勝っている証拠だ」という噂があった可能性がある。第一次、第二次のグループはその噂を信じて来島したかもしれない。第一次のグループは刑務所側と友好関係を保ち、第二次、第三次から急に関係がおかしくなったことや、碧水が書いている「怠け放題だったことは事実である」「や「驕慢な態度」という言葉の端から、そのようなことが事件の原因になったという推察もできるのではないか。なお、アンシエタ島にかぎらず孤島の刑務所は矯正の見込みのない悪質な犯罪者や重罪人を収容する施設である。勝ち組の人々は「日本が勝った」という誤謬の一点をのぞけば、ふつうの人々で、常習的犯罪者ではないから、刑務所が特別扱いしたのも頷けるのだが）

事件の後、一カ月の禁令を言い渡されたが、われわれとて不自由より自由なほうがよいから、真面目に働いた。そうした態度は異民族とてわからない筈はない。一カ月たたないうちに、もとの生活様式が、いつからとはなく復活した。

そして、この事あって以来、銃後の援助はますます熱烈になった。

パラナ方面より谷田氏をつうじて丁重な慰問袋がとどいた。心尽くしの沢山の品、心のこもった慰問文、感激にみちた激励の言葉。

プ・プルデンテ市を中心に二回目の慰問袋もとどいた。品物を押収されて不便だったわれわれも、元のように何不自由

なくなつた。銃後の同胞はたんに我々のみではなく、特攻隊で地方に投獄されている者への見舞い、遺された家族への見舞い、敗戦派とのたえまない戦い、二重にも三重にも苦労を背負っている。されど同胞よ、真の皇国の民なれば、国とともにあゆむ快心事でもある。獄中のわれわれも、いつの日か真相が暴かれるまで耐えなくてはならない。

ちようどその頃、千田氏ほか一名が裁判のため離島する。なんのための裁判か、いつさい不明である。(後記・やく一カ月後、二人はふたたび戻ってきた。裁判の結果は要領をえないという)

つづいて聖市の前田氏が釈放された。このような動きがあつたが、島で最初の紀元節をむかえた。おもてだった式は省略したが、はるかに皇国の繁栄を祈って、東方を遥拝した。

こんなとき、司直の人が視察に来島するという知らせがあつた。それで、棍棒事件らしい鳴りを潜めていた釈放派が俄然騒ぎだし、

「われわれは罪人ではないのだから、この機会をとらえて無実をうったえるべきだ」

と主張しはじめる。それにたいし

「特攻隊のメンバーもここにいます。こういう状態で罪人ではない、といつても無駄だ。時期をみたほうがよい」

という反論で喧々囂々となつた。聞けば、司直の来島は囚人の待遇や健康状態を調べるために毎年おこなわれるという。そんな人に直訴する必要はない、という意見。これらの論争はやむことがなく、なかには感情が激して泣く人もでて

くる。結局は分裂して、司直に会うときは個人的な会見で、全員の総意を代表するものではない、という制約をきめて、幕となった。

その人は来島し、われわれについてはなにも調べなかったが、夜、数名のものが会談を希望し、みじかい時間、許されたようである。司直は一泊して帰った。彼らがなにを訊ねたか、どういう返事があったか、私は知らないが、釈放派の者はそれについて何もいわないので、この議論もいつのまにか立ち消えになった。

現在の島の日本人を私なりに分類すると、自分たちは確固たる思想はもたないが、きわめて明るいのが青年層の全員。釈放運動は時期早とするわれわれの組が四十一名。あとは釈放派である。これが百六十六名の内訳だ。われわれ少数派にどってはきわめて不愉快な日々がつづく。

また、椰子細工が復活しはじめた。あの事件のあと没収されたが、モノをつくる楽しさ、退屈もしのげるなど、いろいろと利点がある。

所長も、あの事件のことなど、まったく忘れたように振る舞っているが、事件後こそまじめに働いたが、そろそろタガがゆるむ人も出始めた。心せねばならない。

陸軍記念日前後のある日のことだった。

(注・三月十日。日露戦争で奉天が陥落した勝利を記念して陸軍記念日とした)

カンポス・ド・ジョルドン出身の江口青年ら五名に、地元
の裁判所から召喚状が届いた。なんのための裁判か、本人た

ちはもとより、我々も一向にわからない。

彼らは嬉々として「一足先に帰りますが、蔭ながらみなさまのご健康を祈っております」と挨拶し、自分の服に着替え、刑事に連行されて島をはなれた。

例によって例のごとく、かれら六名の出発の論評がはじまる。曰く、

「中内一派の釈放運動が功を制してきたのだ。いちどに釈放すると敗戦派を刺激するので、すこしずつ釈放する方針ではないか」

「それならカンポス組全員を釈放すべきではないか。木村さんほか五名がまだ残っているのは、どういうことか」

「地方で引き取ってから、形式的に裁判をして釈放するのであろう」

などの意見がでる。

「いずれにせよ、動きがでてきた。全員の釈放も近い」などの楽観論もでる。

ところが十日ほどして、六名はすぐごと島に戻ってきた。

彼らの語るところによれば、二日ほど留置場にて過ごし、それから裁判所によびだされて判事に質問された。

「お前たちは臣道連盟の連盟員か。日本は勝ったか、負けたか。臣連はテロリストか否か。こんごも敗戦派と対立するのるか」などを聞かれ、自分たちは有利とおもう返事をした。

質問のあとで判事がいうには、

「二週間ほどもすれば審議がおわる。追って通達があるまで、島で待っているように」と。

我らには、召還の真意がつかめない。本人たちも、釈放の希望はさほど持っていない様子で、おおくを語らない。もろもろの勝手な理屈で楽観していた連中も失望したようだ。

しかし私にも経験がある。戦時中に戦況のニュースを書いて、同胞に配布していたとき、スパイの嫌疑をかけられて五十日も投獄され、二回の裁判をうけて釈放された。それなのにまた裁判所によびだされ、事実ではないという判決で無罪となったが、おおくの日時と費用を費やした。

伯国官憲のすべてとは言わないが、これらのことは日本人の卑劣な連中が、一部官憲を金であやつっている為である。

島の楽しい運動会

あの棍棒事件いらい、われわれがかつてのように明るくないので、憂鬱をふきとばし朗らかな雰囲気をつくるため、青年層の発案で運動会を催すことになった。

所長さえ許可してくれれば、というので、代表がでて申し出たところ、「大いにやれ」と賛成してくれた。そこで前代未聞、獄中大運動会を開催することになった。

運動会総裁には木村老が就任した。いろいろな係をきめ、準備をした。景品係もいて、銃後からの慰問の菓子、煙草その他、山ほどの景品があつまった。

いよいよ運動会の当日がきた。

所長と木村総裁が見物席の中心で、事務員、看守、外人の囚人すべてが見物席に陣取る。さらに、ここには楽隊の楽器もそろっていて、かねがね囚人たちによって音楽の練習がさ

れていたもので、その楽隊も特別参加で、晴の野外舞台を盛り上げた。

まず選手たちの入場・吹奏楽にあわせて約七十名の青年たちが、紅白にわかれ、愛国行進曲を高らかに歌いながら場内一周。それがすむと間宮翁の開会の辞があり、それから競技がはじまった。

陸上五百メートル、千メートル、二千メートルの競技から、つぎは一万メートルのリレーが紅白で争われ、つづいて棒高飛び、走り幅跳び、障害物競争などがおこなわれた。みんな、良い成績をだした。

つづいて、借り物競争、パン食い競争、煙草の火付け競争などがつづいた。われら、参加しない年配者はもちろん、所長以下観衆も声をはりあげて応援する。その白熱的歓声は島の天地もゆらぐばかりである。

競技の数がおおいので、昼食をはさんで午前と午後の部で運動会はおこなわれた。ブラジル人たちの特別参加もあり、最期は青年たちの紅白にわかれての勇壮な騎馬戦で最高にもりあがった。この騎馬戦は手に汗をにぎる見物で、両組とも作戦を練り、勇気と秘術をつくしての合戦であった。

こうして、島はじまっつていらいの大運動会は大盛況のうちを終了したのである。所長も終止ニコニコ顔で見物し、事務員や看守たちも、口々に褒めてくれた。終止なごやかな、そして愉快な一日であった。

私はこうした青年たちを称賛せずにはいられない。なかには若干不良な者もいるが、おおむねは地方の純真なる青年たちである。そして、今日のような競技も、地方にあったとき

は常に錬磨していたのである。

私のような年のものでも（注・碧水は五十歳くらい）、青年たちの意気と熱の感化をうけ、元気でいられる。そして、このような囚人の生活も、精神と肉体錬磨の道場と達観できるのである。在島中もいちども病院の世話にならず、労役も休日以外は休んだことがない。そして精神力は旺盛になったと思う。

島の生活　その三

それは風雨の激しい晩のことだった。

養子の宮原が部屋の鉄格子のまえにきて、「小椋さんとふたり、デテンソンの病院に移されることになった。明日の朝はやくの出発なので挨拶にきた」という。

かねて、ここの病院に入院していたが、しばらくぶりで顔をみると、憔悴して、見る影もなく痩せてしまった。

気弱な彼は、涙にむせんで、ほとんど言葉にもならない。私も鉄格子をはさんでの対面ではなにもできない。

「はやく元気になってくれ」と激励して別れた。（彼はその後、サン・ジョゼ・ドス・カンポスの病院に収容されたが、昭和二十二年十一月十一日に亡くなった。一人の肉親の看病もなく、さぞ淋しかっただろう。このとき鉄格子ごしに会ったのが、彼と最期の別れになった。）

宮原はほんとうに病気だったが、最近は気が緩んだか、た

いしたことがなくとも、病院に行ったり薬をもらったりする人が増えた。数日はのんびりできるが、そんな偽病人は数日たつと退屈して、また渋々と働きにでる。それで私が「病気を怠惰心の武器とするな。それは命をけずる鉋である」と即製の警句を言うと、ニセ病人たちは苦笑する。・・・こんなことも、島の生活の一断面ではある。

この頃、中内派の釈放運動の経過発表があつたということだが、反対派のわれわれには発表しない。信じない連中には聞かす必要がない、ということだろう。

しかし、漏れ聞いたところでは、次のようである。

「年内に皆様を釈放させる手筈でしたが、土壇場で、憎むべき敗戦派の邪魔がはいり、いままでの交渉が根底から覆されました。まことに残念です。どうぞお許しください。しかし、今度は万全の体制と計画で、すでに運動を再開しております。パウロ・ラウロ氏の努力で、すでに第一関門は通過し、釈放も時の問題になりました。どうぞご安心ください。とおからず出獄ど存じます」

・・・これが、「年内に釈放・・・云々。帰路はどこを通つて・・・」などと糠喜びさせたあげくの言い訳である。呆れたものだから中内派は何回でも「万全を期す」のであろう。

さらに我々の気に食わない文書も流通しているらしい。というのは、先日釈放された前岡氏の言として、

「二日もはやく同志を島から救ってください。労役は耐えられないほどの重労働で、終日、牛馬のごとく鞭打たれ、憩ふ時とてないのです。食事は日本人にあわない粗食であります。昼は人目もあり皆は辛抱していますが、夜ともなると肅

として枕を涙で濡らさない者はおりません。地獄のような生活を同志たちはしているのです。これが島の同志たちのほんとうの姿なのです」

私はこの通信をちよくせつ目にしたのではないが、これが事実とすれば、前岡は不屈きな男である。たしかに棍棒事件のあと数日はそのようなこともあったが、いつもの労働は時間もすくなく、むしろ快適である。食事も銃後の温情で、わたしは自分の家にいたときより贅沢をしているくらいだ。

もつと癩に障るのは「夜ともなれば涙で枕を濡らす」というくだりである。前岡氏は泣いたかどうかはわからないが、ほかの同志でそんな女々しい奴はおらんだ。われわれがメソメソと毎晩泣いているなどと銃後の人々が信じたら、まことに恥ずかしいかぎりだ。

われわれ正義派はこの文章の内容をきいて、切歯扼腕するのだが、喧嘩をするにも相手はいないのだ。

私はあんまり癩に障るから、渡真利君をつかまえて、「あんたが中内らに泣き言を並べるから、こんな手紙が流通するのだ」

と追求すれば、彼はケロリとして、「自分はそんなことを言ったことはない。おおかた前岡が中内らにそんな話をしたのだろう」と喧嘩にならない。

釈放運動に期待する人々はすでに二回も三回も裏切られたのに、みじんも不審をいだかず詳しい調査をするつもりもなく、ただ信じて、日々にわれわれとの溝を深めていく。まったく無駄な運動をおこしたものである。・・・これも銃後の人

の知らざる島の生活の一断面である。

日の丸のない天長節

天長の佳節をことほぐことは吾が民族最大の慶事である。しかし、久しい間、この国が敵性国家であったために遠慮して、天長節に日の丸を仰がぬ。それはわれわれには忍びがたい屈辱感をあたえる。

私はとくに、去年の今日を思い出す。オールデン・ポリチコに収容されている一同が、吉川老中佐の発案により君が代を高らかに歌った。お互いに顔もみえない合唱だったが、思いつくままに名をあげれば、岸本、木村、渡真利、笹田の妻、青木、小川などの諸氏である。

そして今、わたしは獄中で二回目の天長節をむかえた。この佳き日は幸いにも労役は公休となった。戦勝の栄冠を、人類の福祉と恒久平和のために、放棄したまえた大御心を神も佳したまうか。

式次として、まず室長が、学校の式でいえば校長格で、荘厳に皇居遥拝、勅語奉読、国歌斉唱と式をすすめた。たとえば日の丸を仰ぐことはできずとも、厳粛に聖寿を祝ったのである。今日ばかりは、同志たちの反目もなく、竹の園生の弥栄（いやさか）を祝ったのであった。

（注・天長節。四大節のひとつで、歴代天皇の誕生日であった。戦前の昭和は四月二十九日だった。ブラジルでは平日なので、なぜ公休なのかは不明。とくに頼んで休ませても

らったのだろうか?)

日本は道義の国である。新憲法の発布によって、それはあまねく世界中にひろがるだろう。米国といい国連というが、あちこちで綻びが見え隠れする。発展しますます隆盛になるのは日本だけである。このことだけを見ても、日本が戦争に勝ったことは証明される。

島での苦勞と樂しみ

すでに述べたように、われわれの滅私の働きによって、生産はひじょうな効果をあげた。これは日本が道義の国であり、われわれがそれに基づいて滅私の気持ちで働くからである。

しかし辛いこともある。就勞前に雨が降っていれば、その日は休みなのだが、働いていて途中で雨が降ってくることもある。肌までしみとおる雨に濡れても、勝手に帰ることは許されない。日除けの小屋に避難し、雨がやむのを待つ。雨がながびけば、各自が濡れた体に濡れた道具をかついで引き揚げるのだが、それはどこからみても最下級の労働者の姿だ。部屋にもどつて予備の囚人服にきかえてホツとするのだが、部屋には火の気がないので、しばらくは震えている。

雨期にはいると、このような濡れ鼠になることがしばしば起こる。当番が食事をもらいに行くときも、雨のときは濡れるし、それより、酷暑の日に行列するのはもつと辛い。

朝からの雨でノンビリ休養しているのに、午後から晴れた

りする。すると、臨時の仕事として薪担ぎに駆り出される。二キロメートルもある胸をつくような急坂をのぼり、担げるだけの分量を担いでもどる。ただし、一回だけだが、全員がかり出されるのでかなりの分量が運べる。

たいへんな坂なので足の弱いものはヘトヘトになる。こうした試練をわれわれが日本人らしく克服する精神力は偉大なものである。

私はあまりにも試練の面を強調しすぎたかもしれない。しかし、島にも愉快的時間もある。

その第一は、なんとといっても芸能大会の夕べである。

まず浪花節・柳屋金吾楼によく似た稲垣師の出演、それから沢井天城師の関東節の胸のすくような語り口(注・天城は映画弁士が本職だった)。それから虎造ばかりから、雲月ばかりまで、天下の名人大会の様相を呈する。(注・浪曲は戦前の日系社会ではさかんで、ブラジル製のレコードもでている)。われら聴衆は、あるときは笑い、あるときはシンミリと聞きほれる。

つづいて、神田伯山師の講談。それにつづいて自称「筑前琵琶の大家」の演奏、落語、剣舞、流行歌、踊り・・・とつづく。みんな「芸事ならなんでもござれ」の面々なので、笑いと拍手の連続である。とくに庄司氏の尺八は堂に入ったもので、りゅうりゅうと流れる音曲に全員が引き込まれる。

このような催しは、各部屋に演芸担当の演芸部長がいて、それぞれプログラムを組み、三つの部屋で持ち回りで開催するのである。無芸の私などは彼らの芸達者にただ驚くのみで

ある。

このような演芸大会は、雨で仕事がない日中とか、寂しい夜とかにしばしば開催される。もろもろの憂鬱をふきとばす妙薬である。

また、青年たちが円陣をつくって愛国歌や軍歌を高唱するのを聞くのも、心が躍る。きわめて勇壮な気持ちになる。このような明るい雰囲気をつくりだすのは、いつも青年たちである。

ところで、趣味といえは椰子細工である。道具もないのに、工夫して、なかなかの物ができる。去年末の事件で没収されたが、それにへこたれず再開した。ペン軸、ステッキ、楊枝入れ、煙草盆、菓子入れ、筆立てなど多岐にわたり、来島する人々に記念として差し上げる。これがたいそう喜ばれる。なかには美術品とよべるほど丹念な仕上げのものもある。また、ありきたりの形ではなく、新しい意匠の新作もでてくる。みんな、自分の作品が自慢で、展覧会をひらく。

日曜と祭日には外出が許されるが、太公望たちの楽しみは磯釣りである。釣りに趣味のある人たちは嬉々として出かける。午前と午後、それぞれの部屋から五人ずつが出かけてよいことになっている。釣り場所は島の外洋に面した磯で、途中は断崖絶壁の、一步踏み外せば海中に転落するような箇所を通っていく。いちどなど、ツツパンの高城君が転落して百メートルほども沖にながされ、あやふく溺死するところを泳ぎの達者な看守が飛び込んで救助した。私も庄司さんに誘われてしばしば釣りにいったが、あとで考えるとゾツとするよ

うな処を、そのときは平気で通っていくのである。

奇岩が聳え、大洋がはてしなく広がり、眼下にくだける波は数十丈にも達する。まことに絶景である。ここはアンシエッタ島でもいちばん景色のよいところで、慰問に来島される方たちをもご案内するから銃後にもしられた行楽地である。

(注・このあたりで釣れる魚は、磯の底釣りならサルゴ(黒鯛)ガロツパ(ハタ)など。数十キログラムにたつするメーロ(クエ)などもいる。上物なら大小のアジ類である。船が着くほうの波裏の砂浜なら主にペスカーダ(ニベの類)で、いずれも高級魚である。釣果のことは碧水は記していないが、当時は不便なところで漁師もないし、かりにいたとしても島の周辺は立入禁止だから、よほど魚影が濃かっただろう。それは以前に碧水がかいた「囚人たちが曳く原始的な地引き網に四百人分以上の魚がとれて、余ったのは捨てる」という記述からもうかがわれる)

海の娯楽はまだある。それは砂浜に打ち上げられている様々の美しい貝殻の採取だ。あちこちにある美しい砂浜には、じつに多くの、珍しい貝殻が打ち上げられている。家郷の子供たちへのお土産にと、袋に何杯もあつめた人もいる。いたずらな心の煩悶さえ自制すれば、このような楽しみを味わうことができる。清浄な浜辺の空気を吸い、適度な労働にしたがっていれば健康には良い。

(注・労働時間は碧水がすでに記したように、コーヒーとパンのあと午前七時から就労し、十時半の朝食にもどる。午後は四時半まで働いた)

思うに、これからの新世紀は道義の世紀であるからして、このように滅私の生活をするには、日常の心構えとしても大切なことであろう。

時局の種々相

「光陰は矢のごとし」われら受難の流島生活も、はや一年を迎えようとしている。(注・碧水たち第一次のグループは昭和二十一年七月十三日に島にきた)

私は家庭をはなれて、もう一年と四カ月にもなる。とにかく息災である。

この刑務所の規定として、一年たった者には新品の囚人服そのたの備品が支給された。第二回、第三回の人はまだである。この点、第一回の八十名は先輩である。

この一年にかなりの人たちがサンパウロの警察本部に召還され、取り調べをうけ、また島にもどってきた。異口同音にいうのは、ここと比べたら警察の留置所ときたら、まるで地獄だと言う。留置所にいたときは「早く島にもどりたい」と皆が思ったそうだ。本部に行っても、たいていの人は裁判があつたわけでもなく、なんのためか分からないという。これは実に不可解な謎である。四百キロもある遠隔の地に囚人車を手配し、送り迎えを何故するのか？ われらの精神的団結を恐れた敗戦主義者どもが治安維持を口実にブラジルの官憲をうごかし、このようなことをするのである。このことを後日、すべての人に知らせるためにこの記録を書いている。

この頃に、留守本部をまもっている川端、朝川両氏から谷田様ほかとして通信があった。その後の経過の報告とある。「まじめに留守本部を守っていること。吉川、根来両氏と連絡をとり、その指示に従っていること。中内一派の中傷は事実無根のこと。老中佐の言葉、時を待て、の意を尊重している。また、島の皆様の中で反目があるのは嘆かわしいこと。現在は皆様に関するかぎり、暗中模索で先の予測はむずかしい。また特務機関の南郷氏、あるいは川崎の名前をつかうときもある氏に会って、特務関係の機密の情報を聞いた。その談話によれば、今回の疑獄について祖国が干渉するかもしれない。またそのほかのニュース」

特務機関というものをあまり信じない私は、その情報の内容をここには記さない。なぜなら、リンスにいるとき、特務機関の情報として、朝香の宮のご来伯、帝国軍艦のリオ停泊、陸戦隊の上陸などなど、さまざまな情報を聞いたが、邦人を糠喜びさせるだけで、なにも現実にはならなかったからである。

こういう情報を皆に知らせると、また有頂天になる人もいるので、この連絡はわれわれだけが読んで、他には見せなかった。

(注・特務機関の南郷大尉。本名、川崎三造。戦争末期ころから、特務機関の南郷大尉として、すこしずつ名前がでてる。特務機関の名を騙って協賛金などをだましとる詐欺師だが、編者の私見によれば、川崎は節度をわきまえた詐欺師で、大金をだまし取ったりはしなかったようである。臣連情報部理事の渡真利はブラジルに潜入しているという噂の特務

機関員を以前から探していた。しかし、渡真利が南郷大尉とようやく会えたのはかなり遅い時期で、パラナの谷田の紹介で、1946年、終戦の翌年の三月二十日だった。4・1のテロがはじまるわずか十日前である。自称南郷大尉は渡真利の熱烈な信用をうけ、以後、臣連からも毎月なにがしかの協賛金を受け取っていたようである。それで留守本部にもあらわれ、ときどきの代償として、特務情報を提供していたようである。なお、余談になるが、戦前の邦字紙に会社訪問の記事があり、そこに「帝国タクシー」の専務として川崎三造という人物が登場する。「スラツとした」などという描写から同一人物の可能性がたかい。可笑しいのは、そのとき記者のまえに川崎氏は女形の扮装をして現れたというのである。予約した訪問にわざわざ女の格好をして応対する会社専務はいないだろうから、推測するに、当時の日系社会でさかんだつた素人芝居の練習をしていたのではないか？ そうだとすると、川崎三造はもともと芝居っ気のある人物だったのかもしれない。碧水もチラツと「朝香の宮」と書いているが、当時の南郷大尉の収入は、特務機関として情報をながす代償として賛助金と、もう一つは、邦人の実情視察のため秘かにブラジルに来ておられる朝香の宮の生活を援助するという名目の賛助金だった。もちろん、そんな宮様はブラジルに来ていない。朝香の宮家は明治天皇のお孫さんにあたり、当主は、編者の記憶に間違いがなければ、当時はソニーに勤務されていたように記憶する。島の外でもいろいろな人物が動きまわっているという意味で、余談を記した)

銃後の情報は頻々ともたらされるが、じつに混沌としている。新世紀が誕生する過度期なのであるうか。現状はよほどの洞察力がなければ正確には論じられない。ここでも議論は紛糾し、なかには敗戦派が捏造した流言蜚語もまじっているだろう。

最近の情報として「サントス港に日本の使節がおいでになった」「サンパウロの某施設で、日本の軍部をまじえた使節団とブラジルの要人たちが会談した」・・・これらは、ある面会人がもたらせた情報である。

このような情報をながして銃後の同志たちを有頂天にさせて、さらに弾圧をくわえようとする敗戦派の陰謀かもしれないから、注意しなければならない。

別人がもたらした情報で、「日本政府からブラジル邦人に対して丁重なる慰問袋が数万個サントスに到着した。それを見た人が何人もいる。一個が破損して内容がみえたが、相当な額のしなものが豊富につめてあった」という。それを聞いて喜んだ人もいるが、こういう情報も私は軽々に信じない。

さらに別人の情報で、「現在、島流しにしている臣連員をさらに苦しめる目的で、アマゾンまたはマット・グロソ州に追放すべく猛運動がおこなわれている」と。敗戦どもはそんなことを画策しているかもしれないが、十二万の連盟員が背後に控えているので、そんなことは不可能である。あるいは、釈放運動の必要性を強調するために、味方から飛ばされたデマの可能性もある。

まだある。「最高裁判所において臣連員の裁判が開始され

た」と。これなどは当局がこの問題を放置しているわけではないという釈明かもしれない。

信ずべき情報だ、確報だと、たくさん情報がよせられるが、私はそれらをここに収録する必要をみとめない。一つ一つの話に一喜一憂しては、やがては固い信念もゆらぐこととは言うまでもない。

島の刑務所の寸描

在島のわれわれはきわめて順調なる生活をつづけている。最近はずすがに釈放の噂も少なくなり、各班は生産に精を出している。作業に慣れるにしたがって、生産物は旺盛になる。

所長が替わった。まえの所長は大尉だったが、あたらしい所長は文官である。あたらしい所長もわれわれに愛想がよい。

はじめは不似合いに感じた番号入りの囚人服も、慣れてしまつて不自然に感じなくなった。おなじ釜の飯をくう外人囚も、はじめは汚らしく感じていたが、最近はわれらとて日に焼け、相手にするのも平気になった。

ただし、ここは離れ島の刑務所で、われわれ以外は社会の食い詰め者の集団である。看守や事務員を手こずらす連中ばかりである。殺人、強盗、強姦、放火、さては並の泥棒にいたるまで、常習的な犯罪人の寄り集まりである。われわれも油断できない。まことに鮮やかな手並みで物を盗むのである。ここより下に落ちようがないせい、平気で盗む。

かれらのお互いの呼び名からしてカラビーナ（鉄砲）とかセツチマラ（トランク七個）とか、穏やかでない。正規には、みんな番号でよばれるのだが。出入りはあるが、だいたい百四十名くらいはいつもいる。

このほかに少年囚が十二歳から十八歳くらいまで、べつの監房にいる。これがまた、親泣かせの、じつに悪い連中ばかりである。かれらは地引き綱とか薪運びなどに使われている。看守が棒で叩いてヒイヒイ泣いて、独房にたたき込まれても、すぐケロリとして、また悪事をはたらく。とにかく凄いのがいる。血なまぐさい事件はしょっちゅう起きる。相手の心臓を刺して即死させたこともある。その原因は盗んだミルクの配分が気に食わないからだった。素っ裸になって棒切れを振り回し、事務所のまえに立ちはだかつて事務員に喧嘩を売る乱暴者もいる。かれらの日常を見ると、ふつうの人間社会とは縁遠い。

囚人同士の喧嘩はよくおきる。たいていの原因は男色からで、女に不自由している彼らは少年囚のとりあいでも掴み合う。われらの常識外である。

脱獄などもたびたびやるが、逃走方法が幼稚なので、すぐ捕まる。

・ある日の午後、六尺ちかい褐色の囚人が脱走した。看守が気づいたのはだいぶ時間がたってからである。大騒ぎとなり、兵隊、看守、事務員たち総出で、島の要所を探索するが、見つからない。

一方、その他の囚人たちは、労役にもださず、部屋に鍵をかけられて缶詰になった。われわれだけは自由にさせられて

いたが、そのかわり、外人囚のする仕事を、すべてやらされる。てんてこ舞いの忙しきで、いい迷惑である。

所長以下、全員が躍起となって徹夜で搜索するが見つからない。「射殺しても構わぬ」と命令が出る。

二日目もそうやって一日が暮れた。

ところが、この逃亡犯は搜索の裏をかいて、二日目の夜に売店横の道具置き場に侵入して、手斧、ホイセ（柄の長い、頑丈な鉈の一種）包丁などを盗み、さらに窓を破って売店から食料品をとって逃走したのである。搜索隊はその大胆さに啞然とした。まさに裏をかかれた格好になった。

丸三日、搜索隊は昼夜兼行でへトへトである。

しかし、ついに発見された。人跡未踏の谷底にひそんでいたが、水をもとめて姿をあらわしたところ、山頂の見張りに発見された。

その知らせがあつて一時間後に鉄砲に囲まれて犯人は姿をあらわした。ニヤニヤ笑つて、さらに動じる気配もない。すぐ裸にされて独房にいれられた。喜んだのは三日の禁足を解かれた囚人たちである。小鳥が籠から放たれたように、嬉々として部屋からでてくる。

・：こんな風に、私たちは未知の社会を覗き見るのである。破廉恥の彼らにも理屈はある。ブラジルでは偉い連中は悪いことをしているのに、監獄にはいかない。われわれだけが、物を盗んだと監獄にいれられる。・：まあ、理屈だが、こんなところでは悪いことばかり覚えて、かえって悪の養成所のような気がしてならない。このような、彼らとの接触の話はまだ多くあるが、記述を先にすすめることにする。

同志とわかれ、離島する

九月の初旬、私の支部（リンス）の立山氏が来島された。用件は、地元裁判所の判事の言として、島にいる四名、すなわち吉井、大畑、田中、宮原、ただし宮原はサン・ジョゼの療養所にいるのだが、を召還するするが、この機会に弁護士に依頼すれば釈放されるかもしれない、とのことだった。どうしたら良いかという立山氏の相談である。

私は答えた。

「大統領令で島の八十一名は国外追放だという。それなのに、いまさら地元で裁判でもあるまい。書類は八十一名がひとまとめになっている筈だ。一步譲っても、地方裁判所をへて釈放するにしても、それならば全員に召喚状がこないとおかしい。あるいは、出獄の時期がきたことを知った判事が地元の弁護士に儲けさせるつもりかもしれない。私は地元の同志にあまり迷惑をかけたくないから、もうしばらく静観してください」、と答えた。

田中、大畑両氏が立山氏とべつのところまで長時間話していたが、私には知るよしもない。同郷の士といえど、釈放問題について意見を異にしているので、会話もすくなく、淋しいことだ。

私は、このような裁判の話聞いても、あまり期待はしない。なぜなら、地元へ裁判に行つて、またもどってくる同志をなんども見ているからだ。

ところが、九月二十五日にサンパウロのガベネツチ署から

二名の刑事が私どもを連れにきた。流島の経緯を異にする瀬戸老をひとり残すことになる。老もさぞ淋しいことであろう。囚人服を脱ぎ捨て、保管してあった私服に着替えた。

最初から苦楽をともしにしてきた同志たちと別れるのが、こんなに辛いとは思わなかった。万感胸にせまり、ろくに挨拶もできない。黙って手を握るだけだ。

私たちとともに三名の伯人囚も同行するそうだ。

海は荒れている。

が、私たちは出発した。対岸のエンセアーダにようやく上陸するが、囚人護送車はぬかるみの土道を走行不能で到着していないことがわかり、また島へもどる。すでに取り片づけた寝台などをだしてもらい、仮泊した。

あけて、翌日はよい天気になった。こんどはゆっくりと皆と別れの挨拶をかわし、ふたたびカヌーに乗った。

エンセアーダは遠浅の砂浜で、五、六戸のちいさな漁村である。

一軒だけ雑貨店がある。われらが島に来てから、慰問の品を売ったり、泊めたり、カヌーで島まで送ったりで、そうとうな利益をえているという話だ。この店でひさしぶりで、娑婆の食事をした。たいへん旨かった。忘れられないことの一つである。

囚人護送車は悪路のため、ここから七キロメートルほど先で立ち往生しているとのこと、そこまで歩いていく。私どもはけっこう荷物があるが、伯人囚は着の身着のままなので、いくらか払う約束で荷物を担いでもらった。彼らも大喜

びで担いでくれたが、汗だくである（注・気候は春先だが、海岸地帯は暑い）。

ようやく、窓のない囚人車にのりこんだ。そしてウバツバ港についた。この警察署で一泊する。伯人囚は別の監房にはいったが、夜はさむいので、裸にひとしい格好の彼らは夜通しダンスをしていたようだった。まったく所持品もなく、無一文でも平気で旅する彼らは驚嘆に値する。

かつて、島からカンポスに召還され、また戻ってきた江口青年たちもこの監房に泊まったらしく、各自が鉛筆で壁に名前が書いてある。それを懐かしく眺めながら、いつのまにか私は眠った。

惨憺たる道中のこと

翌朝、午前九時にウバツバを出発。さほど走らぬうちに天をつく峨々たる海岸山脈に突き当たる。九十九曲がりの屈折した道はようやく車一台の幅である。険阻な断崖にそって車はまるで逆立ちしているがごとく、エンジンは湯煙をたてる。この道の危険なこと、言語に絶する。背筋を戦慄が走る。車の後部は板の腰掛けがあるだけで、なにも支えがない。不意打ちの激しい振動で、たえず腰を打ち、頭を打つ。全神経を集中し、腰掛けの板をしっかりと捕まえているのである。しかし、辛くも峠についた。蘇生するおもいでホツとした。一人ずつ外にだして小便をさせる。

このあたりにはあちこちに農家があるらしい。車はそのたびに停まって、運転手が鶏やアヒルなどを買い込んで、私た

ちの足元に投げ込む。かれらの自家用にしては買い込みすぎるので、小遣い稼ぎらしい。ここで安く買ってサンパウロで売るのである。それはいいとして、もともとむせるほどの温度にもってきて、投げ込まれた鳥たちの糞便の臭いが合体して、いやな臭いがする。道は平坦にはなったが、相変わらずのガタガタ道で、腰掛け板をにぎった手は離せない。

ところが、われわれの艱難辛苦は知らぬげに、前部の運転手たちはピングア(焼酎)をラツパ飲みして、冗談をいいながら笑い合っているのだ。運転は大丈夫かと気が気でない。おまけに、しこたま買い込んだ鳥たちはバタバタと埃をたてる。ああ、なんと最悪の道中だろう。

午後二時ころ、サンルイスとかの小奇麗な町で小憩する。生き返ったような気分だ。自弁でコーヒーとパンを買って食べる。

それからタウバテにむかって走る。ところが、運転手が鳥などを買うのに寄り道をすぎたせい、ガソリンがなくなって、裕福そうな農家にたちよってガソリンを補給した。そのころから道路もよくなり、揺れもすくなく、だいぶ楽になった。そして午後十時すぎ、中央線のの主要都市タウバテに到着した。

そこに待機していたもう一台の囚人車に分乗して、一路サンパウロを目指す。タウバテからはサンパウロリオ街道なので、道路は平坦である。しかし、夜だというのに熱気と臭気はますます酷く、さすがの伯人囚も無口になる。大畑さんは老体で、氣息奄々。田中さんも憔悴した様子、そして、車は走り続ける。サンパウロはまだまだ遠いのである。

夜明け前、午前五時半にようやくサンパウロに到着した。あちこちに寄って、同乗者のアヒルや鶏が捌けていく。それが終わって、ようやく午前六時半にガベネツチ署に到着した。そしてわれわれは看守に引き渡された。われわれは、憔悴して、もう虫の息だ。看守室に所持品全部をあずけ、獄舎に放り込まれた。

かつて此処に入ったことのある同志たちから「地獄の監房」と聞いていたが、まことにその名に恥じない処だと、あらためて知った。じつに酷い。二メートル半ほどの空間に十人も押し込まれている。足をのばして寝ることもできない。窮屈である。そのうえ、便所と同居している。水はない。飲むみたいといちいち看守に頼まなければならぬ。不潔で、まるで豚小屋だ。「豚箱入り」とは言い当てたものだと、妙に感心したりする。

それに、ここは地下であろうか。電灯の明かりだけで、時計もあずけたので夜なのか昼なのかも分からない。

(注・碧水はガベネツチ署と記しているが、ガビネツチとは署長室、あるいは転じて留置所のこと、特定の署のことではない。六十年以上まえのことなのでハッキリしないが、おそらく、いまの地下鉄サン・ベント駅からほど遠からぬブリガデイロ・トビアス通りにあったデパルタメント・デ・インベストイガソン通称D Iデーイーとよばれる未決用の施設だろう。現在はDEICである)

食事もおよそ人間の食べ物ではない。頑丈な金属の食器に盛ってくれる。サジは凶器になるから提供されず、

手づかみで食べる。空腹ではあるが、さらに食べる気がしない。

上層、中層、下層、三段の監房がいくつあるかしれない。そして多数の未決が出たり入ったりする。

飲まず食わず、ただ膝をかかえて夢遊病者のごとく時間をすごしたわれわれ三人は、半死半生の態で、時間をすごした。

たぶん、三日目くらいだと思う。われわれは呼び出された。これからリンスに護送するのだという。歩くとフラフラして、目がくらみそうだった。看守室で所持品をうけとると、武装した兵隊が六人もわれわれを待っていた。それを見た瞬間、「とても釈放ではない」と直感した。しかし、一年半ぶりで家郷の人々に会えると思うと、元気が出た。あとの二人もおなじである。

明るい太陽の光をあびて目がショボショボする。ソロカバナ線の駅についてバウル行きの列車に乗り込んだ。はじめて蘇生の思いがする。まことに、あそこは地獄だった。一年半ぶりに人間社会のなかにおいて、何もかも新鮮で珍しく感じる。列車の窓から、なにとはなく物を買ってみる。開放された気分がする。兵隊たちもべつの席にいて、監視もそれほど嚴重ではない。ビールを買って、かれらに渡すと大喜びで「自由にしろ」と親切なものである。

やがてソロカバナ線との乗換駅のボツカツに着いた。ここはかなり長い時間、停車する。われわれの列車より十分ほど遅れて、本線の列車が到着した。むこうの窓をふと見れば、

不思議にも、島にいるはずの広島、梅木その他の諸氏が嬉々として談笑している姿がみえた。

「オーイ」と声をかけて、「なぜ此処にいるのか？」と訊ねると、曰く、

「吉井さんたちが出立してすぐに、指令がきて、六十三名と第三回の二十三名が現地釈放になった。急のことで大混乱だったけど、とにかくサンパウロに出て用事をすませ、こうやって今、家に戻るところです」という。

そうすると、吉川順治以下、第一回の組だけが残っていることになる。私たち三人も第一回の組だから、こうやって兵隊の護衛がつくのも当然なのだと分かった。

われわれの釈放はまだ望みがないとしても、なんらかの転換期に差しかかったことが臆げに感じられた。それにしても、一人淋しく残ったと思つて案じていた瀬戸さんが、すでに家に帰つたと聞いて、肩の荷がおりた。

一方、同行の大畑、田中両氏はリンスに着けば釈放と思ひ込んでいたので、私の見解を話したら、とたんが機嫌がわるくなつた。しかし、なにか期するところがあるのか、すぐ朗らかになつた。

護衛の兵隊の食費や雑費もわれわれが負担してくれと言う。断れば自由がなくなるので、そのとおりにする。罪人が監視人の面倒をみるなど、なんだか逆である。

この駅から旧知の井上久吾氏が乗ってきた。元臣連の区班長である。われわれ三人も、感慨無量で、手をにぎつたまま口もきけず、ただ涙を流すばかりである。

帰心矢のごとしだが、われわれの心を知らぬげに、汽車は

ノロノロと進む。(注・このあたり、起伏のおおい土地の等高線にそって、曲がりくねりながら線路がつくられている)

ようやく午後七時ころバウル駅についた。

乗り換えのノロエステ線の発車まで三時間ほどある。夕食をするべく兵隊たちもつれて沢田旅館にいった。私は部屋をかりて、島いらい着たきりの汗くさい服を洗い、着替えてサツパリする。

田中さんは自宅に電話し、明朝五時に着くことを知らせた。

食事をしているとき、食堂にいあわせた二、三の人たちが、われらの釈放を祝して日本酒などをとりよせて祝つてくださる。ただ、兵隊の護衛付きでは、リンスで拘留されるに決まっている。聞くところによれば地元では敗戦どもの跋扈はまだ続いているとのことだ。決して樂觀はすまい。だが、島の大半を釈放したとはどういうことだろう？ 一筋の希望はある。希望と悲観がまじりあつた我らをのせた汽車は午前五時に懐かしいリンスに到着した。

電話で知った家族たちが出迎えていた。じつに一年半ぶりである。私のつたない筆では形容できない情景が駅頭で繰り広げられた。迎える者も迎えられる者も、ただ、ただ涙、涙であつた。情けに国境はない。兵隊たちも、なにもいわず、黙認している。

私の家族も家内と娘が無事な顔をみせてくれる。ただ、ここに宮原がいないのが、なんとしても娘に申し訳ない。新婚二十日ほどで夫をもぎとられ、いまは生死も定かでないの

だ。娘はなにも言わないが、彼女の心中を察して、思わず泣いた。

島から抱えてきた椰子の細工物を妻にわたした。やがて兵隊が我々をうながした。

リンス警察署に到着すると、形式通り、われわれを引き渡した。彼らは今日は休養して、明日、サンパウロに戻るという。「達者で暮らせ」と握手して別れた。

ここの看守はすでに顔見知りなので、なにかと親切にしてくれる。そのまま留置所にいれられた。なかに入っている者たちも、地元の人間なので知っている者もいた。

終戦になってから、すでになんどもブチ込まれたところなので、いわば古巣にもどったのである。家族たちは「やれ毛布だ」「やれ食事だ」と大忙しであった。

地元同志の受難を聞く。

(注・この項で碧水はリンスでおきた上塚第二植民地産業組合長、堀内藤次氏射殺事件の顛末をのべている。事件がおきたのは1946年(昭和二十一年)七月十八日であるが、八月十五日の終戦一周年を迎えようとするこの時期、勝ち組の特攻隊による認識派へのテロがもつとも熾烈だった時期であった。いくつかの襲撃事件を列挙すれば、七月十日ブラウーナで襲撃、応射にあつて犯人逃走。同日ビラリツキで二人が射殺された。十一日ベラビスタで入浴中、二名の青年に射殺される。同時刻、ビラリツキで三名重症、一名死亡。十

二日は二件の襲撃が発生、一件は未遂、一件は重症。あと十七日、三件、十八日一件、二十三日二件と立て続けにサンパウロ州中央部の各地の日系社会農村部で襲撃事件が起きている。さらに、七月二十日にはオスワルド・クルーズ市では勝ち組と市民との争いから三日にわたって全市が騒乱状態となり、軍隊が出動してようやく収まった。リンスの堀内事件はこのような日々の最中で、勝ち組も警察もほぼ狂乱状態であった。警察の取り調べについての碧水の聞き取りによる叙述がどの程度客観的なのかは判断できないが、当時の警察と勝ち組の切迫した狂気にもちかい様子は窺うことはできる。なお、この項の碧水の叙述はいろいろな人から聞いた話がやや錯綜しているので、いくらか短く整理してある。

かねて在島中から聞いていた地元の受難者とも、ゆつくり語ることができた。いま此処に收容されているのは、カフェランジアから潜入して堀内某を射殺した犯人として、桜井二郎、土屋栄吉の二青年。それと関連があるとの嫌疑で収監されている地元のリンスの、河村敬喜、江藤長雄、中曽根稔、中曽根万吉の四名である。

事件はリンス管内、第二上塚植民地のアリアンサ産業組合長堀内藤次が、七月十八日、自宅から八百メートルほどの路上で死体となっているのを発見された。組合員の具志堅某が自動車を通って死体を発見した。家族は色をうしなつて駆けつけた。長男の寿はすぐに組合にいき、居合わせた専務の吉村にピストルを突きつけて「バストスに行かず、なぜ、ここにいる！」と叫んだ。というのも、堀内と吉村は一緒にバス

トスへ行くことになっていたからである。吉村は「君の父をゴヤンベで待ち合わせたが来ないので、いま組合にもどってきたところだ。すこしは落ち着いたらどうだ」と答えた。殺気だっていた長男もそれで、やや落ち着いたようだ。

現場には付近の宮原、山本なども駆けつけたが、次男は狂気のようになって宮原たちにピストルをむけ、「近づくと撃つ」と叫んだ。宮原たちは勝ち組なので、犯人との見境もつかないのだらう。

急報に接して警察署長以下が来て、死体のいちおうの検分もおえ、ゼツツリーナ墓地に埋葬することになる。一方、署員総動員で非常線を張った。

堀内は前日にバストスに出張の予定で家をでたので、反抗は十七日午後一時ころと推定された。

十七日のそのころ、サンタ・テレーザ付近の住民の証言として、見慣れぬ日本人青年二人の人相服装などがわかった。その方面を重点的に捜査しているが、それらしい人間は発見されていない。

二十日、土曜日。仮埋葬した遺体を掘り起こし、裁判所の医者が司法解剖をする。組合の吉村理事、宮原理事、具志堅事務員、それに組合員の平が容疑者として留置された。とくに宮原理事は平素から堀内と仲がわるかったので、他の三人の面前で殴る蹴るの暴行がくわえられた。平と具志堅は釈放された。

二十一日。五名が連れてこられる。このうち武井の店に十六日の午後四時ころ見慣れない男がピンガ(焼酎)を買いにきて武井に断られたという情報があり、武井はそれを警察で

証言した。事情聴取が終わって武井は釈放され、吉村も釈放された。

二十二日。農田源行は刑事と共に角田宅をおとずれ、長谷川という人物が宿泊したことについて嚴重に調べる。また、この日の午後二時に三区の山本たち五名が拘引された。またサンパウロに行っていた宮原も帰ったところを拘引された。

二十三日、火曜日。山戸捨男たち四名は、夜、刑事と夜警に遭遇し、山戸は刑事にいきなり殴られた。老体の嘉村も刑事にさんざん殴られ、刑事は臣道連盟を悪罵した。なにも知らないブラジル人たちは農田が臣連を悪くいうので、それを真に受けたのであろう。

植民地で全区民が学校にあつまり、協議をした。敗戦派の小原がいうには、

「堀内さんを殺した犯人がわからないので、多数の人が容疑者として警察に連行され、なかには酷い目にあう人もいる。それらの人をはやく救い出したいが、よい手だてがない。それで農田さんに頼むしかないと思って話したところ、『もう、自分の力では釈放を頼めない事態になっている。気の毒だが、なにもできない』との返事だった。このうゑは植民地のわれわれ全員が力をあわせて犯人を探し出して、訴えることが急務ではないでしょうか。もう今は『勝った』『負けた』と争う次元ではありません。そのことは言わないことにして、犯人の手がかりになるような情報を私のところへ知らせてほしい」

これに対して、出席者からは反対も質問もなかった。敗戦

派はこんなときにも信念派を利用する。まことに奸智に長けたものだ。この日の午後五時ころ、牧本氏ら十一名が拘束された。

二十四日。早朝に農田が武井の店をおとずれ、「ピングを買おうとした見慣れない二人は一人は商人、もう一人は末富の親類で、ふたりとも末富の家に泊まったことがわかった。ふたりとも不審な者ではなかった」と言った。末富は農田の子分である。敗戦派は「農田さんは寝食を忘れて真犯人の探索に血眼になっている」と宣伝する。

・夜もふけてひと寝入りしたころ、シヤンタン・ブレーの耕地において真犯人が逮捕されたという。ウソか真か。
(注・この文章からすると、当時拘束されていた臣連会員の日記をもとに碧水が書いているようだ)

二十八日。シヤンテン・ブレーの山中に潜伏していた特攻隊員十一名が逮捕されたという噂だが、真偽は不明。現在、まだ未完成の獄舎に二十七名収容されている。不潔な場所である。

竹花、河村の妻たちに署長が面会を許す。竹花の妻はでてきた夫を一目見て、泣きだした。殴られたうえに食事も喉をとおらず、疲労困憊の姿だったからだ。しかし夫は「なにも心配することはない」と妻をいたわったという。堀内殺しの真犯人が捕まったというので、全員すぐ釈放かと思つたのに、農田一味の奸計でわれわれはまだ苦しんでいる。留守家族も二つにわかれて「こうなったからには農田に頼んで、なんとか釈放してもらいたい」と弱音を吐くものと、「たとえ餓死しても農田には頭をさげない」というものに分かれた。

八月四日。数日前のこと、収監されている者たちの家族は、山本、麓の兩人をよび、「吉村宅で集会があつたとき、自分たちが見張りをしたと、警察で証言したというのが事実か。吉村宅の集会で『敗戦派を殺す』という議論があつたという嫌疑で多くの同志が捕まっている」と詰問した。それにたいし麓は「絶対にそんな証言はしていない」と返事した。「署長のまえで、それを云えるか」「そんな証言はしていない。署長のまえでも、そう云える」という返事だつたという。

八月五日。忘れることのできない悲痛な出来事がおきた。麓若松君が覚悟の農薬自殺をとげた。家族によれば前夜より病気といつて寝室に一人で籠もっていたが、ついに今朝、農薬を飲んだらしい。原因はあきらかに、「警察で彼が証言をした云々」の流言を苦にしていたという。農田らが事実無根の噂を流したにちがいない。遺書はポケットに五通入つていたという。産組関係のものは没収され、妻あてのものは渡された。それによると「覚悟の自殺である。戦死とおもつて諦めてくれ。子供の養育をたのむ云々」とあつたという。

妻は死体にむかつて、「あなたは獄中にいる人たちに殺されたようなものですよ」と言った。これを聞いた同志たちは激昂して「何を言う。獄中の者たちは祖国愛、同胞愛にもえる人たちだ。殺したのは、こんな噂をながした敗戦派の連中だ」と反論したそうだ。麓は行年二十五歳だつた。

軟派の者がいうには、「警察で証言したことがないと明言しなければ叩き殺すぞ」と言われて、自殺に追い込まれたと。こんなのはみんなウソである。よくも、こんなウソを次から次へと捏造するものだ。

(注・この部分は誰かの日記をそのまま写しているので、日にちをおって長々と続くが、割愛する。農田にたいする過度の憎しみは、たぶん、碧水の加筆もあるだろう。八月十五日の終戦一周年を警察は警戒していたので、その日がすぎて落ち着くまで、リンスでも強硬な勝ち組は釈放されなかった。八月十五日前後には各市で州兵が警戒にあたり、市民も自警団を組織していた。そして、事実、ツツパンでは十一名の特攻隊が蜂起し、三名の犠牲者をだした。このときはツツパンでは警察が認識派を保護し、勝ち組を収監し、両者あわせて七百名以上にのぼった)

裁判の結果、判決を受ける

島にのこる同志がどうなったか、ここでは知るよしもない。わたしはリンスに召還されたが、いずれにしても、島のこる第一回の流島者とおなじ運命であることは明白だ。だから、長期戦の構えで、朝晩の食事もカフェーもニキロメートルも離れた家から運んでもらっていたのをやめて、警察で支給される食事にきりかえた。

そんなある日のこと。

「今日、おまえたちの裁判がひらかれる。服を着て待っている」という通達があった。

時間になり、兵隊に付き添われて裁判所にむかう。道には、懐かしい人々が目に涙をうかべて、見送ってくれる。一瞬の目配せと会釈に、熱いものがこみあげる。

裁判所の控室でわれわれが待っていると、まず私が呼び出

された。

法廷にはいった。やはり厳粛なものである。正面に判事殿、右側に検事殿、左側に書記。やや離れて官選弁護人がいずれも着席。そして裁判がはじまった。

検事は私の検挙当時押収した日本文字のパンフレットなどを調べながら、

「おまえは農田や水城は好きか？ 嫌いか？」と聞く。

「嫌いである」と答える。

「なぜか？」

「日本人でありながら、祖国の敗戦を宣伝し、日本人を惑わせ、しかも嘘をいって私たちを長いあいだ獄窓に入れて苦しませるような人間を、自分は日本人とは思わない」

「では、彼らはビッシヨ（獣）か？」

「そうです」

「お前は日本が戦争に勝ったというが、事實は負けているではないか」

「いや、負けてはいない。もし負けたなら、なぜブラジル政府はそれを公式に発表しなのだろう」

なにかクドクドと言われたが伯語を解しない私は自分の返事がどの程度つうじたか自信はない。おしまいに約十五分ほど質問されたが、よく意味がわからず他のことを考えていたとき、判事は満面朱をそそいで激昂した口調で、

「ヨシイ、ゴベルノ・マンダ・エンボーラ・ジャポン！」と言り返された。これは私にもはっきり分かった。日本へ追放する、と言ったのだ。「勝手にしろ」だ。周囲の事情から推察して、私はよほど悪印象を与えたらしい。

戦前はさして不便を感じなかったが、戦中戦後は伯語がわからず、困難に直面することがしばしばある。が、いまさら悔やんでも仕方がない。ただ、正義に頼るしかない。

これで私の審査はおわって、つづいて田中、大畑の順でよばれた。あとで聞くと、質問はほぼ私とおなじだが、終りの「マンダ・パラ・ジャポン」というのはなかったそうだ。

聖市の獄舎から島へ、そして今になっての裁判と・・なんのことやらサツパリ分らない。頭の悪い私は判断に苦しむだけの、奇怪な裁判である。

こうしてふたたび街頭にでると、同志たちがさきほどと同じように目送してくれる。

もどると看守が「近いうちに判決がくだる」と教えてくれた。

大畑、田中両氏の家族はちかいので、食事なども家から運んでくるが、私は別室になったので、彼らの日常のくわしいことは知らない。

十日、二十日とたつても判決の結果は知らされない。

ある日、家内が面会に来て、「あなたを出さない運動を誰かがしているらしい。田中さんと大畑さんの家族は弁護士を頼んでだしてもらおうと云いますが、今頃になってお金を捨てることもないでしょうと私は云いました。ですから、あなただけ残ることになるかもしれません。でも、家には弁護士を頼むお金がないので辛抱してください。お金のことで人様に迷惑をかけたくないのです」としみじみと言う。

それは私も同感である。「けっして人様に迷惑をかけるな」

と言う。

それから一月ほどした日、家内が目を泣きはらして来た。聞けば、かねてサン・ジョゼの病院で療養中であつた宮原が、十一月九日に死亡し、同地の共同墓地に埋葬されたという通知があつたという。そして、昨夜、このリンスの連盟の人たちが集まつて仮葬式をして経をあげ供養してくれた。

ああ、宮原はなんと幸せの薄い人生だったのか。近親の看護もうけず、囚人として死んで往つたとは。彼の帰りを待っていた娘。それに、男子をもたぬわれわれ夫婦の養子への期待。(碧水後注・私が釈放されて夫婦でサン・ジョゼに行き、墓の土を持ち帰つた。それをリンスの墓地にうつし、同志たちがりっぱな墓をつくってくれた。墓碑銘は吉川順治氏の揮毫である。宮原の霊よ、やすらかに眠ってくれ)

我らは獄中で二度目の正月を迎えた。家族が心を込めた正月料理を差し入れた。同室の特攻隊の二青年にも分け、わかり彼らは旺盛な食欲で喜んで食べてくれた。

それから幾日もむなしく待つたが、おそらく年の瀬や年頭で官庁の事務は停滞しているのであろう。ガベネツチでの苦しみ、兵隊による護送などを考えると、釈放はまだ夢だろう。しかし、今日は、明日はとそれを待っている人たちの心中を察すると、やるせない焦慮にかられる。

正月もおわりに近いある日、また裁判所へ呼び出された。判事と向かい合つて、私たちが座る。最初に証人として水城磯次がよびだされた。

判事が質問する。

「証人は臣道連盟をどう思うか」

「臣道連盟はただしいと思う」

「なぜ、吉井と仲が悪いのか」

「口論も争いもしたことはありません」

「田中は特攻隊の隊長という噂があるが、証人は知っているか」

「彼はけっして特攻隊長ではありません」

その他二三の質問があったが、すでに談合しているような感じをうけた。

次に農田源行がよばれた。質問することは水城とほぼ同じだった。最期に農田は懐から手紙を出して「彼はこうした手紙を我々に突きつけたのである」といった。判事はそれを引き出しにしまった。(碧水注・こういった手紙はすでにオールデン・ポリチコにも提出されている。終戦後、彼らがあまりにも日本国家に反逆するから、彼ら十二人ほどにあてて、ペンの続くかぎり思想戦を闘うことを、多少、激烈な文章で書いた)(注・「おまえたちに天誅が下る」などの文をふくむ脅迫状だった)

われらには発言をあたえず、それで終了した。

それから三日ほどして、裁判所の書記が鉄格子のむこうから覗いて、つぎのように告げた。

「吉井、田中、大畑の三名に懲役二年の判決がくだった。ただし、すでに獄にあった日数は加算される」

二年といえば来る三月十五日である。あと二カ月ほどだ。新しき希望を燃やしたのは言うまでもない。

私は祖国でもろもろの公判にたちあい傍聴した経験がある

が、先日の法廷はなんととしても厳肅なる裁きの庭という感じがしない。

ここは毎週水曜日と日曜が面会日なので、家族ともここをおきなく話すことができる。また、この手記もメモを参照しながら、この頃から書き始めたのだった。

カフエランジアの特攻隊について

現在の入獄者は堀内事件（注・リンス管内の堀内藤次が特攻隊に殺された事件）の関係者二名、犯人二人、われわれ三人、それに町の写真屋と、全部で八人である。写真屋は徴兵の手続きで不正をしたとかで逮捕されている。

犯人と関係者の三人はすでに二十一年の刑を宣告されている。犯人の一人は未成年とあって十六年の刑だった。迷惑なのは関係者とされる江藤長雄と中曽根稔の両名だ。おおかた偽証されたのであろう。この疑獄に、なんと受難者が多いことか。

わたしは犯人の桜井、土屋の二青年とほぼ五カ月半、起居を共にしたので、詳細に聞くことができた。彼らから聞いた話をここに書き留めるが、以下に述べるのは、カフエランジアにおける特攻隊形成の話で、ほかの地方の特攻隊を含んでいないことを、まず、記しておきたい。

カフエランジアにおける特攻隊とは隊長格に後藤竹千代、そして十三名の同志をもって血盟の誓いをなし、奮起したのに端を発する。その動機は臣連その他の日本精神をもつ者た

ちを弾圧する輩が跋扈する。正義の信念派がぞくぞく投獄される。この事態を阻止するには、悪の根源ともいべき人物を一人一殺で倒すことを誓った。私と同房の二青年もそれらのメンバーであった。

こうした考えが青年たちの血を沸かしていたとき、出現したのが松崎某という覆面の人物である。かれは畑元帥の甥とも称した。(注・松崎某＝松崎留定。朝川仁三郎の話によるとパラガスウ付近の出身で、戦中にハツカ、養蚕撲滅のために赤誠団―血盟団とも―をつくったという。渡真利成一の赤誠団との関係を編者は知らない)

もう一人は松崎との連絡にあたる阿久津某であり、二人は火に油をそそぐように、「諸君が立つのは今である！ 今こそ逆賊に天誅を加える好機である」と熱弁をふるった。

「自分は祖国とつねに連絡をとり、その指令を受けている。諸君がたとえ逮捕されても、来年の二月までには祖国の力にて解放される。諸君は国家的な重要な役割を果たすのであり、逆賊を倒すのは名誉ある愛国的行動である」

松崎は機密保持のため、数回にわたり、風のごとくあらわれ、風のごとく消えたという。

これを青年たちが「祖国の声」として聞いたのはまちがいない。

さらに阿久津なる人物が、松崎の言を裏付け、「はやく決行せよ！」うながす。そのために敗戦派打倒の声はますます高くなった。

「自重せよ」という老人もいたが、「この期におよんで、なにを弱音を吐くか。弱音を吐く者から、まず血祭りにあげ

よ！」と激昂する青年もあらわれた。

そのような経緯をたどって、カフェランジアの特攻隊はついに決起したのであるが、事前に密告されたか、あるいは探知されたか、ほんの少数を倒しただけで同志たちは一網打尽になった。

・・・以上ここまでが、桜井二郎君に聞いた話である。

かれらが目的の途中で挫折したことは、青年たちにとってまことに残念なことと思う。関係者の容疑で拘留された人数は四十六名にもものぼるが、特攻隊員の数は十三名である。関係者の容疑で拘留された者ほとんどはすでに釈放されたが、まだ獄窓に呻吟する者たちもいる。

この十三名のなかには、いまだ松崎や阿久津を盲信して、私の言葉を冷笑する者もいる。しかし、私は在島中、はるかこの壮挙を聞き、熱烈なる祖国愛に燃え、一身を顧みない青年たちに尊敬の念を禁じ得なかった。しかし、なかには名誉欲で行動した者もいるらしく、ほかの純真な青年たちを汚すのではないか。事を成就したら、その場で割腹するくらいの気概をもってこそ、真の特攻隊といえるのである。

おおくの青年たちは純真であり、そうすると、すこしの損害で大漁をした敗戦派の陰謀である。

(注・現代の読者には勝ち組による負け組へのテロ、いわゆる特攻隊についてほとんど知識がないと思うので、ごく簡単に整理しておく。

戦争中に養蚕やハツカが敵性産業として、それを襲撃することを煽動するグループがあった。渡真利成一の赤誠団など

が知られている。渡真利はマリリアの出身なので、その地方を中心に同志を募っていった。戦後、臣連が勝ち組の集団となったときも、その地方の支部の役員の多くは、戦中からのメンバーだった。つまり、本来の臣連は精神運動だったはずだが、地方組織の中核には戦中からの武闘派がいた。渡真利が終戦の年の九月に本部の情報部理事に就任すると、ただちに攻撃の対照を養蚕農家から敗戦派の巨頭たちに切り換えた。

ここで重要なのは、対立が激化したあげくに相手を抹殺しようとしたのではなく、渡真利たちは終戦によって単に「攻撃目標」を切り換えたにすぎない、という点である。

支部の武闘派も渡真利たちに同調して、負け組との敵対感情をさかんに煽った。こうして徐々に、臣連員か否かを問わず、とくに青年たちのあいだで敗戦派を襲撃するのが、日本人としての正義であるかの感情が高まっていった。

最初の四月一日のサンパウロでの組織的なテロはあきらかに臣連情報部が計画したものである。テロを実行するものになるべくなら臣連員でないものが望ましいとされた。臣連員の場合はあらかじめ脱会するのが取り決めだった。このテロがいわば導火線となって、燻っていた火が燃えだして各地でテロが発生したが、臣連の幹部は検挙されているので、4・1以後のテロは組織としての臣連とはほとんど関係がない。

刑期を終え、ふたたび監獄へ

われわれ三人の刑期もあとわずか一カ月ほどになったが、

看守がいうには、

「田中は二年がすめば釈放されるが、吉井と大畑は日本へ送還する、と署長が言っている」と。

そして遂にその日がきた。午後四時に田中のみが釈放された。私と大畑にはなんの沙汰もない。はなはだしく失望する。

翌日、家内が来て「リンスの刑期はおえたけど、まだ全部がすまないで近日中にサンパウロに送るそうです」という。なんたる不条理だ。

はたして三日目の夜、刑事が来て、「あすの午後四時の汽車でお前たちをサンパウロに護送する」という。さらに、「二等車は不潔だから一等車で行ったほうが良い。どうだ、おれたちの分の切符も買うか」と相談だ。

「官費じゃないのか」と反問すると、「二等で行きたければ、それでもよ良さ。しかし一等なら家族も連れていっていい」という。

以前るとき囚人扱いをされて往生したことがある。不合理なこととは思ったが、かれら二人分も払って一等車で行くことにした。(注・二等車は日本の二等車にあたる)

しかし、その晩、大畑老が急病になり、大騒ぎになった。看守が病院に担ぎ込んだところが、医者が診察して「どこも悪くない」という。また連れ戻された。

大畑老はけっして仮病ではない。恐怖や心痛による発作も、やはり一種の病気なのだ。島にいるときから、病院や薬でもともと体が弱い。いつ釈放になるかと、心を痛めての毎日にもってきて、またサンパウロの獄舎に逆戻りとなれば、

倒れるのも道理ではなからうか。

翌日、いよいよ出発する。私は家内が同行し、大畑老は叔母さんと敏美が行く。癪にさわるので、警備の刑事二人は雇い人くらいに思うことにする。彼らもおなじ箱に乗っているというだけで、なにも干渉せず、まったくわれわれの自由にさせる。面会といっても、なにかと慌ただしい会話しかしたことのない家内とも、ゆつくりとした気持ちで話をした。

つぎの駅のカフェランジアから名和氏の奥さんが乗車された。私の席の近くに来て、中内一派の釈放運動について語られる。

「中内さんは真剣に運動していますよ。世間で悪評するような人では、決してありません。現在は敗戦派の勢いがつよくなり、釈放運動は蛍の火のように衰えなものです。最近では島にいる人たちをアマゾンに移すなどと噂されています。あなたには中内さんを嫌って、反対されているようですが、何故ですか？ たとえ蛍の火のような運動でも、その火を消せば、皆さんの前途は風前の灯火のようなものではありませんか」

なかなか雄弁に中内一派の擁護論をとなえる。
私はいう。

「中内君を個人的に嫌っている、ということはありませんよ。しかし、すでに莫大な金を皆から集めていると聞きます。しかも、近日釈放という話はなんども中内君から島にくる。そのたびに内部で混乱し反目しあう。そのために、島の同志は不愉快な日々を送っているのです。私の考えでは、一応の運動をして不首尾なら、しばらく静観して様子をみたらどうで

しよう。いま話を聞くと、奥さんは敗戦派の事情にも通じているようですが、なにか敗戦派と関係があるのですか」と逆襲した。

「なにを云いますか。私は主人と息子二人も投獄されているのですよ。敗戦となんの関係もありません。私が言ったことは中内さんから聞いた話です」

と、中内をふかく信用している。中内もなかなかしたたかである。奥さんは自分の席にもどった。

列車がサンパウロのルス駅についたとき、名和の奥さんとは挨拶もせず別れた。

まだ早いので駅前の店で朝食を頼み、刑事たちをふくめた一行で食事をした。

食後、家族たちとはここで別れた。かれらは数日サンパウロに滞在してわれわれの落ち着く先を確かめてから帰ると言う。

もう何度も出たり入ったりした、あのイヤなDOPSの建物に着いた。送ってきた刑事たちと「おたがいに達者で」と握手をして別れた。

受け付けた看守ともすでに「顔なじみ」なので、「また世話になる」といって心付けをわたした。「荷物もそのまま持って、とにかく休め」と言われて、四号室に入れられた。「あんたたち、また何かやったのか」

と鍵をあけながら看守が聞く。われわれが島からリンスに送られたことなど知らないのだ。

四号室は、今頃は犯罪も少ないのか、上品なブラジル人が一人いただけだ。私たち二人が入っても三人だけで、ゆった

りしている。出発前に急病で倒れた大畑老も元気を回復している。わたしは夜汽車で一睡もしていないので、たちまち眠り込んだ。

何時間ねむったか、とにかく熟睡した。看守に起された。「あんたたちはデテンソン行きだ。いま迎えの車がきている。すぐ出なさい」

刑事たちと囚人車にのりこんで、すぐにデテンソン刑務所に着いた。

(注・すでに記したが、デテンソンとは拘留所である。容疑者は警察署にある留置所にいれられ、取り調べの後、裁判にかけられる場合は拘留所にうつされる。警察の制度は国によって時代によってちがうので、この頃は刑務所の機能もあつたのかもしれない)

事務室で持ち物一切をあずけ、囚人服にきかえ、毛布をもつて二階のブラジル人の囚人の部屋にいれられて一夜をあかした。

翌朝、ツツパンの特攻隊として特別室に収容されている人たちの尽力で、私たちふたりも、その部屋に入れられた。昨夜あずけた荷物も服も持って移動した。

・・・このようにして、ふたたび、あの思いで深きデテンソンの住人となったのである。

デテンソン刑務所の優雅な生活のこと

この部屋に移って、まずおどろいたことはラジオあり電熱器ありで、生活の諸設備一切が整っていることだ。まったく

監獄とは思えない。

ツツパン出身の早川君はじめ旧知の人もおおい。島から釈放されたと思っていた平岡氏もいる。病院にいるはずの尾崎氏など、総勢三十二名。別系統の人として翼賛会事件の日下部氏ほか五名。別棟には藤井氏の母堂ほか四名もいるという。女特攻隊とでも言うのであろうか。

私たちの寝台も定まり、島の話や娑婆の話でつきない話題があった。とくに島の棍棒事件の話などは、皆が耳をそばだてて聞いた。お互いの話は尽きない。

ここの室長は日下部氏で、毎朝六時起床。朝礼を行い、のちにおたがいに挨拶する。老人をのぞいて四名一組の班があり、食事その他の当番にあたる。

みんなは編み物などの内職を熱心にやっている。これは外部と連絡があつて売るのだという。そうとうに熟練してすばらしい製品をつくっている。

ここは贅沢で開放的な生活である。運動も一日に数時間ゆるされていてバレーボールなどに興じ、健康そうである。

(注・すでに記したことだが、当時のブラジルの刑務所には一種の理想主義で運営されていた処が幾つもあった。特攻隊の一人で地方で服役していたAという男を牧師が慰問した文章が拓殖学校の校友誌に載っていたが、それによると、牧師が訪ねたときAはラジオ修理に近所にでかけ、刑務所を留守にしていた。やがて戻ってきたAに案内されて工作室を見せてもらったが、そこにはAが出所後にラジオ関係の技術者として生活できるための参考書、実験設備など一切が完備していたという。また刑務所の一隅には小さな家がいくつもあ

り、夫や息子が服役して生活が困難になった家族が、ここで生活しているのだという。体育館もすばらしく、毎週土曜日の映画はちかくに映画館がないので普通の住民たちも観に来るといふ。現在の犯罪が多発するサンパウロに住んでいる編者には夢のようなブラジルであった)

翌々日、サンパウロに残っていた私たちの家族が面会にきた。いろいろな差し入れの品を持ってきたくれた。大畑の敏美のいうには、刑期を終えたはずの私たちがなぜ釈放されないのか、いろいろ調べてもらったが分からない。私は「われわれをすぐには自由にさせない、なにか理由があるのだろう」と答えた。家内にも「金をつかってでも仕方ない。成り行きにまかせよう」といった。家内も承知した。

一方、大畑老は「いくら遣ってもいいから、なんとか釈放されるようにしてくれ」と大畑の叔母さんに頼んでいた。「病気で困っているのだ」と愚痴をこぼしている。たしかに家族の人たちも心配であろう。面会時間の三十分はすぐにすぎで、不満足のまま別れた。もってきた差し入れものは室長にたのんで皆に分けてもらった。

ある日、元リンスにいたという堂本という夫婦が大畑老をたずねて来て、サンパウロで八百屋をしているとかで、たくさん野菜をくださった。また地元の田中、斉藤氏らも面会に来てくれた。

日がたつにつれて、ここの様子も分かってきた。

四階建ての獄舎は、すべて政治犯、知能犯、思想犯などが入っていて、ほとんどがインテリ階級で、囚人とはおもえな

い人品の良い人ばかりである。どの監房も鍵をかける訳でもなく、開放的で自由で、待遇がよく、私のように冷たい独房や狭い獄舎を転々とした者にはもったいないくらいのものである。食事なども、ただでも上に位置するのに、さらに当番が差し入れものなどを調理して添えてくれるから、きわめて贅沢な食事になる。

朝の二時間は裏の広場が解放されるから、青年たちはキャチボールをしたり楽しんでいる。日光浴も充分すぎるほどできる。

夜になると、それぞれ勉学に励んだり、内職に精を出したりと余念がない。しかも内職でえた金ですきなものが購入できるのである。外部の同志によって、週に二回ほど定期的に差し入れがあつて、果物、菓子、その他の食料品が届く。・・・こう書くとまるで嘘のような生活だが、事実である。娑婆にいる自由はないが、何一つ不自由のない生活を送っている。婦人が入所しているという別棟については、ついに相見る機会はなかった。

ある日、法律屋の岸本次男氏がブラジル人とともにやってきて、「このまま入つていてもブラジルのことだから、いつ解決するかわからない。希望者がいれば、釈放に尽力してみよう」という。私が独房のとき隣で親しくした氏である。このときは、とくに依頼する希望者はいなかった。

やがて獄中で三回目の天長節をむかえた。(注・四月二十

九日)

特別室のつづきに病院予定室としてひろい部屋がある。そ

ここで、室長の久我氏の進行のもとに厳粛な式をとりおこなった。(碧水注・日下部氏は部屋の人たちと意見が合わないことがあって、階下のブラジル人と同室になった)

式はまことに厳粛なもので、これまで地方でとりおこなったものと、いささかの遜色もない。ただ、ご尊影と日の丸が掲げられていないことが、淋しく、悲哀の極である。

五月の中旬に、私とごく懇意な人が面会に来てくれた。中内派の釈放運動について情報をよせてくれた。

「彼らはすでに1000コント以上の金をつかっているが、まだはかばかしい成果は得られていない。以前の弁護士は金を遣うばかりだったので、ピットという人物に依頼している。彼も金を遣うばかりなので、面詰したところ、このままでは日本人たちに済まないと言って、おりからサンパウロに来ていたカンポグランデ市の親日派の検事のアルバレンガ氏に泣きついた。氏は日本人に理解をもっていて、ちかく司法大臣に会うから、そのことについて釈放の是非をたしかめ、できる限りの手を尽くしてみる、と約束されたという。このことは、まだ内密にしてほしい。というのも、もしアルバレンガ氏の尽力が実を結ばない場合、デタラメを言ったことになるからである」

そういう話だった。そして差し入れものをくださったって別れた。(碧水後注・この話は事実だった。約二カ月後、二十四名が中内派に迎えられて出獄した。私もその一人だった)

ある日のこと、私と大原はガビネツチに召還された。他の囚人とともに囚人車でつれていかれた。取り調べはなく、正

面と横向きの写真をとられて、またデテンソンに帰された。それらの日々にも同室の人の裁判とか、いろいろなことがあったが詳しくは記さない。

ふたたび島へ

在島の同志とは一蓮托生と思っていたのに、デテンソンに収容されて、もう七十日をすぎた。

「もう、ずっと此処にいるのか」と思っていた矢先、「吉井と大畑の二人は午後一時、島へ送るから支度をするように」

と言われた。いまは十時半である。急いで支度をした。同志との別れの挨拶もソコソコに、なんでもかんでも鞆に押し込む。

「達者で暮らしてくれ」「島の同志たちにくれぐれもよろしく」温かい言葉を背中に、外にでた。玄関にはすでに窓なしの囚人車が停まっっていて、外国人の共産党員たち十六名がすでに乗っている。私たち二名が乗ると、車はすぐに走り出した。

やがて市中をぬけ、海岸山脈のアンシエッタ街道をくだる。サントスにはいり、例の船着場で下ろされた。

思いだせば、はや二年前の今頃、八十一名の同志たちが不安と憔悴で、駅から徒歩でたどり着いた思い出の船着場である。人の世の変転は予測もできない。二年後のいまごろ、ここでは外国人の共産党員たちと一緒に、ふたたび此処に来ると、神ならぬ身の誰が予想できたであろうか。

船着場には二十名ほどの帯剣付き小銃をかまえた兵達が厳重な警戒をしている。もちろん、私たち二名ではなく、十六名の共産党員たちを警戒しているのだ。

新聞社各社のカメラマンたちが待機していて、われわれが到着すると遠慮会釈もなくカメラの強襲をあびせる。この船着場は道路にそっていて、あちこちへ行く渡船もでるので、群衆でごった返しているところだ。報道陣の興奮にまきこまれて、それらの群衆は口々にわれわれに悪罵をあびせる。共産主義は私にとって絶対に相いれない思想の一つであるのに、その私が「共産党!」「アカ!」などと罵られる。ああ、なんたる皮肉であることよ。

逃れるがごとく船底に駆け込むが、ふと気づくと、この船は二年前の、あの地獄船ではないか。しかもますますボロ船になっている。島へ慰問にきた人で、この船にのった人の話は聞いたことがない。私だけ、なんでこの船に縁があるのだろうか。

ようやく出帆した。驚いたことに、同船の外人囚たちはペラペラと聞いたこともない外国語で喋っている。奇異に感じて訊ねると、かれらはロシア人、ルーマニア人、エトワニア人などだと言う。道理で、外国語といっても、聞いたことのない発音だと合点がいった。

なお、一行には頬髯もいかめしい僧侶もいた。おおかた共産主義を伝道したというのである。おおむね彼らは知識人らしい態度だった。(注・当時、階層差別と貧困をなくすために左傾した神職者はかなりいた)

私たちがすでに島にいたことを聞いて、かれらは熱心に島

の様子を聞きたがった。私はいい加減に答えた。私には、もう最初のときのような不安も焦慮もない。それよりはやく着いて、懐かしい同志たちに再会し、積もるいろいろな話をしたい気持ちで一杯だった。

それにしても、われら臣道連盟の思想と共産主義ほど相反する思想はなからう。いわば敵味方である。この船は文字通り「呉越同舟」の船である。

夜半に船はアンシエツタ島についた。

人々は事務室にいれられ、丸裸にして身体検査をして予防注射をする。そしてあたらしい囚人服に着替えて、看守につれられて部屋へいく。注射をしているのは、以前から島にいる渡辺君であり、立ち会っているのが副所長のホルトガル氏（注・ママ）である。

私は同志の部屋にいれられると思っていたのに、案に相違して、あのヒゲの僧侶と同室にされた。大畑老もやはり共産党一味と一緒にされた。へんだと思ったが、大陸から病原菌でももちこんだ予防に一時隔離するのかと考えた。でも、すぐに眠った。

翌朝のこと、すでに顔見知りの看守がのぞいてニヤニヤしている。なにか言うが、ポ語をじゅうぶんに解さないわたしには分からない。いろいろと変なことばかりである。

そうやって三日すぎた。私は一計を案じて、看守がきたとき、「散髪をしたいから外にだしてくれ」と頼んだ。

それで事務所にいったら、具合よく、書記をしている間宮君がいた。かれはポ語に堪能で通訳もする。

「どうして我々二人を共産党と一緒に独房に入れるのか、副所長に訊ねてくれ」と頼んだ。

間宮君は副所長に抗議の口調でなにか喋っている。

やがて副所長がニコニコして、

「あんたたちは共産党と一緒にきたから、てつきり共産党員だと思った」

と笑った。結局、私たち二人は所長室に連れて行かれ、(碧水注・いまの所長は陸軍少佐である)大部屋からは尾崎、清水両氏も証言にあらわれ、結局、所長もニコニコして、「われわれの誤解であった。日本人と同居してよろしい」と許可がでた。

さて、私は毛布や時計などの所持品をだしてもらい、四号室の住人になった。大畑老は二号室にはいった。

懐かしい同志たちと再会して、しばらくは口がきけない。同志たちも私らが共産党と一緒にの部屋にはいったのを目撃して不審に思ったが、半年のあいだに思想が変わったのではないかと、とも思ったそうである。そして、多少は警戒している様子もある。半年のあいだに、微妙に、なにか変わっていることに気づいた。

聞いてみると、一号室は現在は清水君が室長で、二十二名。いずれも釈放運動支持派である。四号室は尾崎さんが室長で、信念をかえない人々、二十一名。まったく分裂状態で、ほとんど絶交状態、おたがいに口も利かないという。ただし、絶対的に人数が減ったので、あらたに炭焼き班などができる、合流せざるをえないという。

四号室は谷田、河島、尾川、青木氏などの旧友をはじめ、お互いに話は尽きない。半年のあいだの異変は、わたしには驚くことばかりである。

三日ほどして健康診断があり、医者は「呼吸器に異変があるから入院せよ」という。私が咳をするのは以前からで、入院などごめんだ。通訳の渡辺君がやかましく言うが、私は逃げ戻ってきた。そして、以前のように野菜班に入れてもらった。いまは河島氏が班長だ。

畑にいつて呆然とした。

私がいたところ、あれほどゆたかに繁っていた野菜は見る影もなく、いまは雑草がボウボウと繁っている。そのあいだに見えるも哀れな野菜がヒヨロヒヨロとのびている。ああ、人々の心が変わると、野菜畑までこうなるのか。荒れた心の象徴のように、荒廃した畑だった。

変わったことはまだあって、いまは各班にも監督も兵隊もつけない。また、椰子細工は以前は没収されたこともあったが、いまは上手な人の作品は所長や副所長までが注文し、公然と作っている。また、以前は少年囚の担当だった地引き網は青年たちが担当している。潮のかげんで夜半に網を仕掛けることもあるが、不平もいわず従事している。実に感心なものである。

二号室には私が親しかった庄司さんや塩崎さんなどがいる。話をしたいのは山々だが、四号室の仲間たちがそれを好まない。こうした状況で同志が反目するのはまことに嘆かましいことだ。とにかく自己と反対の意見を主張する者を敵視するのは、共通の慣性である。

最近は個人的な釈放がたびたびあって、そのたびに同志が減る。しかし、ずっと以前から釈放の通知に接したのに、いまだに釈放されない人たちもいる。それらの人たちが、焦慮と不安にとらわれ、言動にいささか調和を欠くようになるのも、理解しなければならぬ。

(注・このあと数ページにわたって、碧水は自己の信念と敗戦派への攻撃を克明に記している。この部分は碧水にとつてもつとも「云いたいこと」であったかも知れないが、すでにあちこちで記してある事と内容は同じなので、省略した。なお、終戦後七年目に『ブラジル時報』に載せた「涯しなき思想旋風を衝いて」という論文について、『移民の生活の歴史』半田知雄著の685ページに紹介されているが、この手記に書かれている信念をさらに二年後に纏めたものである)

人身保護令によって釈放される

昭和二十三年(1948)八月二十八日、この日こそ私の生涯忘れ得ぬ良き日である。

中内派の運動がようやく功を奏し、まず、二号室の全員が釈放されると聞いた。「それでは残る人も少なくなる」と思っていた矢先、四号室からも若干が釈放されるという。反対運動の先頭だから、私は入らないと思っていたが、私も釈放される一人だという。「まさか」という気持ちだった。二十一名の大量釈放となる。すぎた日にデテンソンで聞いた話が現実となったのだ。

しかし、それなら全員釈放でなければ辻褃があわない。と

にかく私は彼らの運動に猛反対した。そして私とおなじくらしいの猛烈な反対派もまだ四、五人いる。しかし、とにかく出所の準備をした。

私はここに来てまだ二カ月だから支度は簡単だった。長い人は支度がたいへんだった。同室の人たちと辛い別れをした。残留する人々に済まないような気持ちで一杯である。でも、私のような者でも釈放されるのだから、ほかの人たちの釈放も、そう遠いことではないと、自分を慰めた。

私は建物をでて、波止場に降りていった。そこに小柄な人が立っていて、「ご苦労さまでした」と挨拶している。あとで知ったが、この人が中内氏であった。

モーター船に分乗し、エンセアード海岸についた。ここにも中内派の人が三、四人迎えに来ていて、目に涙をうかべながら釈放を喜んでくれる。

すでに準備してあった食事をご馳走になる。いつも変わらぬ同志の温情に感謝した。

(注・碧水はこれまでの手記で中内をさんざん罵倒している。結局は中内派の尽力で釈放されたのだが、手記の内容を改竄せずにそのまま残している。このようなところに、彼が書いたものの資料的な価値もあるのではないか)

大型トラックに幌を張った車で夜半に出発した。やがて峨々たる海岸山脈の踏破が待っている。去年ここを通ったが、危険な断崖の裾を曲折する険阻な難路である。

車中で人々の私語するのを聞けば、「ようやく中内さんの運動が功を奏した」「ながい苦心が報いられたのだ」等々。私

は現にこうやって釈放されているのだが、やはり腑に落ちないことがある。中内一派が金を遣いすぎたという噂のこともあるし、まだ残留している人々がいるのは何としたことか。運動に反対したからというのなら、私などその筆頭である。とにかく、そのときはじつに複雑な、変な気持ちであった。八分通り山をのぼったところで、車が動かなくなった。カーブを曲がるところで、車体の傾斜がひどく、発火しないという。とにかく全員が降りて、押したりしてみるが、なんとしても動かず、そのうち運転手も匙を投げた。

山の、夜明け前の寒気はきびしい。防寒の用意はないので、みんな鳥肌をたてて震えている。木片を拾い集めて焚き火をしようとするが、燻るばかりで燃えない。

三時間ほどでようやく夜が明けた。危険をおかして、どうやら車を後戻りさせた。ようやく車は動いた。一同ホツとする。

それからは無事に走り、タウバテ市に到着。すでに準備がととのえられていて、広い家で沢山のひとと食事をする。皆さんが釈放を祝ってくれた。夜中揺さぶられ、皆は疲れているにもかかわらず、どの顔も喜色満面にあふれて、元気である。待ちわびた今日が、まるで夢のようなのだ。私もその一人だった。

十分に休息して、午後五時の汽車でサンパウロへむかった。

車中で三人の人がヒソヒソと相談している。「せっかく出獄しても、サンパウロで郷里に帰る金も、土産を買う金もない。どうしよう」といっている。「釈放に尽力してくれた中

内さんたちにこれ以上無心するのは気が引ける」とも言う。漏れ聞いた私とて懐中いくらもない。そこで、「サンパウロに着いて、知人から借金をするから、それを分けて帰ったらどうか」と提案した。それで三人は安堵した。

われらを乗せた汽車は午後十時すぎに中央線の始発駅のノイテ駅に到着した。(注・ノルテ駅のこと、1875年完成。現在はルーズベルト駅)

駅前には去年釈放された富塚氏をはじめ多数の方が出迎え、しばらくは感激の坩堝と化した。幾台かの自動車に分乗して、吉迫旅館に入った。ここでも、私には身に余る歓待をうけた。

富塚氏の歓迎の挨拶に続いて、釈放運動のこれまでの経緯の説明があった。つぎに釈放された側から渡真利君がたつて謝辞を述べた。・だが、私は面はゆい気持ちであり、また、全部を信用する気になれない。まだ二十三名が残っている。どういう手続きでわれわれが釈放されたのだろうか？ やはり疑問がのこる。

盛大な宴もおわり、各自は部屋にひきとり、楽しい夢をむすんだ。

翌朝は中内氏の指示で本署に出頭し、釈放の書類に署長の署名をもらい、これですべて済んだ。

私は知人宅をおとずれ、釈放になったことを述べ、事情をはなして、いくらかの借金をした。これを、前記の三人に渡した。

私も帰心矢のごとく、今夜の汽車で発つつもりで中内氏

にお別れの挨拶をした。

氏のいうには「もう数日ゆっくりしていったらどうですか。ところで吉井さんの地方の人たちは釈放運動にすこしも協力してくれません。あなたが帰ったら、すこしは協力してくれるように話してくださいませんか」

「わたしは二年半も不在だったので、いろいろな事情にもうとく、ここではなにも約束できませんが、帰ってからのこととしてください」

「分かりました」

「ところで、どういう手続きで釈放されたか知りたいのですが」

「これが、あなたの釈放令の写しです。もって行って良いです」

とポ語の書類をくれた。

「それから、あなたが帰ることはすでにリンスに電話しましたが、きょう発つのなら、あらためて連絡しておきます」

と、なかなか親切である。

駅にいくと、ノロエステ線、パウリスタ線とも、釈放されて帰る人々の顔がみえる。車中は賑やかであった。

私は、(たしかに中内たちのおかげで釈放された。だが、一方ではもう一千コントも遣ったという話もある。私たちが出所したので、それを宣伝してまた金を集めるとすると容易ならざることだ) などと思いは乱れる。

九月二日、午前十一時半、リンスに着いた。わたしの二年半の苦難もようやく終わった。駅頭は出迎えの人で埋まっていた。私の顔は涙でクシヤクシヤになった。

残留同志の釈放にうごく

家で寛いで、はやくも十日あまりが過ぎた。しかし、わたしの脳裏を去らないのは、まだ島にのこっている同志たちのことである。かつてデテンソンにいたとき某氏から聞いた、中内氏が人を介してアルバレンガ検事に釈放のことを依頼したという話が脳裏に焼きついている。私はカンポ・グランデに行くことにした。

この話をすると、中村万志、河野梅士、中松弥保の諸氏も同行するという。

パラナ河の州境をこえてマツト・グロツソ州の首都カンポ・グランデの石川旅館に入った。

そこで、当地の事情など知り得た。それによると、カ市の臣連はなんらの弾圧もうけず現在も健在とのこと。親日派のア検事は顧問格になっている。さらに日本語学校も公然と開校していて、現在の教師は島にもいたことのある吉田秀樹君で、同君は柔道の道場も開いている、とのことだ。

それで、まず吉田君を訪問した。そして彼の案内でアルバレンガ検事宅を訪問した。軍の関係の検事というので厳めしい人物を想像していたが、お会いすると優しい温厚な人であった。

ア氏の説明によると、サンパウロのブラジル人から「日本人が法律の知識がないため、金をだまし取られたりして困っているから助けてほしい」と頼まれた。それで調べてみる

と、司法当局にはこれまで一通の釈放嘆願書も来ていないことが分かった。いろいろな書類を取り寄せて調べたが、人身保護令を適用すれば釈放が可能と判断し、その手続きをしたのである。

それで、私は、

「なぜ、まだ二十一名がのこっているのですか」

と質問した。

「私はべつに報酬はとっていないが、申請には一人一人の書類に印紙を添えなければならぬ。ナカウチの頼んだブラジル人が持ってきたのが、二十一人の名簿と、その分の印紙の金額だった」と説明された。

さらに、

「きのうトマリが来たので、その話がでて、印紙の金をもつてくれば、あとの人たちの申請書を提出する」と言ったところ、『サンパウロに戻って相談します』とのんきな事を言っていた」

それで私たちは、

「印紙のお金のことは早急になんとかしますから、二十一名の釈放をよろしく願います」

と頼んで、辞去した。

この日の夜、渡真利君と私の釈放を祝って、当地の臣連の方たちが盛大な宴会を設けてくれた。アルバレンガ氏も招かれ、席上、日伯融和の熱のこもった演説に感銘をおぼえた。当地は沖縄県の人が大半である。

(注・アルバレンガ検事の好意的な態度は、本来の精神運動としての臣連に理解をしめしていた為と推測される。カン

ポ・グランデ在住の宍戸さんが書いていたことだが、カンポ・グランデでも特攻隊志望の若者たちがいたそう。決起寸前にそれを知った日本語の先生が涙ながらに諫め、事なきを得たという。もし、そのときカンポ・グランデでもテロが起きていたら、おそらくアルバレンガ検事の友好的な態度は望めなかっただろう。そうになると、島の囚人たちの釈放もまだ解決しない問題になっただろう。歴史の歯車はちよつとしたことで狂つてくると実感した。あのときは宍戸さんの随筆をなげなく読んだが、そのときの日本語の先生の名前だけでも知りたいような気がしている。

いちど戻り、印紙分をもつて再度カンポ・グランデにいった。ミランドポリスの支部もぜひ協力したいと言われ、仁熊義夫、岡畑盛吉両氏も同行した。

そのときア氏は「三十日以内に釈放される」と言ってくださった。その言葉通り、二十五日ほどすぎて、ア氏より同志釈放の電報をいただいて、私はサンパウロに急行したのだ。サンパウロに着くと、まず吉川老中佐を訪ね、この旨を報告した。老中佐も愁眉をひらかれ、「この日を一日千秋のおもいで待っていた」と言われた。(注・吉川はすでに釈放されているので、自宅を訪ねたのであろう)

私たちは交代で二週間も毎日駅へ出迎えにいったが、会えない。釈放について土地の警察との行き違いがあったことが分かり、ア氏は公判を抱えているのでサンパウロ第二軍団勤務のベネジット・カルロス中尉に手紙を託され、中尉は土地の警察署と話した。土地の警察は「強硬派を全員釈放した

ら、また特攻隊が暴れないか？」と危惧したそうだ。中尉は「釈放は検事命令だ」と説明し、行き違いを解決してくれた。こうした波瀾はあったが、私たちはサンパウロの山田、前田両旅館に分宿して喜々としている同志たちと会えたのである。

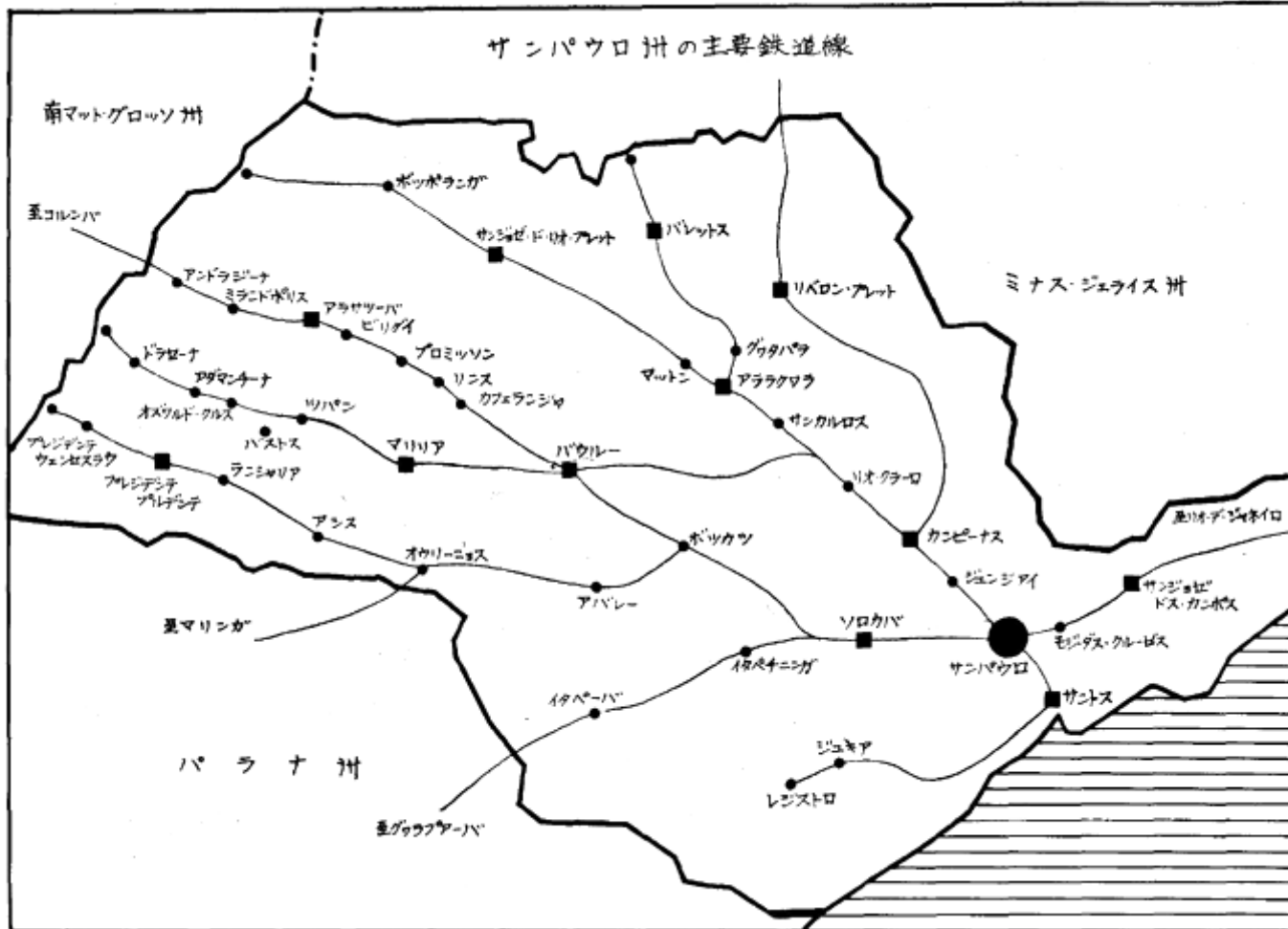
(注・中内たちも当然、釈放に動いていて、島からサンパウロまでの手配をしたと思われる)

私はこうした経緯をいっさい喋らず、ただ釈放を祝福して別れたのであるが、あとで聞くと「釈放されたのはその時期が来たからだ」「釈放されたのは祖国の力だ」などと放言する人もいたとか。私はアルバレンガ氏とカルロス氏の恩を忘れないために、こうやって事実を記している。

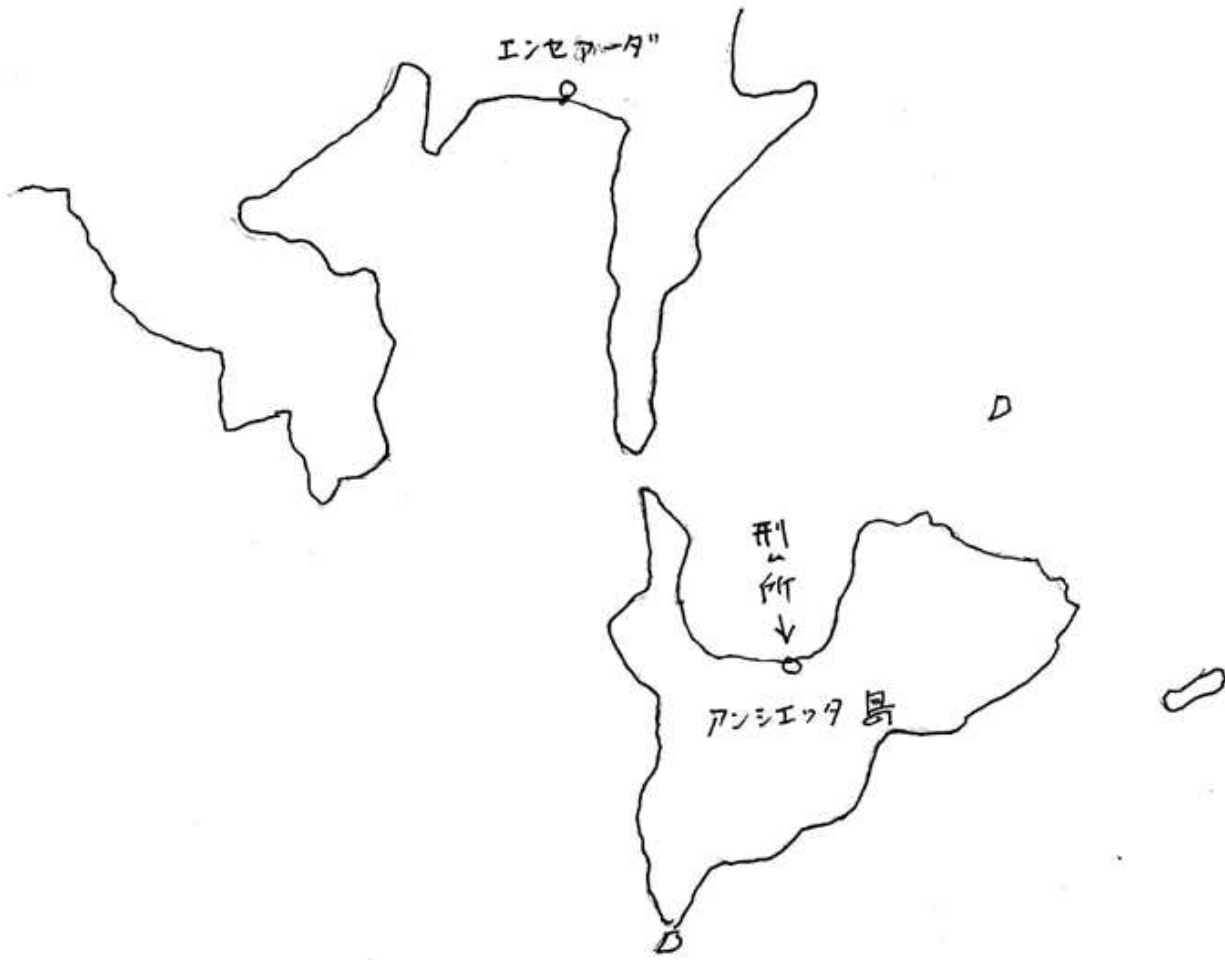
ようやく私はこの手記を終えようとしている。今は昭和二十七年（1952）二月である。（終）

(醍醐・後記) 碧水の手記は、このあと付録のように「涯しなき思想戦を衝く」という、四百字詰め原稿用紙に換算すると三十枚でいどの論文がある。内容は勝ち組としての信念と敗戦派への攻撃である。荘重な論文を書こうとした為であろうか、ひどく難解な文章だし、内容もすでに碧水が随所で述べていることなので割愛する。この「涯しなき思想戦を衝く」は独立した論文として終戦後七年目のブラジル時報の1955年の天長節奉祝特別号に掲載された。その内容は半田知雄著「移民の生活の歴史」に紹介されている。この論文が載ったブラジル時報の社長は黒石清作で、社会政治警察の留置所でいちじ碧水と同房だったことは読者もご記憶とおもふ。ぶらじる時報は戦前からあった新聞だが戦後は戦勝派の新聞として復刊し、勝ち組の減少とともに廃刊した。なお碧水の手記はブラジル製の日記帳に細字でびっしりと書かれていて、製本が日本と逆なので十二月三十一日の日付のページからはじまり、一月十六日のページで終わっている。四百字詰め原稿用紙にして約六百枚近い分量かと思う)

サンパウロ州の主要鉄道線







現在のアシエッタ島



收容所跡

撮影

古城氏



当時の写真



勝ち組の受刑者たち
(撮影者不明)



面会人と・



おそろく、
釈放時の記念撮影



(終り)